
妖犬友人帳

あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖犬友人帳

【Nコード】

N9513W

【作者名】

あや

【あらすじ】

時は現代 殺生丸とりんの娘である月詠は後を継ぐために、そして強くなるために
殺生丸の牙でできた刀 天響牙を腰にさし 阿咩とともに旅に出た。
そんなある日 月詠は妖の見える人間の少年と招き猫と出会う。

第1話 出会い

とある田舎 高校生が走っていた。ジョギングしているわけではない。追いかけられているのだ。

人には見えない妖にだ……

「ぜえ……ぜえ……ニヤンコ先生め……後で覚えとけよ……」
高校生の少年、夏目は息を切らしながら自称用心棒に愚痴を零す
「レイコく友人帳よこせ」

「うわっ!？」

妖の手が伸びる……もうだめかと思ったその時だった

ザシュツ

「ぎゃああああああああ」

「え?」

なんと妖の方が傷ついたのだ。夏目は慌てて後ろを振り向いた。そこにいたのは自分ぐらいの女の子、でもただの女の子じゃなかった。だって側には鞍と轡と手綱をつけた双頭竜、服装は水色の花の模様が入った白い着物に青い袴を履いており、白銀の毛皮を羽織っていた。

手には異様な雰囲気の刀があり極めつけは金の瞳、白銀の長髪、頭の犬耳だった。

そして彼女は言う

「人を傷つけるのなら容赦しないわよ」

その睨みは怖かった

「ひいひいひい」

妖が去っていた後彼女は刀を鞘に納めた

「大丈夫？ 災難だったね」

「あっ……ありがとう……俺は夏目。君は……妖？」

夏目は疑問に思ったことを聞いた。すると彼女は答える。

「私は月詠、この子は阿吽よ。半妖なの」

「……半……妖……」

ガサッ

「片方が妖でもう片方が人間ということだ」

「ニヤンコ先生つどこ行ってたんだよ！？ 大変だったんだぞ！！」

そこに現れたのは饅頭のごとく丸々太った……猫だった。
月詠は思わず

「……猫？」

「猫じゃなあー！ ！ ！ これでも上級な妖だぞ！！」 「いっー応本来の

姿は妖らしいけどね………」

「……なるほど……スンスン……たしかにそんな匂いがするわね」

月詠はニヤンコ先生を持ち上げて匂いを嗅ぐ

「月詠って犬の半妖なのか？」

「そうだよ、お爺さまと父上が犬の大妖怪なのっ強くてかつこいよー」

その言葉にニヤンコ先生は興味を持った。

「ほう……どんな名のだ」

「お爺さまは鬪牙王で父上は殺生丸よ」「何い!？」

「ど……どうしたんだよニヤンコ先生」

「そいつらはまさに西国を治める大妖怪、犬妖怪の王と言っても過言でもないわっ!!!」

「ええっ!!!」

「そうだね……お爺さまはその実力と心の広さで慕われていたらしいし、父上は力は受け継いでいて勝負になると本当に強いからね」

「でもどうして君たちはここにいるの?」

「さっきの通り父上は西国を治める大妖怪、唯一の子である私が継

ぐんだけど……………」

「なるほど半妖だと人間よりは強いが妖より弱い、だから修行に来たのだな？」

「ええ……ここにはたくさん妖がいるわ……だからできる限り強くないと……………この天響牙と阿咩と一緒にね」

そついいながら刀を握りしめた。

「天響牙？」 「妖刀だな」

「私が生まれたとき父上が自分の牙で刀を作って欲しいって刀鍛冶妖怪に言ったの……………それが天響牙よ」

「先生、妖の牙で刀ができるものなのか？」 「特殊な技が出せるがな」

「そんなわけで当分ここに暮らすからよろしくね」

「ああ……………よろしくな」 「よろしくするなら七辻屋の饅頭な」

こうして夏目達は出会った。この出会いが今後どうなるかまだ誰も知らない。

第2話 ツユカミ

星の綺麗な夜だった。月詠は阿吽に乗って夜の散歩に出かけていた。

「綺麗な、阿吽」

「ぎゃう」

夜の散歩を楽しんでいたそのときだった。

「！」

「どうしたの？何が在った？」

とりあえず月詠は阿吽の行きたがっている方向に進んでみた。でもそれが災難だったかもしれない。

「出て行け酔いどれ中年妖怪共！！！」

「中年！？」「ひゃー」

「！」

耳に響く夏目の怒声とニヤンコ先生・・・・・・・・と翁の面を被った小さな妖が飛んできたのだ

月詠は慌ててキャッチする。

「なっ夏目！一体何が・・・」

「えっ月詠！阿吽！・・・・なんでここに」

どうしているのか聞いてみると阿吽が行きたがり行ってみると夏目の怒声とニヤコ先生達が飛んできたと説明した。

「そうだったのか・・・阿咩もごめんな・・・実はちよつとしたわけがあったんだ」

夏目はこの小さな妖ツユカミの名前を返すため友人帳を開いた。名前はあったのだが祖母レイコのせいでもう一枚ひっついていて無理にとれない。

だからひっついていてる奴の名前と同時に返さなくてはいけない。今日は遅いので明日に備えて寝ようとしたが二人が酒盛りし始めたのだ。

しかも夏目の上で・・・

「怒るのも無理もないよ」

「なんだとおっ」

「とにかくわたし達も手伝うよ 夏目寺子屋もあるでしょ?」

「ありがとつ月詠」

「恩にきるよお嬢ちゃん」

こうして夏目達の妖探しが開始された

第3話 ツユカミ

「こっちじゃ お嬢ちゃん、この七つ森の奥の祠に私は住んでるんじゃ」

そう言いながらツユカミは月詠と阿吽を案内する。

夏目は学校なのでニヤンコ先生と一緒に居なかった。

そして二人は夏目達が来るまでの間、レイコが名前を奪った妖はどんなのかを話したりした。

しばらくするとお上品そうなおばあさんが歩いてきた。

おばあさんは水の入ったガラスのコップに一本の花を生け、蜜柑を一つ供え

手を合わせた。彼女が帰った後月詠は聞いてみる

「誰？あのおばあさん」

「ハナさんじゃよ、彼女は小さい頃からよくお参りに来てくれるの」

ツユカミは本当につれしそうに話した。唯一ここにお参りする方らしい。

すると遠くから夏目とニヤンコ先生が現れた。

ツユカミと月詠は祠の近くでこっちこっちと手を振るが夏目は青ざめた。

「祠に住んでいるって………あんだ神サマだったのか!？」

青ざめるのも無理も無い、昨夜の無礼三昧……崇られる……
かと思いきや

ツユカミは笑いながら言った。

「いやいや そう呼ばれているが元は祠に住みついた宿なしの物怪だよ」

彼が言うには昔旱魃が起こり村人は祠に祈った。次の日偶然雨が降った。

村人達は露神と崇め自身も力に溢れ、姿も立派になったそうだ。

……でも信仰薄れるにつれて縮んだのだ。今はハナさん一人だけだろう。

すると夏目はコートのポケットからある物を出した。それは蜜柑だった。

「……蜜柑あげようか」

「ふふ、蜜柑はもうあるよ」

そう言いながらハナさんから貰った蜜柑に触れる。

「さつきそこで上品そうなおばあさんに会ったよ その花と蜜柑はあの人が？」

「おお ハナさんというんだ ここに拝みに来てくれる人だ」

「よく来るんだって」

ツユカミと月詠の言葉に「へえ」と答える夏目だった。

場所は代わって夏目の家、ツユカミは自分の体には大きい筆を持ち、似顔絵を描くそうだ。

ちなみに例の妖怪は友人帳で呼べないらしい。顔も名前も知らないから……

そして似顔絵が完成したのたが……

「名は忘れたがこんな奴だったぞ」

言うならば腹に参の字が書かれたキュウ太郎だった

「……わたし知ってるオバケのキュウ太郎！」

思わず叫んでしまう月詠 夏目達は冷静に言った

「……毛は無かったの？」

「毛は無かったの」

「これあてにしているのか？」

「これしかあてにできないの」「できないね」

「……でこのキュウ太郎はどこの沼に住んでいるんだ？」

「いや、そいつは水妖怪ではなくて 三ノ塚の山に住んでいたぞ」

「「ぷっ」」

もう三人は限界だった。

「ぶはははは」

「あはははははは おっ・・・お腹があ・・・」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「お前さん達・・・」

その日から三ノ塚でキュウ太郎（仮）探しが始まった

夏目とニヤンコ先生は近くに住む妖達に全然似てない似顔絵見せながら見たことないかと聞く。

ツユカミは鳥に、月詠は阿吽に乗って探したり、時々夏目はレイコに間違われて襲われて大変だった。

そしてある日 いつものように月詠は阿吽とともに探していたその時だった。

「おじよーちゃん！見つけた！キュウ太郎が見つかったんだ！」
ツユカミは大きい声で見つけたことを知らせる。月詠は急いで聞いた。

「どこなの!？」

「三ノ塚におったわい、とにかく夏目達も呼ぶぞ」

「わかった 阿吽に乗って こっちの方が速い」

月詠とツユカミは阿吽に乗った後 ものすごい速さで夏目の家に向かった。

コンコン

「夏目、夏目」

「月詠 ツユカミさま」

「夏目、見つけたぞ」

ようやく見つかった。夏目達は用心のため丸鏡持って三ノ塚の山に行くことになった。

三ノ塚についたが逃げた後だった。でもまだ遠くへは逃げてはいないはず

夏目は分かれて捜すかと言い出したそのときだった。ニャンコ先生と月詠が何かを感じ取った。

やばいのがくると・・・

「何！？そんなのかまっていたらキュウ太郎に逃げられる・・・

ニャンコ先生、頼めるか？」

「喰ってもいいなら」

「妖怪も食べるのか・・・・・・？」

「わたしもキュウ太郎の臭いさえわかれば捜せるのに・・・」

「・・・臭い？」

ツユカミが言うには陰を伝って移動する妖だそうだ。ふと瞬間だった

「まいりました」

遠くの木の下に妖が現れた。参りましたと言いながら・・・

第4話 ツユカミ

「まいりました」

木陰に妖がいた。夏目と月詠はなんだと思っ。

「まいりました」

いつの間にかその妖は近くの木陰に居た。夏目はゾツと寒気がした。次の瞬間その妖は消えた。……消えた……そう思ったその時だった

「まいりました」

夏目達の立っている木陰に現れたのだ。すると夏目は気づく……妖の腹にキュウ太郎の一番の特徴である参の文字あったのだ。

「こいつがキュウ太郎!？」

「そう!あいつ!！」

「似てないっ!全然似てないわ!！」

「ヘタクソ!！」

ニヤンコ先生はそう言いながら攻撃しようとするが

ばしんっ 「ぎゃっ」

返り討ちにされてしまった

夏目と月詠はツユカミに言われて鏡の反射光で目眩ましをしようとするが妖に捕まってしまった。

でもそのとき、夏目の頭に何かが入り込んだ。それはこの妖と祖母

レイコの出会いだった。

「夏目」

「う……先……生……月詠……」

「さがれ」 「くらえっ！」

「ぎゃあ」

ニヤンコ先生と月詠が作ってくれたスキをつき夏目は妖とツユカミの名を返す

ぱんっ

二人の名が書かれた契約書を銜えて言った

「「ススギ」「ツユカミ」名を返そう」

ふっと二人の名が書かれた契約書に息を吹き込むとしゆるしゆると名前がススギとツユカミに入っていた

こうして二人の名は無事に戻った。しかし翌日ツユカミの元へ行ってみるとツユカミはさらに小さくなっていった。

唯一信仰してくれたハナさんが逝ってしまうのだ。彼女が逝けば彼は消えてしまいうらい。

夏目と月詠は代わりに自分たちが信仰する、毎日来ると言った。でもツユカミは「これでいいんだ」と言った。

「ありがとう夏目、月詠嬢ちゃん、斑、阿吽」

露神は消えていった。空から雪が降る……明け方まで……
・彼はハナさんに会えただろうか……

そして夏目ずっと雪の中に立っていたので熱を出した。ニヤンコ先生に今ならパクツといけるといわれ、体はだるいはずなのに大げんか勃発、当然塔子さんに怒られた。すると

ガラッ

「お見舞いに来たよー大丈夫」

「月詠っ！……阿吽！……」

「実は犬妖怪一族に伝わる薬持ってきたんだっ！私も風邪引いた時は飲んだし、これさえあれば一発だよ！」

「あ……ありがと……」

夏目はお礼をいいながらその薬を飲もうとしたその時だった。

「まっまてい!!夏目」

ニヤンコ先生は慌てて止める

「え?」「ごくん

「ぐはっ!?!」

どさっ「夏目!?!」 夏目は倒れてしまった。妖たちの薬は

苦い薬草 妖の生き肝に 毒蛇の生き血

良く効くのだがまずすぎて良薬は口に苦し以上なのだ。

「わーっ夏目ーっ!?!」

夏目の熱は治ったが違う意味でしばらく寝込んだとさ。

第5話 八ツ原の怪人

「　」

天気の良いある日、月詠は阿吽と散歩していた。まだ寒いが運動すれば温かいからだ。

するとどこからともなくドンドンと太鼓を叩く音と「そのけーそのけー」という声、そして「やめろー」と怒る夏目の声だった。そこには通学途中の夏目、しかし前には太鼓を叩く一つ目妖、後ろには紅い番傘をさした牛妖怪がいた。

月詠は思わず話しかけてしまう

「何やってるの？夏目」

「……………月詠助けてくれ」

何でも二人が住む八ツ原に妖怪退治きどりの人間が現れたらしい。そこで噂に名高い夏目にそいつを退治してもらおうした。当然、夏目は断ったのだがこの後が大変だった。

誠意を見せるため送り迎えすると言い出したのだ。

「……………わかった。邪魔しないように彼ら見張るから」

「ありがとう」

夏目は月詠に心から感謝した。

ざわざわ

「おはよー」

「ほおーこれがガツコウですかあ」

体育の時間

「夏目様ー」「がんばれー」「ほらほら邪魔しないっ」

がりがり

「「きゃつきゃっ」「「あいつら・・・」

二人は地面に大きく呪と書いていた。そのときだった。

「「じらあっ」

ドコツバキッドスツゴスツ

月詠が父親ゆずりの拳骨を喰らわせたのだ。夏目は思わず青ぞめた。

「（何やってんだか・・・）」

ふと夏目は何かに気づく。少し離れた所に自分と同じように窓の

外を見る黒髪の男子がいたのだ。

すると男子もこっちに気づいたのか目が合った。そして男子はにや・

・と笑い

教室に入っていった。

「(・・・何だ？この感じ・・・)」

夏目はそのように思った。

第6話 八ツ原の怪人

放課後……まだいる一つ目と牛に夏目は話だけは聞くと
言うとう降参した。

妖怪退治きどりの人間はいつも突然強力な霊波を放つので姿は
見れないらしい。

人の匂いはするようだが……

夏目は思う、妖怪のせいで周りになじめない人なのか……と

「わからなくもないな」

「？」

その時だった。

にゅうと足に伸びる長い手、それを皮切りにたくさんの小妖怪が現
れ、

夏目と月詠に襲いかかる。

「人間だ」

「人間がいるぞ」

「おのれ人間め」「我らを追い出しに来たか」

「わ……違……」

「ちよっ……放してっ」

「ニヤ……ニヤンコ先生……」

「やめなさい……いっ……」

その様子に一つ目と阿吽は慌てて止める。

「こら違うぞ そのお方達はなあ」

するとニャンコ先生から鼻の穴や耳から脳を吸われると聞いて

「わーーーーーやめるセクハラ妖怪共くくくくつ／＼／＼／＼／＼／

「ちよつ・・・あんた達さわんないでよ変態つ／＼／＼／＼／」

「せくはら？」

「知らんのか セクシャルハラスメントの略だ」

「やめ・・・や・・・やめさせるってんだ このエセニャンコ」
「いい加減にしなさいっこの馬鹿猫っ」

ゴッ バキッ

ばったり

二人の拳によりニャンコ先生は屍のごとく倒れた。

「はぁーはぁー次は、どいつだ」

「次やったら父上直伝の毒華爪喰らわすわよ」

「ひいつ」おかげでなんとか小妖怪たちは離れてくれた。その時だ

ピシッ なんだか空気が変わった。

「来た 奴だ」

「夏目つかまれ」

カツ

「ニャンコ先・・・」ニャンコ先生は本来の姿になると夏目を乗せて木の天辺まで飛んだ。

月詠も阿吽に乗り空に避難した。

ほかの皆はなんとか逃げられた様だ。月詠の耳と鼻でわかったことだ

とにかく夏目の答えは

「とりあえず相手の顔は拝んでみたい。」

少したったある日、夏目とニャンコ先生が歩いていた。月詠は話しかける。

すると夏目は有力な情報を話した。

「実は同じ学校の田沼って奴が妖見えるらしいんだ・・・八ツ原近くに住み始めたらしいしな」

「なるほど……たしかにその田沼って人みたいよね」

そしてしばらく歩くとそこにいたのは黒こげの中級妖怪、一つ目と牛だった。

「夏目様……月詠様……」

「わっどうした中級!!」「黒こげじゃないっ!!」

「くらってしまいました まともに……」

二人がいうには退治人はまだ森の中だそうだ

夏目は思う

どうしてこんなことが出来るのか……と

第7話 八ツ原の怪人

とにかく夏目達は田沼らしき退治人を追うことになった。

しかしそのとき、しゃんしゃんと鈴の音が何処となく鳴った。現れたのはバカでかい馬のような妖だったのだ。

「(でかつ!!)」夏目と月詠は心の中で思う。

なんでもこの妖も名を返して貰いに来たようだった。

でも、あいにく立て込んでいる。ニヤンコ先生が勝手に

「人退治の算段をしている」と言った。

すると妖・三篠はお手伝いすると言い出した。

「それに先刻 私の家来が主に助けてもらったそうで」

そう言っただけ見せたのは一匹の三本線のかわいい蛙だった。

夏目とニヤンコ先生には見覚えがあった。

「あ、三本線の蛙……」

「……かわいいわね……」

「良いことはしとくもんだな夏目」「先生は黙っててくれ」

すると黒こげの中級たちは夏目の敵が森に潜んでる、ご成敗を！
!と言ってしまったのだ。

「承知」三篠は一気に飛んでいく。夏目達は慌てて追いかけた。

夏目はどこだ 早く見つけないと 走りながら焦る。すると人影
が見えた。

きつとあれだろうと思ったそのときだった。

「夏目っ！上!!」「!!」

月詠の言葉に上を見ると三篠が今にも人影を襲いかかるうとしていた。

夏目は身を挺して庇うように抱きつく

ニヤンコ先生は叫んだ

「！ 夏目命令しろ 奴の名を！！」

はっ

「止まれミスズ！！」

何も痛くない……夏目は目をゆっくり開けると三篠は

「ぐ……」

止まっており、そのままずしんと地面に倒れた。まるで月詠の叔父、
犬夜叉の
おすわりみたいだ。

とにかく無事で良かったと胸をなでおろす。すると

「……一体どうしたんだね少年」

田沼ではなく眼鏡をかけたお坊さんだった。

「おい」

「「！」「」

「お前達、もう一度包み隠さずきちんと話してみてくれないか」

「嘘ついたら本気の毒華爪喰らわすわよ」

先ほどのお坊さんは新しく来た廃寺のお坊さんで性格は勤勉、しよつちゆう払いに

来るようになった。そして霊力も強いので夏目の力で退治しちやえと考へたらしい。その言葉に夏目と月詠は呆れる……。

「お、お前達ねえ……」「……馬鹿みたい」

「ひい申し訳ございません!!」

「これ、少年さつきから何をひとりで喋っているんだい？」

「「「「「(え!?)」「」「」」

お坊さんは説明した。自身の息子が敏感で体を壊すと……なのに周りは

妖が出ると有名なので気休めにお清めしていたのだ。

夏目の後ろで「見えぬとは!!」とぺちやくちや喋る中級たち

ニヤンコ先生は修行で身に付いたのだろと言った。

夏目は苦笑いしながらほどほどしてやっってください。と言った

お坊さんは見えているのかねと聞いた。夏目は無言になってしまった。しかしそんな彼にお坊さんはもう何も聞かず、やさしく言うてくれた。

夏目は思わず名前を聞いてしまう。

「……………ご住職お名前は？」

「ああ私、姓は田沼と申します。」

お坊さんは田沼のお父さんだった。

翌日、学校で中級たちが扇子を振り、月詠と阿吽が注意する。その様子を田沼が見ていた。

「見えるのか？」「え……………」

「グラウンドに変な物でも見えるか？」

夏目の問いに田沼はもう一度窓の外を見て　フツと笑った。

「いや。　でも一瞬何か変なものの影がみつつ見えたような気がしたんだ

何故かだけど……………透けてだけど犬耳の女の子が見える」

田沼は夏目に話しかけたかった様だ。自分と何かが見える夏目にそんな彼に夏目は言った。

「俺は見える　すごく変なもの。　でも内緒な。」

やっぱり おれ達二人が変なのかもしれないし。」

「……………そうか……………そうだな……………」

「……………そうだな……………」

田沼も夏目もうれしそうだった。

「……………あ……………あの犬耳の女の子は月詠って言って父親が犬妖
怪、

母親が人間の半妖なんだ。良い奴だし見えるんだったら田沼もきつ
と仲良くなれるさ」

「ああ……………楽しみだな」

夏目の紹介で月詠と田沼が出会うのは放課後のことであった。

第8話 ダム底の燕

月詠は嫌な予感がしていた。夏目の近くにニャンコ先生以外の妖の臭いがしたからだ。もしかして取り憑かれているのかと思い、阿吽を連れて

会いに行くと鳥の字をくずして書かれた布製のお面をつけた女性の妖が

夏目の隣にいた。

「……………取り憑かれた？」

「……………探し人がいて人間である俺といれば

もしかしたら見つかるかもって……………」どんよりとした空気で説明する夏目。

人探しする妖はどんな人を探しているのかを夏目と月詠に言った。

「顔を見ればわかるのですが詳しくはわからないのです」

「……………」

「わかっていることといえば二葉村に住んでいた「谷尾崎」という名の男

だったことくらいです」

「二葉村ってお前が住んでいるダム底のに沈んでた村のことか？」

「はい」

しかし村が沈んだのは二十年前、長期戦覚悟だった。

翌日学校……………

夏目はジュース飲みながら何気なく北本に聞いてみた。

「なあ北本、二葉村って知っているか？」

「ん？おれの父ちゃん二葉村の出身だけど？」

「……（ええ！？）」「……意外な情報に三人はびっくり、夏目はとうとうぶつとジューズを吹き出してしまった。」

北本が言うには二葉村の者はほとんどこの辺りに越したらしい。しかも谷尾崎の名は聞いたことあるし今夜住所聞いてみるといつてくれたのだ。

放課後・・・帰り道

「意外とすぐ見つかったね」「よかったな」「はい」

そして彼女は嬉しそうに笑う

「ふっふっふっふっふ」

「……………」

「あ、夏目様。月詠様」

チュンチュン

「すずめ」「ふっかわいいね」「……おー」

しかしすずめはバサバサと飛んで行ってしまった。

「「あ
「

「あーあ」ちよつと残念そうに声を上げる妖……でもその後を「ふふ」と楽しそうに追いかけた。

やっぱりダム底の外の世界が楽しいんだ……と月詠は思った。

すると妖はあることを聞いて来た。

「夏目様と月詠様はきょうだいいいますか？」

「いや、残念ながら血のつながった身内はもうひとりもないんだ」「私はきょうだいはいないけど、お婆さまと父上がいるわ」

二人の答えに妖は

「そうですか」「お前はいるのか」「はい4人」

「でも皆わたしのせいで死にました。」

今度はこんなことを聞いて来た。

「夏目様、月詠様 手をつないでもいいですか？」

さびしいのがわかったのか夏目は無言のまま、
月詠は笑顔で彼女に手を差し出す。

彼女は嬉しそうに二人に手を伸ばした。

「つめたい手だな」「はい」

でも月詠にはわかっていて。

本当はつめたくて気持ちがいいと言いたかったと……

「あ、夏目様、月詠様 雨が来ます」「え?」「解るんです」

「雨を予言する……鳥 そうかお前、
もとは燕だったんじゃないのか?」

「はい そうだったかも知れません」

「それじゃあこれからは燕って呼んだほうがいいかな?」

月詠の言葉に夏目も同意する

「ああ……良い考えかもしれないな……」

「・・・・・・・・はいっ！」

彼女・・・・・・・・燕は一段と嬉しそうに答える

その後 迎えに来たニャンコ先生に三人の手をつないだ姿を
突っ込まれたのはいうまでもない。

夜 燕が言った通り 雨が降った。

その雨はすぐにあがった。・・・・・・・・

第9話 ダム底の燕

翌日、北村のおかげでようやく谷尾崎の住所が割れた。よけいな者まで着いて来たが燕は急に走った。

「あの人の匂いがする」と

しかしニヤンコ先生の余計な言葉で夏目と月詠は慌てて止める。そのせいで燕はびたんと転んだ。当然怒る「タヌキだるま」と言いながら

対してニヤンコ先生は「B級妖怪」と言った。

そんな二人に呆れながら夏目は聞いた。

「燕、とにかくなぜ逢いたいのか話してみてくれないか？」

燕は妖になる前は鳥の雛だったらしい。でもある日巢から落ちてしまった。

だが、やさしい人間が巢に戻してくれた。なのに彼女に「人間の匂い」が

ついてしまい、親鳥は巢ごと放棄してまった。

きょうだいの命は消えてしまい気づいたら彼女は妖になっていた。

ある日繁みの中で動けない彼女にエサを置いてく人間が現れた。それが谷尾崎だった。彼は野良犬と勘違いしていた。

燕は毎日エサを持ってくる彼に

巣へ戻してくれた人間のあたたかさを思い出してくれたのだ。

「村が水底に沈んだ時、心静かに眠れたのはあの人のおかげなので
す。」

夏目たちはだから逢いたがっているのかと思った。
恩人と言えようその人に……

「あ」

たっ

燕は走った。前を歩いているのは四十代くらいのワイシャツに
ネクタイしめた男性。おそらく彼が谷尾崎だろう
燕はしっかりと彼の顔を見た。うれしそうに

夜……燕は心からお礼を言った。でも夏目はため息つく

「村がまた水没するまでいてもいいぞ」

「………私も同意見」

それから毎日谷尾崎を見に行った。言葉を交わせない、相手は見
えないが
燕はうれしかった。

そんな夜のことだった。

森のむこうが騒がしかった。阿吽を引き連れ行ってみる。

そこには夏目と本来の姿のニャンコ先生・・・巨大化したダム底の妖垂申だった

「騒がしいわね、なにやってるの？」

「つ・・・月詠 実はふたば祭りの競争の賞品が一晩だけ人間になれる浴衣なんだ!!」

それさえあれば燕も谷尾崎さんもちゃんと逢えると思って・・・」

「・・・なるほど・・・だったら私も誘ってよ

一人より・・・ふたりでしょ？」「・・・あぁっ」

「あぁー！ーっ!!お前もかよ!!月詠!!!!」

「ニャンコ先生うるさいー」「うるさいぞっ」

こうして二人は競争に参加することになった。

夏目は垂申が作ってくた布製お面をつけてだが・・・

月詠は持ち前の脚力でどんどん先に行く。夏目に人間のため妖たちに玩ばれている感じた。

ニヤンコ先生は見てられんという感じで元の姿に変化した。

「蹴ちらすぞ夏目！こい！！！」

夏目は急いでニヤンコ先生の背中に乗った。

そして一気に先頭チームに追いつく。その中に月詠もいた。

「夏目っ」

一本杉に着くと月詠はなぜかニヤンコ先生に乗り、夏目の襟を掴んだ。

「え？」

「浴衣まで投げるわっ齒あ食いしばって！！！」

「えっちよっ……待っ」

「でやああああああああ！！！！！！」

「ぎゃああああああああ！！！！！！」ほっやるなー」

月詠は浴衣まで夏目を投げた。当然夏目は悲鳴をあげる。その時だった。

ぽっっ

「……………と……………とれた……………」

「……………わああああああああああああああああああ……………」

「……………」

夏目は賞品の浴衣を取れたのだ。会場内では妖たちが歓声をあげる。

夏目が下ろされた後は当然月詠は謝る。仕方なかったとはいえ、思いつきり投げてしまったのだからでも夏目は許してくれた。おかげで浴衣が手に入れられたのだ。

夏目と月詠は大急ぎで燕に渡した。燕は驚いた。

一晩だけと人間になれる浴衣・・・これを着れば自分の姿があの人にも見れる。

「優しいものは好きです。あたたかいものも好きです。だから人が好きです 夏目様、月詠様」

燕は二人を抱きしめ心から感謝した。

「ありがとう ありがとう夏目様、月詠様」

「いってきます夏目様、月詠様」

いってきます

その夜雨が降った。その雨は三日間も降り続け
二葉村はまた水底に沈んだ。

ある日夏目は月詠とニヤンコ先生を連れて谷尾崎に話しかけた。

淡い青色の花柄な浴衣の女の子に逢わなかったですかと
すると逢ったよと彼は答えてくれた。燕は念願が叶ったのだ
思わず笑顔になってしまう。

「そつだ見てみるかい？」

「え？」

「ちょうど今現像してもらってきたんだ。その時の写真があるんだ」

夏目と月詠は写真を見る

写真には浴衣を着た谷尾崎の隣に青い浴衣を着て人間の姿になった
燕がいた。

燕はちょっと照れくさそうだけどうれしそうな笑顔だった。

夏目と月詠はいつのまにか涙を流していた。

帰る時二人は手をつないで帰った。

燕といっしょに手をつないだ時のように・・・

第10話 五日印（前書き）

夏の旧校舎の肝試し・・・そこに住んでいた時雨様に名を返した。
季節は秋になりつつある時、夏目はまた妖に巻き込まれてしまう。

第10話 五日印

ゾワッ

嫌な邪気がした。……しかも、まるでその一部が夏目の家の方角に向かってている。まさか一段と最悪なのに巻き込まれたのかも
しれない。

月詠は阿吽に乗って夏目の家に行ってみた。

コンコン

「夏目、居る？」

「あ……月詠……阿吽……」

部屋にいたのは夏目と……
手のひらサイズのニャンコ先生だった。

「どっ……どうしたの先生っ！一体何が!？」

吃驚する月詠、夏目は説明する

呪いを受けてしまったと……邪気はそのせいだったのだ……

とにかくニャンコ先生は今は闘えない。

だから友人帳で三篠を呼び出すことになった。

夏目はニヤンコ先生に言われた通りに陣を書き白い布を羽織り、真ん中に鏡を置き、血を垂らした。

ぱん

「我を護りし者よ 我がもとへ来たれ 汝の名、

」三篠

「

ぱんぱんぱんぱん

どん

後ろに大きな影、三篠がした。彼が久しぶりですなと言った。

夏目のお願いに子分の蛙を助けてくれたから承諾してくれた。

印をつけられたことを説明すると彼は詳しくないから
代わりの者をよこそうと言った。

「では、「ヒノエ」を呼んで参りましょう。」

どろんっ

その言葉にニヤンコ先生は吃驚っ知っているようだ。

「おお麗しのレイコ!」

現れた女性妖怪は夏目をさわさわ撫でながら喜ぶ。
しかし

「おとこーーーーーー!?!」

ようやく夏目の性別がわかったのか思いつきり離れた。
夏目は当然グツタリしている。

彼女ヒノエはレイコが好きで男嫌いだ

そして小さくなったニヤンコ先生を見て大笑いする。

「なんか女好きと男嫌いが無ければお婆さまみたい」

「……すごいのか」

「若い頃の父上の修行として小さかった母上を強制的に冥界に送る
ほどだよ」

「・・・・・・・・」

ヒノエは夏目のことを何者だと聞いてくる。

夏目は嘘言わずレイコの孫だと言った。

ニヤンコ先生の他界したと言う言葉にヒノエは涙を流した。

妖だけどレイコのために泣いてくれる・・・

夏目はハンカチを差し出す。

「寄るな男め」

「・・・寄りませんから使って下さい

レイコさんのために泣いてくれるのですしょうっ」

「あなたが泣けば向こうのレイコさんも少しは落ち込んだじゃいますよ。」

ばっ

「「！」」

ヒノエは夏目はハンカチを奪いとると

ちーん

鼻をかんだ

「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」
「」

「……………あのねヒノエさん、ハンカチというのは手や汗を拭いたり

涙拭いたりするものなんですよ。鼻ふくのはちり紙で……………」

「おや、そうかい にしてもあんたもいいわね、金の瞳に対照的な白銀の髪っ!!」

頭に生える犬耳っかわいいわっ!!」

くいきい

すりすり

「いついやあああああっ!!」

ヒノエは月詠の犬耳を引つ張ったり、頬擦りしたりした。

夏目とニャンコ先生は気の毒と哀れに思った。

第11話 五日印

ヒノエに頬擦りされてぐったりする月詠。心なしか耳も垂れていた。

ヒノエは夏目が呼んでいると言われ、さらに人間と

かわいい女の子（月詠）と話してつい興奮してしまつたらしい。

そして彼女はキセルの煙を夏目にふつと吹きかける。夏目はゴホツと

咳き込むと 当然じろ と睨む

するとヒノエは夏目の腕の印を見て言った

「おや これは「五日印」だね」

「いつか印？」

動けない者が扱う呪いで通つた者に印をつける。

いろいろあるが五日間かけて生気を吸つたり、印主へ引きよせて食べたり、

こうして力を蓄えいつか自由になる力を得るのだ。

夏目は妖が居た所を案内したが居なかつた。

ヒノエが言うには蛙を追いかける内に

人に通れない道入ってしまったから会つたんだと言っていた。

とにかくヒノエは調べることになり、夏目とニャンコ先生は家に帰ることにした。

月詠と阿咩は心配だから夏目たちを送つて行く。

「腕痛む？」心配そうに聞く月詠

「うん……」

すると少し前に人形の影がぼつんと立っていた。

夏目たちは横を通り過ぎる。影は動かなかった。

「……何だったんだろう？」

「……さ……さあ……？」

翌朝、月詠はあの影のこともあったので夏目に会いに行った。

夏目は登校途中だった。あれからどうだったか聞いてみると例の影が門にいたそうだ。家に近づくなんてメリーさんみたいだ
メリーさんの解らないニヤンコ先生と月詠に有名な怪談を教える。

53

「電話がかかってくるんだ」私、メリーさん。今、門の前にいるの
つて。

暫くするとまた電話が鳴る。出てみると「私、メリーさん。今、
玄関の前にいるの」

その次は、

『私、メリーさん。』『今、玄関の中にいるの』

「……」

家に帰ったら影は玄関の前にいた。メリーさんのように

するとヒノエが現れた。印主の正体がわかったようだ。強力な邪鬼で長年かけて印を使い、後一人食べれば封印が解けるらしい。

そしてその一人が夏目だ。そいつは待ちきれず影を飛ばしたらしい。

影に重なったらアウト　　そう心に刻んでたその時だった。

どろんっ

ニヤンコ先生が招き猫姿のままでかくなっただの。のろいの余波で妖力が安定しないらしい

それから夏目は残り四日逃げ切ることを誓う

とりあえず帰宅はするけど一カ所はあぶないので夜中はこっそり抜け出して野宿

そして朝帰宅して登校なのだが・・・

「いってきま・・・」

影メリーさんがとうとう玄関に入り込んでいた。

ぞっ

「いっいっいきます」

そして明日から三連休のため友達の家泊ると塔子さんに連絡し山に行った。

夏目はヒノエがかしてくれた巻物で式の呼び出しの練習する。

呼び出しは大分様になってきたのだが五日印はもう大分広がっており苦しそうだ。

ヒノエは魚をとり月詠は水を汲みにその場を離れる

でもそれがいけなかった。あの影が来てしまったのだ。

夏目はなんとか避けるが痛みで思うように動けない。

こうしている間にも影が近づいてくる。

「夏目使え」

ヒノエは巻物を投げた

受け取った夏目はしゅると巻物を開く。自分の髪の毛を何本か抜き

「日、通りし道より来れ 陰、被う者。」

呪文を唱えながらふっ息をふきかけると

巻物の文字が浮き上がる。そして

どろん

「来たか・・・」

でも式は小鳥だった。かわいかった。やっぱり呪いのせいであらう。体力が落ちてきているせいだろう。

影は式から喰ってやるといつてきた。夏目は慌てて庇う

「夏・・・」

「チュン」

式が鳴いたそのときだった。

カッ

光ったのだ。その眩しすぎる光より、

「ぎっ・・・」

影は消えて行った・・・。

ニヤンコ先生は元に戻り夏目の印も消えている。

その後軽くヒノエに怒られたが……

すると三篠が現れた。これは三篠が試したことだったのだ。そして判定は相応しくない。しかし気に入った。面白そうだししばらくは名を預けようと言ってくれた。

ようやく夏目は家に帰れた。

しかし彼に待っていたのは塔子さんのお説教。

連絡先を教えなかったからだ。

怒った塔子さんに夏目は吃驚、

彼は塔子さんの説教を受ける羽目になる

でも自分のために説教してくれる人がある

ほっとしたのか夏目はバタッと倒れてしまった

それから夏目は風邪を引いてしまった

翌日、月詠と阿吽は夏目の様子を見に行くとなんか騒がしかった。

「つぶれ大福は黙っておれ」ドスン

バタン

「わかめ頭め むしってくれる」

「ううう・・・寝かせてくれ」

ポイ　ポイ

「「!!」」

暴れていたのはニャンコ先生とヒノエだった。あまりの煩さに寝込んでいた

夏目に追い出されてしまった。

「ニヤンコ先生、ヒノエさん夏目は寝込んでいるから静かにしないと……。」

「まあまあ月詠っ実は美味しい団子があるんだ。一緒にどうぞだい」

「あっありがとう」

「何いつヒノエおれにもくれっ!!」

「やだね」

「んだとー」

ヒノエは月詠に抱きつきながら誘う、ニヤンコ先生も催促するが却下された。

でもその後月詠の願いにより

串にささっていないお団子一粒を貰えそうだ

ヒノエは呆れ

ニャンコ先生はかなり不満げ

月詠は苦笑いだっという。

「食べられただけいいじゃないか」

「よくなー！ー！ー！いつ！！」

「あははははは」

第12話 見える人

月詠は今日は気分を変えて町中に行ってみた。するとニヤンコ先生一人だけぼてぼて歩いてた。

「ニヤンコ先生一人なの？」

「いや、夏目の気配があのお店からする。しかも変わった気配もするな。」

月詠はスンスンと臭いをかいでみると覚えのある匂いと知らない匂いがした。

近くに妖怪の臭いもする。

「………本当だ。」

一緒に店に入ると夏目が髪を操る妖に腕と首を縛られていた。苦しそうだ。

眼鏡の男はおそらく、そいつの主だ。なのにそいつは

「こらこら勝手をするな 私の大切な友人だ。

失礼は許さないぞ」

その時だった。

「失礼はおまえだ。」

夏目は目を見開く。そこにいたのはニヤンコ先生と月詠だったのだ

から。

「私の獲物に気安く声をかけるなガキが」

「私の友達傷つけるなら容赦しないわよ」

カツ

ザシユツ

「ぎゃ」「!!」

ニヤンコ先生は光り、月詠は自らの爪で奴の髪を斬る。

男・名取は眩しい光に驚いたが、むしろ驚いたのは

「そ……その女の子と珍妙な生き物は……?」

ふたりのことを聞こうとした時、店員さんにバレた。

夏目は慌ててコートと月詠とニヤンコ先生を掴み逃げるように走る。

「す、すみませんじゃあおれはこれでっ」

「あっ……待……」

明日、明日また七辻公園で待っている」

翌日夏目達は気になって七辻公園に行くことになった。途中一つ目鬼のお面をつけた女の子の妖と会った

「やあ」夏目は思わず挨拶したがこっちを向いてくれた。

七辻公園に到着すると夏目達は無言になる。

名取はキラメキオーラが出ていて近づきたくないのだ。周りの女性達は頬を赤らめているが……

「あつ夏目————こっちこっち————」

「！？」

そしてニヤンコ先生を見て笑う。猫と言われても饅頭みたいに丸々としていて

おもしろいからだ。でも夏目は思う。名取にはきつとバレているだろう。

素直に猫じゃないと言ったらそっかありがとうと言った。

「君は何者かな？人間の気配も感じられるし……
なのに妖の気配も感じられる。」

「……私は月詠。父は犬妖怪、母は人間の半妖よ」

「ありがとう。　　そっか　　かわいい子分さんだね」

そう言つて二人の頭を撫でる。すると

「子分じゃなくて師匠だ青二才！！」「耳に触れるなバカあー！！」

ゴッ　バキッ

「！？」

どろん

「おのれ主さまに何をするブタ猫と犬耳娘め」

「何だところのチリチリパーマ」

こうして喧嘩勃発止まったのはそれから数分後……

止める決めては夏目の拳だった。

実は名取は倉の妖を祓うのを手伝って欲しいと言って来たのだ。

「妖らはいつも理不尽で迷わくな存在だな」

「……そうですかね事情がわからないと何とも……」

「たしかに悪い奴も居るけど、良い奴も居るんですよ？
実際に大妖怪であるお爺さまと父上は人間を愛して半妖の子作りま
した。」

戦国時代の妖怪退治屋は猫又も連れていたそうです。」

「えっ……そうなの？」

「意外だな」

「だからちゃんと見極めてください。」

帰り道また一つ目鬼の女の子に会った。

そして怒られる。夏目がわからないまま彼女の首の縄をひっぱったからだ。

夏目はゆるんでしまった彼女の包帯を巻き直す。

すると彼女は昔話を始めた。

山守りしていたが捕まり、この家と倉を守れと言われた。

倉を開けられたらそいつを祟れと……

そして最近開けた者がいたので祟っていたのだ。

役目を果たさないと縄がしまり首が切れてしまう。

昔は逃げようとしていた。でも無理だった。

手に怪我しながら座っていた時だった。

人の子が心配そうに話しかけて来た。

男の子は優しく包帯を巻いてくれた。

時が経ちあの子が被い人として帰って来た。

「異形とは面倒だね　こんな布きれ一枚の礼もろくに出来ない。」

その声は凄く寂しそうだった。

次の日　名取は旧家の庭に陣を書いていた。

そして夏目達に気づく。夏目は聞いてみた。

今日被う妖のことを・・・その妖はまさしく昨日の妖ことだった。
夏目と月詠は彼女が来る前にやめさせないと　そう思い走ったが

名取の式・瓜姫の髪で木に縛られる

こうしている間にも来てしまった。

「放してくれ・・・名取さんだめだ」

「行っちゃだめっ」

しかし彼女は陣に入ってしまった。

ピシッ ピシッと鳴り始める

彼女が危ない

夏目と月詠は強引に瓜姫の拘束を解く

そして陣に走った。

バチバチ

「っ・・・」「う・・・」

「何を早く出なさい 私には雷を止められない・・・」

バチバチバチ

「う・・・」

「ちっ」

舌打ちして三人を抱えたこんだのは変化したニャンコ先生だった。

「先……」

ドンッ

横を見る。そこにはニャンコ先生と焦げ付いたお面の女の子がいた。

「生きているよ」

首の呪縛も焼き切れた

彼が言うには呪縛から逃れないならせめて一思いに逝かせてやりたかった。うまくいけば一命とりとめて縄焼いて自由にさせてやりたかったらしい。

そして名取はようやく思い出してくれた。

幼い自分を慰めてくれた妖だったということ。

夏目達に感謝した。おかげで軽い怪我ですんだのだから。

名取は謝る。こんな巻き込み方しなくなかった。

夏目を見ると昔の自分を思い出して

何かを伝えてやれるんじゃないかと……

「それより月詠ちゃん大丈夫？」
名取の問いに

「・・・うん・・・なんとか・・・」

そう言いながら起き上がる。

「「「!?!?」「」「」…………どうしたの?」

「…………つ…………月詠…………髪っ!!髪が真っ黒」

「犬耳も無いぞっ!?!?」

「人間だね…………どう見ても」

「いったい何が…………」

四人の驚く声に月詠は呑気に答える。

「私は半分妖怪、半分人間の半妖でしょ?実は半妖は月に一度人間になる日があるの。私の場合は新月ね。でもほかに人間になる場合があるわ。それは聖域とかに入った時、極端に妖力が落ちた時よ」

すると名取は納得したように

「なるほど…………今回は妖祓いの雷を落とした…………」

そのせいで人間になったんだね?」

「そっいつこと」

「大丈夫だよな?」

「もう少ししたら戻るよ。」

しばらくして月詠の姿は元に戻ったという。

第13話 アサギの琴

月詠が阿吽と散歩しているときだった。

「あつ月詠……」

話しかけたのは田沼だった。彼ははっきりと妖見れない。

でも人間の血が流れている月詠だと薄く見れるのだ。

そして彼は下校途中、月詠に話しかけて来た。

「どうしたの田沼？めずらしいね」

「じ……実は夏目が……一瞬女に見えたんだ」

深刻そうに言う田沼

「……そりゃあ……夏目は女顔で見た目奇麗だよ？

周りの妖達もお婆さまに良く似ているっていうけど……でもさすがにねえ……」

「いやっそう言う意味じゃない！！話しかけたら青い長髪の女に見えたんだ

その後いつもの夏目の姿だったが……」

「……そうか何かに憑かれているね。田沼は力は少しあるからなんとなく見れたんだよ。後で夏目に会いに行ってみるね。」

「頼む」

田沼と分かれて阿吽に乗って夏目を探す。

しばらくして彼の匂いを感じとった。

匂いの方向にいくと夏目は呆れながら池にいた。

近くには包帯ぐるぐる巻きの妖がいた。

「おれはやるぜえええ!？」

「……………何やってるの」

「あつ月詠」「だれだお前!？」

「私は月詠 半妖よ。にしても夏目いったい何があったのよ？
田沼から女に見えたっていうし、今池で何か穫ろうとするし。」

「……………いや・じ…実は……………」

夏目は事情を説明する

昨日この包帯ぐるぐる巻き妖怪メリーさん（夏目命名）は
病気により弾けなくなった蒼琴弾きアサギのために器探しにきた。
そして妖を見れる夏目が寝ているスキに
アサギを取り憑かせたのだ。彼女は罪悪感いっぱい
体から出て行く方法は一つ、彼女の希望である蒼琴を奏でることだ
しかし蒼琴はないので楽器作りから始めるため
材料の「線引き」という鯉そっくりの妖怪をとり池にきたのだ。

「……………なるほど……………だったら私も手伝うよ。」

「「「おおっ」

こうして三人の線引き探しが始まった。

「「「おりゃああ」「ざぱああん

「「「おりゃあああああ」「ざぱぱぱぱん

夏目達は探した。でも人間である夏目は数十分でダウンした。

「どこだー！ー！ー！っ」

「知らなー！ー！ー！ー！っ」

そう言って月詠は光の鞭で池から魚を弾き出す。
でも見つからない。

ばしゃ ばしゃ

「あつ見る夏目 月詠居たああ かかれええー！ー！ー！っ」

「！ー！ー！」

「こんにゃるー！ー！ー！っ」

バツシャ バツシャ

パシヤ

きよとんとするメリーさん

『ふふ』

夏目の後ろにはアサギが楽しそうに水をかけたのが見えた。

「……アサギか！遊んでいる場合かあああ！！」

「きゃーっーっーっ」

そしてよじやく

「……と とうたぞ~~~~!!」

ようやく穫れたのだ。口についている釣り糸、これは「良甲」という仙人の物で

これを釣ろうとしているがいつも糸を切られて逃げられてしまっただ。

この糸を弦に使いたい。

次は胴

「地表に頭を出す際の竹の子に貫かれている切り株」だ

でも夏目は倒れた疲れが溜まったのだろうか。

メリーさんは背中に背負って夏目を送っていく。

「・・・もう少し　もう少しで弾かせてやれる。」

第14話 アサギの琴

夏目が目を覚ました。

メリーさんは夏目と月詠にアサギが蒼琴を弾けなくなった理由を言った。

彼女の右手の指がもう三本しかないのだ。

土のように崩れていく奇病。ちがう器に入れば進行は遅くなるそう
だ。

でもメリーさんは感謝した。だってアサギが久しぶりに笑ってくれた。

最後に笑っていたのは憧れてやまない壬生様で弾いてた時……

そしてその演奏中に肌が崩れ始めた。

翌日森で竹のはえた切り株を三方向に分かれて探す。

がさがさ

「無いね……阿吽」

月詠の言葉にこくりと頷く阿吽。

いろんな所を探していると

「でかしたぞ夏目!!」

「わーーーーっつ」

夏目が竹のはえた切り株を見つけたゆえ大喜びし、夏目を胴上げをするメリーさん。胴上げされる夏目は吃驚する

「なになに。見つかったの?」

「ああっそうだっ!! さっそく削り出すぞー」

メリーさんは嬉しそうに切り株に手をかけるが

「ふんぬううううう」

根を張っているせいか固かった。

「……貸して、こついう場合は地面を掘って

少しは緩くするものなの」

「な……なるほど……」

「掘るなら任せなさい」目がキラリ光ったと思ったら瞬間

バババババババババババババババババ

「うおおお!?!」

なんと素手で掘り始めた。叔父、犬夜叉直伝の穴掘りだ。

そして切り株の根元はぐらぐらになった。

メリーさんと月詠は力をいれて抜き始めた。

「ふぬああああ」
「ううーん」

ずぼおつとようやく抜けた。

「よっしやあああ 後は削り出した!! 月詠! ありがとな! ゆっくり休んでくれ!!」

「うん。わかった・・・」

さすがに疲れたのか月詠は阿咩と夏目の隣に寝っ転がった。

しばらくして楽器が完成した。

皆は大急ぎで走った。しかしその時運悪く妖が襲って来た。

メリーさんことアカガネが夏目を庇う。

「この!!」「てや!!」「ビュッ」「ぎゃっ」

アカガネと月詠のおかげで倒されたが蒼琴が落ちて行く。

夏目は手を伸ばした。

「夏目・・・」

目を開けると心配そうに見つめる二人の姿。

「大丈夫か？」

「……ああ……楽器は？」

「無事だ お前が守ってくれた」

「しっかり抱えていたんだよ」

アカガネは磯月の森の道にいけるかと聞いてくる

すると夏目……いやアサギ微笑んだ

もしもう一度弾くことが叶うなら

優しくて 大切な 友人のため

アカガネのために弾きたいと言ったのだ

「アカガネ、そして楽器作りを手伝ってくれた月詠さん 聴いてくれますか？」

アサギは夏目の体を借りて音楽を奏でる。

とても暖かくて、やさしくて、美しい音を

こうして彼女は夏目からはがれていった。

アカガネは瓢箪で寝ているアサギを連れて里に帰るそうだ。

ポロン・・・

夏目は残された蒼琴を弾くが美しい音は出なかった。

夏目と月詠は思う、あの美しい音は彼女の心が奏でたのだろう。

「あつそつだ月詠も蒼琴弾いてみる？」

「えっいいいの？」

「やめとけやめとけ夏目 弦が切れるぞ」

ニヤンコ先生は馬鹿にするが

ポロン？ポロロロン？ポロロ〜ン？

アサギ程ではないが中々上手かった。

「何いつ！？」「うわっ上手いな」

「何でああつ何で上手い！？」

ニヤンコ先生が詰め寄ると月詠はさらりと答える

「お婆さまが大妖怪の娘なら学問、剣術、女性のたしなみも出来て当たり前だからっているんな先生に教え込まれたのよ。あ・・・でも剣術を中心にした戦い方は父上にだけ教わった。毒華爪も光の鞭も父上の技だし・・・」

「.....」

・・・やっばり大妖怪の娘だからだろか

最後以外はお嬢様と言ってもおかしくない内容だった。

ちなみに蒼琴はアサギの次に上手い月詠が貰うことになったそうだ。

第15話 黒ニヤンコ

夜・・・月詠と阿吽が寝ているときだった。

がさがさ

「ん・・・」

繁みに何かが居る。そう思った瞬間

がさっ

現れたのは友人帳を銜えた黒いニヤンコ先生だった。

「えっ！？ニヤンコ先生？どうしたの！？」

慌てて聞いてみる月詠。しかしニヤンコ先生は友人帳を銜えたままどこかへ行った。

その後だった

がさっ

「あっ月詠」

「夏目・・・・・・・・えっ何でニヤンコ先生がここに？さっき黒いニヤンコ先生が友人帳銜えて向こうへ行っただよ？」

驚いたように説明する月詠

「やっぱりここを通ったか・・・ん、何だろう あ的光
上のほうの山道に」

「「ん？」」

光りは点々と並んで移動していた。狐火だ。

どこに行くんだと思ったたら妖たちが人間の匂いがすると言い始めた。

ニヤンコ先生は慌てて変化すると夏目を倒す。

ニヤンコ先生のケモノ臭のおかげでやりすごせた。

妖たちはむかし主様が人の匂いつけて帰って来たやら

人に化けて遊び美味しいお土産を分けてくれたやら

でも・・・妖たちは人間と関わるとろくなこと無いと言い去って
行った。

その時だった。

「おや そのお姿は斑さまではありませんか・・・お久しゅう」

右目に大きい蝶を止まらせた女妖怪が現れた。

「お、お前は・・・紅峰か」

「先生の知り合いか」

「まあな」

「意外と知り合い多いよね」

そして紅峰は夏目をエサと勘違いしたのかおこぼれを と顔をみた瞬間だった。

「ぎゃっ夏目レイコ!?!」

「阿呆声がでかい!!」だしっ「ぎゃ」

とりあえず夏目はレイコの孫だと説明する。

次にニヤンコ先生は黒いラブリーな猫を見なかったかと聞く

月詠は思っ・・・招き猫のような黒猫じゃなくて?と

すると紅峰は先ほどの列はこれから始まる飲み会でその途中

頭のデカイぶさいく黒猫が会場に向かうのを見たと言った

夏目と月詠は紅峰を説得して連れて行ってくれることになった。

「頑張ろつな先生、月詠。」

「ええ」

ぼんっ

「お前らはまた勝手なっっ」

招き猫姿になったニヤンコ先生を見て紅峰は

「ぎゅ」

ぎゃああああー！？ちんちくりんにー！っつ

当然のごとく悲鳴を上げた。

「うっうっうっ……おいたわしい……」

「招き猫を依代に封印されていたらしいんです……
それで夏目がちよつとした拍子に結界の縄を切っちゃったんだけど……

体が依代と馴染んだらしくって」

そう言いながら月詠は阿吽の手綱を引いて連れてくる。

とととと

「こっちか酒はー！」

「酒飲みに行くんじゃないぞ」

そんな皆の姿を影から見ていた黒ニヤンコがいた。

第16話 黒ニャンコ

夏目は目と書かれたお面、ニャンコ先生は人間の娘に化けて自分の顔が描かれた面をつけた。月詠はと言つと

「よしできた。」両頬に紫色の二本線の入れ墨の様な化粧を施した。

「変わった化粧だね。月詠」

夏目の言葉に月詠は笑いながら説明する。

「犬妖怪一族は基本的に入れ墨みたいな模様があるんだよ。

お爺さまは両頬に一本ずつみたいだし、お婆さまも両頬に一本ずつそして額に三日月模様。

父上は両頬に二本にお婆さまと同じ三日月模様だよ。」

「あゝだからか」

家族の模様のように化粧を施したのかと妙に納得する夏目だった。

こうして夏目達は会場に到着した。

そこには閻魔様みたいな容姿の妖が他の妖たちに酒を振る舞っている。

紅峰はどこにいったんだと聞かれていたが化粧ですよ。とさらりと答える

妖は夏目たちを見て見かけない奴らだなという。

紅峰は普通に連れなんですよと夏目達を紹介する

「ねーちゃん犬妖怪？かわいいねえ」

「この騎竜もなかなかカツコイいなあ」

「ふふ・・ありがとうございます。まあまあ一杯どうぞお酌しますよ。」

「おっいいねえ」

月詠は杯に酒を注いだ後、本来の目的である黒ニャンコを見なかったか聞いてみた。

「すみませんが どなたか招き猫のような黒猫見ませんでした？
友達の大切な物を盗られてしまって・・・」

「おおっ見たぞ」

「俺も」「ワシもじゃ」

「そうですか・・・」

その時 閻魔さま（仮）が主様を救うため夜襲をかける言い出した。

夏目なら止めようとするだろう思った時だった

「いたっ！！！！あっ！待てこら」

夏目が黒ニャンコを見つけたのだ。

月詠と阿咩も後を追いかける

しばらくして黒ニャンコはあっさりと捕まった。

夏目と月詠は考える。わざとここに誘導したのではないのかと・・・

ニヤンコ先生は紅峰に探れと命令する。

力がある妖だけどニヤンコ先生と同じように招き猫に封じられ、封印の影響で知能低下が起きているらしい。

「・・・ん？この気配、覚えが・・・はっ

ぎゃっこの妖気　もしか主様!？」

「何!？」「うそ!！」

驚くのも無理も無いだって招き猫に封印されているのだから

「お、おいたわしい・・・おのれ人間共め」

「ベ・・・紅峰さん、抑えてっ抑えて」

でも招き猫の姿だと気づいてくれない。

紅峰が言うにはレイコに名を奪われたそうだ。

でも招き猫の姿だと名前がわからない

すると妖たちが来てしまった。

夏目は慌てて主様は帰って来ている。

だから主様の名前を教えて欲しいと言ったが
どンドン襲われそうになる

ニヤンコ先生は助けようとするが弾かれる

そのときだった。

人の子だとざわつく中たしかに聞こえた

『様がいれば』

ばん

「「リオウ」 君へ返そう 受けてくれ」

名前はしゆるしゆると主様に入っていく

ドン

招き猫が碎ける。現れた姿を見て妖たちは驚いた。

「・・・主様」

「主様・・・」

「リオウ様・・・」

翼の生えた妖はまさに主様と言ってもおかしくなかった。
彼は夏目と月詠に感謝する

そして彼はみんなに阿呆だと言われた意味が解った気がするといっ
た。

でも月詠は言っただけだ。

「祖父も人間を愛して半妖の子を作りました。父は最初は人間嫌い
でしたけど

いつの間にか人間の母を愛して半妖の私が生まれました。
だから主様あなたは阿呆じゃありません」

その言葉にリオウは驚くが・・・くすりと笑ってくれた。

「さらば、人の子。半妖の子　さらば」

こうしてニセニャンコ事件は幕を閉じた。

「ところで月詠・・・」

「なに？」

「君のお父さんってどんな妖怪？」

夏目は人を愛した月詠の父に興味を持った

「んー顔は美人だけど無口無表情、でもわたしにはふって微笑むけど

手下にとつてそれがすごく恐ろしくて

初めて見た時百年寿命縮んだって言っていた。

怒ったら目を真っ赤にして本来の姿である妖犬に変化するよ。

まああの人落ち着いている方だからめったに変化しないけど・・・

どうしたの？」

「・・・い・・・いや」

夏目は確信した。

月詠はお母さん似だということ

第17話 ホタル

数日前妖騒動でようやく蛍が飛んだ。

月詠は幼い頃を思い出す。

父と母に連れられて蛍を見たことを・・・

あまりの幻想的な風景に思わず手を伸ばしてしまった。

父と母から微笑ましそうに笑われた。

でも悪い気はしなかった。

とても楽しかったのを覚えている。

今度 父と祖母に文を送ろう。

父は昔のことを思い出してくれるかな

思い出してくれたら私はすごく嬉しい・・・

お婆さま 父上 邪見、お元気ですか 私 月詠は元気です。

この土地の妖怪はかなり親しげですが修行はがんばってやっています

す。

私に夏目という人間の男の子と妖からは斑と呼ばれる妖、ニヤンコ先生と

仲良くなりました。

夏目はかなりの力を持っている故いろんな妖が寄ってきます。そのせいで色んな騒動が起こります。

そんなある日 蛍の妖と出会いました。彼女の友人は夏目と同じように

見える人でしたが、大人になってしまったので見えなくなったそうです。

彼が祝言を上げるまでそばにいたことになったのですが虫の姿でも良いから会いたいと行ってしまいました。

でもそこには蛍を食べる妖がいたので。私たちは大慌てで追いかけて

その妖をぶん殴りました。でも違う蛍でした。

私は友人の男性の所に行くと言嫁と歩いていました。

すると蛍が一匹、彼の手に止りました。少し歩くと

幼い頃に見たような たくさんの蛍が現れました。

とても奇麗でした。父上、覚えていますか

愛する孫であり、娘から届いた文を見た祖母と父・殺生丸はというと

「そういえば蛍を見に行っていたのう・・・どうだったか？」

「・・・・・・・・幼かったゆえどのように光るのか理解していなかった・

・・。」

どたどたどた

「月詠様から文が届きになったのですか!？」

あの方がご病気になられたのですか!?! 殺生丸さまっ!?!」

うるさい家来に殺生丸は辛辣に

ゲシッ

「ぎゃっ」

蹴った

第18話 呪術師会合

ひらっ

「？」

ひら・・・ひらり ひら

「何かな これ」

そっぴいなながら月詠は、ぱしっと掴む。それはこんにちはと書かれた紙人形

「・・・何これ？」

ぼおっ

「きゃあっ」

いきなり紙人形は燃えた。月詠の妖力が強いからだろう。そして彼女は焦げてしまったがこれについてる匂いで飛ばした人物の所に行くことにした。

阿吽に乗ってしばらく行くとそこには帽子眼鏡の男性に文句を言う夏目が居た。

「夏目っ名取さんっ」

「やあ、月詠ちゃん。」

「あつ月詠、阿咩！まさか月詠の所にも？」

「うん・・・見ての通り焦げた。」

そついいながら焦げた紙人形を見せた

こうして一行は夏目の家に行くことになった。
途中、名取が帽子眼鏡を取ってしまったので
周りの女性から黄色い悲鳴を上げられたが・・・

しかし家に着いた時目を見開く。扉の前が血で染まっていたのだ。
夏目は慌てて入った。玄関も血まみれ・・・まさか・・・

でも塔子さんは怪我なんてしていなかった。しかも血なんて気づいていない。

妖の血だったのだ。

血は夏目の部屋に続いていた。

名取はニャンコ先生にくどくどと説教する。

「ニャンコじゃないと言つとるだろうが」

血は押し入れに続いていた。

開くと顔だけの妖、そいつは逃げて行った。

そこに残っていたのは先ほどの妖のせいで片羽を失った妖鳥だった。

「うわーーーー」

「きゅーーーー」

夏目は急いで布団を引き、名取と月詠は彼を手当する。

名取は夏目達に化け物退治しないかと誘う。

興味あるのだったら呪術師の会合、明日の夕方ここにおいでと言われた。

その日の夜月詠は父に文を書いた。癒しの刀、天生牙を持つ父に

『 父上お元気ですか。月詠は元気です。今日、夏目の家に言ったら玄関が妖の血で血まみれでした。』

彼の押し入れに馬鹿でかい顔の妖がいたのです。そいつは驚いたのか逃げて行きました。

そいつは押し入れで何かを食べていました。

妖鳥です。急いで手当をしましたが片羽を失い、瀕死の重傷です。

父上、この私一生のおねがいです。その子を助けて下さい。 月

詠より』

「あの一殺生丸様・・・」

「何だ？」

「・・・い・・・行かれるので？」

「他の妖に使う気は無いが 娘のためだ・・・行くぞ・・・」

「はっはい」

「殺生丸よ・・・どこかにいくのか？」

「・・・月詠の所だ」

「何ならこれを持って行け、月詠の好物の菓子じゃ。

それとたまには里帰りして祖母と茶を飲もうと伝えてくれ」
「素晴らしいながら包みを渡す。

「承知した。」

第19話 呪術師会合

月詠は阿吽を連れてある場所に着く。すると

「ようこそ おいでだ お客人 入口はこちら」

そこには北口と書かれた傘を持った小さな妖だった。

「ねえ ここに招き猫を連れた人間通った？」

「はい通りました」

どうやら夏目たちも着いた様だ。月詠は彼らの匂いをたどって進む。

そして着いたのは大きな屋敷みたいな建物、その玄関には夏目と二ヤンコ先生

名取 そして彼の式である柊だ。

「それじゃ合流したし、中に入るうか」

「はい」

名取に連れられて皆は建物に入った。

入るとそこにはたくさんの人と妖がいた。
あまりの数に夏目と月詠は驚く

「こんなに……？これ皆本当に……？」

「すーい」

中にはおそらく田沼のお父さんの噂話をしている者もいた。
その時 あれはレイコじゃないか そう聞こえた。

夏目は妖と人が多いせいかわの声か人の声かわからなかった。

名取はお面を勧めてくれた。

名取の体中を動くヤモリの痣の話をしている最中だった。

「名取

新しい式をつけたっていうから見に来たよ」

現れたのは小さな丸眼鏡をかけた初老の女性だった

七瀬という女性は的場という有名な妖祓い人の秘書だそうだ。

名取は夏目たちを紹介する。すると彼女は驚いたように

夏目の顔を隠す面をめくり

「夏目レイコを知っているかい？」そう聞いて来た

レイコは祖母だと聞いた時、孫かと納得する

彼女はくわしく知らないが妖の中ではレイコは本当に有名だと説明

した。

亡くなったと聞いて「妖にでも？」と聞いてくる

聞ける立場じゃなかったと答えると

「だがもうひとりで戦うことはないよ」

そうやさしく言ってくれた。

そして七瀬は名取に例の妖のことを聞いて来た

名取は退治は無理でも封印くらいなら出来ると言った。

その様子には彼女は饞別かわりの魔封じの壺を渡した。

彼女が去って行った後

廊下の掲示板に貼ってある例の妖の絵

夏目と月詠は聞いてみた

「おれを探す時に飛ばした紙人形で あの化け物探せませんか」

「できるのならお願いします」

名取は名を知らないから無理といったが

少し考えて

「この会場には気が満ちているし君たち程の力があれば
ひよっとしたら飛ばせるかもな」

「「お願いします」」

控え室で名取は水で陣を書く

夏目たちに陣の上に手を出させ、その上に一枚の紙人形を置いた。

「目を閉じたら相手の姿を頭に描く 探すよう命じながらね」

夏目と月詠は目を閉じ、あの妖を描く

そして

カサリ・・・と浮いた瞬間

「・・・行け。」

ビュン

ぱりんっ

「きゃーーーーーっ!?」

「わーーーーーっっガラスを!!」

「ごめんごめん窓あけ忘れた」

「えっ」

とりあえず成功だが建物の中に入ったのだ。

つまりあいつはここにいる。

夏目たちは急いで紙人形を追いかける

柊が先に行った。

しばらくしてある部屋に着いた。

そこでは酒盛りの最中だった。

月詠は聞こえていた。カサカサと鳴る紙の音……そして広がる
血の臭い

上からポタ・ポタ……と血が落ちる

「上っ」

「みんなさがって……」
どおん

天井から柵の太刀が刺さった妖が現れた。

そしてその場にいる者を守るため前が出る。

その時左腕を噛まれたが

「こ……この」「くらえっ」

夏目の拳と月詠の爪で逃げて行った。

夏目と月詠が先生と叫ぶと舌打ちしながらも変化して追って行った。

夏目たちを驚く周りの者たち、しかし夏目たちは周りの皆の静止を
振り切り

すぐニヤンコ先生の後を追いかける。

「夏目つ名取さん阿吽に乗って。その方が速い」

「わっわかった」「うん」

そして阿吽に乗ると

「夏目、手綱はしっかりとにぎって。名取さんは夏目にしがみつい

て下さい」

「う・うん」「妖に乗るのは初めてだなー」

月詠は自慢の瞬発力で一気に行く。その後を夏目たちを乗せた阿吽が飛んだ

外に出た後三人は急いで封印の陣を書き上げる。

陣の中心に七瀬からもらった魔封じの壺をおいて準備終了

そしてニャンコ先生が奴を追いつめる

「よしやるぞ」

ぱんっ

「出よ、我はその手を求む」

どん どん

「掴め 闇を守りし者よ。」

すると壺からたくさん黒い手が現れ、妖にからみつく

そして妖は勢い良く壺に吸い込まれた。

「ふっ蓋!」「はっはい」「えいつ」

三人掛かりで蓋をし、ようやく封印ができた。

でも奪われた。魔封じの壺をくれた七瀬に

しかも彼女はいらなくなったカラスを餌にして捕まえようとしていたのだ

つまり夏目の家に逃げ込んだ妖鳥は式だったのだ。

夏目は当然怒る

しかし彼女は退治されて当然の化け物を人のために使ってやること言う

こうして彼女は去った

ニヤンコ先生は夏目がかけた封印が易く解けるものかと言ってくれた

柊はふつとばされただけで無事だった。

夏目と月詠はもっと強くなりたいと願った。

第20話 呪術師会合 後日談

夏目と月詠は今日も的場一門と妖のせいで重傷を負った妖鳥の看護をしていた。するとその時であった。

「ん？」

「あっ」

ニヤンコ先生と月詠は何かを感じとった。

「来たっ来てくれた！！」

月詠は嬉しそうに外に出るがニヤンコ先生は

「何だこの妖気は！？尋常じゃないぞ」と叫ぶ

「とにかく月詠を追いかけようっ」

夏目達は急いで外に出る。するとそこにいたのは

翁と女の顔の杖を持った小妖怪を従えた紅い模様が入った白い着物と白い袴、

黒い鎧を纏い右肩に白い毛皮を羽織り、月詠と同じ白銀の長髪に金の瞳、

そして額に三日月模様の男性が立っていた。

月詠は嬉しそうな笑顔で叫ぶ

「父上、久しぶりですっ！！」

「………うむ」

「……祖母からの土産だ……」

父上と呼ばれた男性はお土産の包みを差し出す。

「わあーありがとうございます。邪見も久しぶりねっ」

「はいっお久しゅうございます。」

そしてその光景を見た夏目たちはというと

「ちっ父上ええ！？月詠のお父さん！？」

「似てんっ全然似てないぞ！！」

それを聞いた邪見は当然怒る

「これっ小僧！！誇り高き大妖怪、殺生丸様を庶民的にお父さんなんてっ

しかも娘である月詠様を呼び捨てに・・・」

「いーの邪見」

「えっしかし」

「私の友達よ、呼び捨て結構！大歓迎よ！」

「あーも性格も容姿もりんに似おってーっ」

「誰だそれ」

「とにかくっ父上、文に書いた通り今瀕死の妖がいるのです！
あなたのお力を貸して下さいっ」

「えっ月詠 一体どういうこと？」

「後で説明するけど父上は一回だけ死んでしまった命さえも
生き返らせるほどの力があるの。それさえあれば・・・」
ニヤンコ先生は驚いたように

「まさか治るのか・・・」

「ほっ本当なの月詠!？」

夏目の問いに月詠は

「奪われた片羽があればもっと良かったんだけどね。」

夏目は急いで殺生丸に頭を下げる

「俺からもお願いします!あの妖鳥を助けて下さい!!」
夏目の必死さが伝わったのか、はたまた娘の友人だからか

殺生丸は言った。

「小僧・・・そいつはどこだ・・・」

その言葉に夏目と月詠はペアっと笑顔になる。あの子が治るのだから

「こつちですっ!!!」

そして部屋に案内するが邪見が言ってしまった。

「なんだなんだ小部屋ではないかっ!」

「こべっ・・・」

「こんな狭い部屋に通すなん」げしっ「てっ」

「城と一般家庭の部屋を見比べないっ」「・・・はい」

ぎりぎりぎり邪見を踏んでお仕置きする月詠

「あーもー怒った所は殺生丸様に似て……」
さめざめと泣く邪見

しかし殺生丸・月詠親子は無視だった。

「父上お願いします。」

「……うむ」

すると彼は腰の刀を抜いたのだ。

そのことに夏目とニヤンコ先生は青ざめる

「「待ったあああつ!!」」

ガシツ!!

「!?!」

思わずしがみついて止めてしまった。

「ちょっとつあなた何しようとしているんですか!?!」

「あー夏目私の説明不足。後にするんじゃないかった。」

月詠は苦笑いしながら説明する

「あのね。父上のその刀は私のお爺さま・鬪牙王の牙から作られた
天生牙っていつて癒しの刀なの」

「癒しの刀?」

「これが一回だけ蘇らせれる力の正体よ。」

真に人を慈しむ心があれば一振りで百人の命も救える程なの。」

「ひゃ・百人」

「この世の人は切れないし大丈夫だから安心して」

「本当にそうなのか?」

ニヤンコ先生はまだ疑っていたが

殺生丸はさらりと言った

「……邪見は真つ二つに切られたが生き返ったぞ……」

「ええっ邪見初耳よっ」

「はいっ本当にうれしゅうございました」

とにかく本物だとわかった

そしてとうとう天生牙で妖鳥のそばの何かを切った。

夏目たちは何を切ったかわからないままだが

すると

「……う」

目を開けてくれた

「よっ……よかった君大丈夫？わかる？」

夏目の問いに妖鳥は笑顔でこくりと頷いてくれた。

「父上っありがとうございます！」

「本当にありがとうございます！！」

「……あ……あ……りがと……」

「お主なかなかやるな」

夏目たちのお礼に殺生丸は

「娘の願いを聞いただけだ。」

……月詠、祖母がたまには里帰りして一緒に茶を飲もうと言って

おつたぞ」

「ふふっ……わかりました。この辺りで評判の七辻屋の饅頭をお土産に」

里帰りします。お茶の時は父上もご一緒に……」

母親ゆずりの笑顔で笑う月詠に殺生丸は

「……ふっ……甘いものは苦手だな」

微笑程度だがほんの少し笑ってくれた。

邪見はありえないことに怯えていたが……

殺生丸達が帰る時、夏目達は見送りに外に出た

「邪見……帰るぞ」

「はいっただいま」

するとその時だった。

殺生丸の目が紅くなり顔もどんだん犬になっていく

そして最後にはバカでかい妖犬の姿になった

「なんだこれは……!?!」

私よりでかいではないか……!?!」

ニャンコ先生はショックを受けたように叫び

「……でか」

夏目はただただ呆然

「きゃーーーーーっ父上かっ！いいーーーーー！！」
娘の月詠は興奮ぎみに叫ぶ

「父上ーーーー邪見ーーーー」
道中気をつけてーーーーー！！」

月詠の声に殺生丸は頷き、しがみついている邪見は手を振り、
空へ空へと去って行った。

妖鳥は回復したが片羽のまま……だから八ツ原の中級たちに頼
んで
そこで暮らす事になった。

「夏目っニヤンコ先生っお婆さまからのお土産食べましょ？
この匂いは私の好物の菓子ね！」

「何いつ！？夏目！茶を入れろっ茶！！」

「はいはい……月詠ありがとう……あの子を助けてくれて」

「ふふ……父上呼んだだけだよ。夏目だってお願いしたじゃない」

「ははは……」

妖鳥を助けられて嬉しそうな夏目と月詠だった。

ちなみに菓子最高級練りきりで見たい目も見事な細工であり、

夏田は食べづらかったという。

第21話 雛かえる

今日、月詠は夏目の家に遊びに行った。すると門の前に誰かがいる。

でもその人は消えた。妖だったのだろうか……。門には式と書かれていた。

夏目に聞いてみるとそいつの主は今、夏目たちがかえそうとしている卵の雛を食べたいと言っているそうだ。

でもその妖には悪いがこの卵は生きている
もう少しだけ生かしてあげたいそうだ。

ピシ・・・ピシ・・・

「・・・あっ」

「せ、先生、月詠 卵が」

「生まれるわっ」

「何!?!ピヨピヨピヨ」

カッ

ぱりんっ

「「!!」」

もぞ

夏目は覗き込む・・・雛は角がはえた人がたの赤ちゃんみたいだった。

「「「!!?!」」」

思わず衝撃が走った。
だってヒヨコみたいな感じかと思いきや人がただから……

「くしゅん」

「あ」

くしゃみした。裸だから風邪をひいてしまう。

バタバタ

「わー産湯産湯」

「わータオルタオル」バタバタバタ

「きゃー着物着物」

バタバタ

「ねえ夏目いらぬ布と裁縫道具とかある？」

「ハンカチと家庭科で使った裁縫セットだったらあるから」

「わかった」

とりあえず雛は目玉親父のようにお椀で産湯に入れられた。

ニャンコ先生曰く角から見て辰未の雛だそうだ

雛は最初に見た生物に変化するため、今回人がたになったのだ。
つまりニャンコ先生が先だったら招き猫型、月詠だと
人がたに犬耳になる。

「まあともあれ無事生まれてよかったな」
夏目はタオルで「ごしごしと雛の体を拭いてあげると雛は笑ってくれた。」

「夏目、着物できあがったよ。」

「ありがとう。」

雛に月詠お手製のハンカチ製着物を着せてあげる。

「よし、こんなもんな。」

「ふふ・・・かわいいっ似合ってるよ。」

嬉しいのかニコニコ笑ってくれた。

夏目と月詠もニコニコ笑ってしまう。

今日から雛の育成日記をつけることにするわ

雛は意外と器用だったわ。紙で壺のような巣を作ったの。

夏目と私を引っ張って入ろうってやっていた。それがかわいかった。私たちが小さかったら入ってあげれるのに残念。

ちなみにニャンコ先生は怒っていた。読みかけの経済新聞なるものを材料にされちゃったらしい。

今日は情操教育のためぴくぴくに行つたわ。

雛は花とかに興味を示しているの。

でも数日でヒヨコサイズがハトサイズになった成長は本当に早いわ。雛はにこつと笑ってくれて私も夏目も思わず笑顔になるんだけどニャンコ先生は笑顔というより、にやり顔で雛も私たちもこわかった。

ニャンコ先生のデカくなつたら巣から旅立つという言葉に

夏目が名前をつけてやらないと思つてたのにと呟いたが

ニャンコ先生が勝手に卵から生まれたからタマちゃんと呼ばれたらしい。

当然夏目は異議ありと怒る。私も安直すぎる思つた。

少しずつ少しずつ大きくなつたのにタマちゃんは衰弱していった。

ご飯をあまり食べなくなつてしまったの。

「む？何やら妖が屋敷内に入ってきたな」

「この臭い・・・鼠ね」

現れたのは鼠の文字を崩して書かれた傘を被った僧侶のような妖だった

ニヤンコ先生は猫じゃらしで鍛えた右フックでと言いかけたその時彼が投げた札で貼付けにされた。

そのスキに夏目と月詠はタマを連れて逃げる

しかしすぐに追いつかれてしまった。

ガッ

ザザッ

「う・・

鼠は人間は所詮非力な者、妖は災いにしかならんと言った
その言葉に月詠は切れた

「うるさいっ！！あなたに何がわかる！！たしかにわるい妖もいるけどね！！

人を愛する良い妖もいるの！！だから半妖の私が生まれたの！！

そんなこと言わないで！！」

その時タマが成獣になったのだ。

姿は竜より鳥に近かった。そしてタマは鼠を噛み付く

我を忘れてしまったのだ。

タマはフーフーと息が荒い。

しかし夏目と月詠が優しく撫でた。

「帰ろうタマ」

「タマちゃん帰りましょう?」

タマの脳裏には今までの楽しい日々

「帰ろう」

タマは自らの背中に夏目たちを乗せ空を飛ぶ

夏目は悲しかった昔を話して上げた。

夏目たちをおろすとタマは遠くへ旅立った

鼠はまた卵を探そうだ

あの日夏目が鯛焼きがたのおむねつなるものを作ってくれた。

鯛の形の卵焼きでおいしかった。

第22話 春に溶ける

今日夏目たちは強打した腰に効く薬草をとりにニャンコ先生に連れられて

しばの原に来た。

そこにはかつて二体の守り神を模した石像があったが、今は一体の石像だけがある。そして辺り一面雪景色、足跡もないのだが・・・

ニャンコ先生が躊躇なく足跡つける

こうして夏目、月詠、ニャンコ先生、阿吽の強制的雪合戦が開始された。

一通りやった後夏目と月詠は雪玉や雪兔を作った。その時後ろの石像から何かが現れる

「おや・・・人の子私の姿が見えるのか

・・・丁度良い私を移す依代が必要だったのだ。」

影は夏目に襲いかかったのだが

夏目が避けたので後ろの雪兔に

どんっ

「っっあっ」

入ってしまった。

雪兎に入ってしまった妖はショックを受けたように声をあげるが
この際いいかと自分のことを紹介した。

彼の名前は玄。石像に宿る妖だそうだ。

彼は三日前に切られた魔封じの木に封じられていた奴を
放ってはおけないと言った

夏目と月詠は感じる。

これは悲しみと憎しみだった

しかも玄の相方はどうしたのかというところ相方・翠は粉々に砕けてし
まい

玄はひとりぼっちなのだ。

次の日月詠は玄のことが心配になって夏目の家に行ってみた。

「あ、いらっしやい月詠様」

「え？……うさぎ耳……雪の匂い………玄？」

「ああ

体がなじんだので短時間だけ本来に近い姿になれるんだ」

「あーなるほど　なんか父上たちとは逆ね。

父上たちは普段は人間の姿だけど本来の姿は化け犬だから」

「へーそうなんだ」

すると支度を終えた夏目たちが現れる。

夏目のクラスメイトが言うには森林公園が三日前くらいから枯れ始めたらしい。とりあえず行ってみることにした。

進む度に腹を喰われた魚が落ちていた。草木も枯れている。

さらに進むとボロ屋があり中から何か感じられた

中を覗くと玄は誰かの匂いを感じ走った。

その瞬間だった。

ガタンッ

「「!!」」

悪霊が現れた。

悪霊はゆるさない　ゆるしないと恨めしそうに言う

夏目に襲いかかるうとしたとき

玄が身を挺して止めた。

彼は悪霊を抱きしめながら言った。

「これが翠なんだ」

翠が暴れたため逃げられた。

玄は悲しすぎる話をする

彼らは森を守っていた。

だがある日作物が取れなくなり、村人達は拝みに来た。

でも玄と翠は被い神、畑を潤すなんてできない。

近くを通りかかった妖に聞いたり、邪気を被ったりした。
なのにできなかつた。

人間たちは彼らのせいにし、玄は獅子と呼べぬ形になり

翠は谷底へ落とされ砕け散った。

彼女は悪霊になってしまった。

あれから聞き込みを収穫は無かった。
とりあえず今日は遅いから夏目の家に泊まらせてもらった。

しかしその日の夜、玄も悪霊になりかけた。

彼は友人帳に加えてもらって 何かがあつたら止めてと言ったのだ

「ひとりはまだ嫌だ」

悲しい声だった。

夏目と月詠はひとりじゃない おれ達がいると励ます

でも玄は自らを役立たずだと言った

夏目と月詠は言ってあげた

「玄は人を嫌いかもしれないけどおれは玄が好きだよ」
「私も翠のためにがんばる玄が好きだよ」

「虹に願おうとしてくれた翠のことも好きだよ。」
「だからそんなこと言わないで・・・ね・・・」

玄は二人のやさしさにふれて涙をポロポロ流した。

たくさん泣いて小さな雪鬼の姿に戻った。

第23話 春に溶ける

数日後 翠らしき影を見つけたという情報が入った。

夏目達は急いでその場へ向かう。

封印する方法はただ一つ、玄が翠を抱きしめ放さなければ二人ともあの石像へ帰れるそうだ。

不確かな方法……でも玄の覚悟は本物だ

そしてとうとう翠を見つけた。

しかし翠の攻撃により玄はコロコロ転がって行ってしまった。

しゅるしゅる

「！ 逃げる」

「待て」

夏目と月詠は逃げようとする翠を掴んだ。しかし火傷するかもしれないくらい

熱かった。でも二人は放さなかった。

たとえニャンコ先生が放せと言っても

「だめだ ここで逃がしたらまた」

「玄と翠のためにも放せないわ」

「先生 玄を 玄をここへ・・・」

すると二人の中に翠の記憶が流れ込んだ

また願いを叶える三色の虹が出なかった

早くまた雨降るかなとつぶやく翠

玄は雨は寒いから嫌だと言う。

そんな彼に翠は微笑みながらあなたがいるから寒くないと言ったのだ

「さむい

さむい

さむい

さむい」

その翠が寒いと言っている。寂しそうに・・・悲しそうに・・・

ニヤンコ先生が強制的に夏目達を剥がそうとしたその時だった。

玄が翠を抱きしめた。

じゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅ

「さむい さむい さむい

そんな彼女に玄はやさしく言ってあげた

自分も寒かった、一緒に帰ろうと・・・

「君の心がいつか癒えたら　また一人で虹を待とう
私も翠、幸せだったんだよ」

玄の体が消えて行く

でもその時　翠が涙を流し、一緒に消えた。

「さようなら

さようなら

夏目様

月詠様」

その後夏目達は玄と翠のために三色の虹のかわりに
花の種を植えることにした

三色の花をしばの原に……

二人は喜んでくれるだろうか

第24話 温泉へ行く

「うっわーーーーーっつ」

月詠と阿吽の耳に悲鳴が聞こえた。しかもこの声は夏目だった。急いで行ってみると青ざめて座り込んでいる夏目がいた。

「夏目、どうしたの。何かあった？」

「……あー神輿を担いだ小さい妖が水たまりを通りたがっていたから」

そばに落ちてた板で橋を作って通らせてやったんだ。

神輿を何気なく見ていたら風が吹いて、中身が見れたんだんだけど……

三つ目の頭蓋骨だった。……」

「……衝撃的な光景だったんだ。」

夏目は家に帰る。月詠たちは異空間の術で作った樹木の寝床に戻った。

見た目は樹木にある、ひとり人入れる穴だが、中は月詠の術で六畳ぐらい広いのだ。

布団は……さすがに無いので叔母であるかごめがかつて使っていた
寝袋を参考に出している。月詠曰くけっこう役に立っているそうだ。

しばらくすると阿吽の片方の頭が覗いて来た。

「ん？どうしたの、阿吽？」

月詠は顔を出してみると夏目、ニヤンコ先生、何故か名取と匂いがした。

疑問に思いつつ呼んでみることにした。

「おーいみんなー、こっちこっちー」

「あつ月詠」「むっ何で木の中から……」「やあ月詠ちゃん」

三人はここに来た理由を月詠を話す。

実は名取が芳香剤の懸賞で温泉が当たり、友人である月詠たちを誘っているのだ

「温泉かーいいなー」

「行くかい？」

「阿吽連れていいのなら行きますっ」

月詠は即答だった。

こうして夏目たちは藤原夫妻の許可のもと、温泉旅行に行く事になった。

「ところでなんで木から出て来たんだ？」

夏目の何気ない問いに名取とニヤンコ先生も疑問に思う

「そういえばそうだな」

「どうしてだい？」

「術で穴の中を広くしたんですよ。」

覗けば解るといふ月詠。言われた通り三人は覗いてみると

「「「わーーーーーっっ」」」

意外と広くて驚いたという。

第25話 温泉へ行く

まず電車に乗るのだが、名取は俳優。

そのため乗り合わせた周りの女性達はヒソヒソと話しながら顔を赤らめる。

夏目はあきれ顔・・・月詠は普通にお隣に座っていた。

「・・・月詠は名取さんを見て黄色い悲鳴あげないな。」

夏目は小さな声で聞いてみる。月詠は

「んー私からすれば父上が良い。強いし、カッコイイし。」

「えっひどいな。月詠ちゃん」

次はバスに乗る。当然、女性に赤らめた。

バスから降りると少し歩きになる。

しばらくしてようやく到着した

出迎えてくれたのは旅館の美人女将さん。彼女の案内で部屋に行くのだが

阿吽はさすがに部屋に入れないのでロビーに

名取はマネージャーに旅の事を連絡するのを忘れてらしく電話することになった。

とりあえず夏目達は先に部屋に入る事になった。

その部屋は窓からの景色も最高の良い部屋で

夏目達は思わずゴロンと寝転がる

「疲れたけど気持ちいいな」

「たまには遠出もいいものだな？」
「景色もキレイだしねー？」

するとカタカタと押し入れから音が聞こえた。何だろうと思いい開けようとしたが

名取が来た。そして温泉に行こうと誘う。

月詠は阿吽を連れて温泉に入った

「あゝいい湯　ねえ阿吽あなたもそう思うでしょ？」

「阿吽も気持ち良さそうだ。」

ちなみに男湯は騒がしかった。

後から聞くとニヤンコ先生が一番風呂してたり、女である柊が覗き込んでいたそうだ。

部屋に帰る途中、夏目が何か驚いた。妖がいたらしい。名取は館内を一周してくると一旦離れた。

夏目の話では人のような妖が首つり死体のごとくぶら下がっていたようだ。

何気に怖い。

また押し入れの中からカタカタ音が聞こえた

開けてみると切れかかった紙が貼ってある蓋をした壺

丁度妖をみたのは真下という事もあり見ないようにした

ニヤンコ先生はラッキョウが詰まってるかもというが
そんな話に乗らない。

すると丁度名取が帰ってきた

夏目は先ほどの気になることを話すがせっかく旅行に連れて来てく
たから
気を煩わせることでは・・・と話す

名取は理解してくれたのか

「今日くらい妖のことは置いておこうか」

夕食は騒がしかった。

柊が名取に夏目はがりがりだから肉を喰わせてと言ったので
名取と月詠は自分のあげようかと差し出す。

夏目はシヨックを受ける

ニヤンコ先生は酒が入りつまみにするぞーとよっぱらい
名取はきらめきオーラで笑っていた。

しかも驚いたことに月詠も普通に酒を飲んでいる。

こうして就寝

月詠はぐっすり寝ていた。夏目と名取はほんの少しだけ話して眠りに入る。

しかし

その夜事態は動いた

第26話 温泉へ行く

夜 夏目が夢でうなされた後、みんなは二度寝することになった。しかしだった。

カタカタ

ごんごん

押し入れの壺が開いたのだ。

「！ せ 先生 月詠 名取さん」

だしだし

「・・・んー？」 「なーに？」

夏目は慌てて皆を起こす。でも三人とも眠たそうだ。

急いで壺が開いた事や物音がした事、今勝手に蓋が開いた事、

それに嫌な気配が流れた事を話す。

押し入れを開けるとやはり壺は開いていた。蓋に貼ってあった紙には封の文字があった。やはり何かを封印していたのだろう。

夏目と月詠、ニャンコ先生は下の階に行ってみた。

途中でニャンコ先生は言う。

あの封印は最近のものだと・・・

すると夏目達は気づく。 目の前に首つり死体のごとくぶら下がった妖、

その妖がずずず・・・降りて来たのだ

「「「!?!?」「」」

その光景に夏目と月詠は青ざめる

ぼたりっ

「「ぎゃーーーーーーっっ」」

それほど怖かったのか落ちて来た妖の姿に夏目と月詠はニャンコ先生を間に挟み、お互い抱きつき叫んだ。

この妖は血が出ていた

「なかなか大物よ、夏目」

「食つてもいいか 夏目」

「先生・・・」

「……え？夏目？」

妖は夏目の名前を聞いた瞬間がばっと抱きつき、名前を返してと懇願した。

その勢いでニヤンコ先生と月詠は気絶する。

妖・スミエはこの地に住んでいたが人間に邪魔だと壺に封じられたそうだ。

名前を返してくれたら山奥に消えると彼女は言った。

夏目はスミエに名前を返す。しかしそれがいけなかった。

だまされたのだ。

夏目と気がついた月詠、ニヤンコ先生は寸での所で来てくれた名取とともに

逃げた。

そしてある部屋に入る。……妖封じの陣だ

夏目達はお互い話さなかったのだ

「手伝います 今回のことは自分が甘かったんです。」

「ありがとう」

ちなみに

ニヤンコ先生、月詠、柊は別室で待機することになった

後から夏目に聞いたのだけど、あの妖はとても速く束縛用の術なんてすぐにすり抜けられたらしい。もうだめかと思った時

三つ目のちがう妖が助けてくれたみたい。

その妖は夏目が話してくれた小さな妖が運んでいた三つ目の頭蓋骨だったらしい

彼はスミエを連れて行き、清めてくれるそうだ。

翌日夏目たちは旅館のチェックアウトをすませた。

「お待たせ 悪かったね また まきこんでしまった」

「いえ 本当に楽しかったです。」

「懲りずにまた、たまには会ってくれますか？」

その問いに名取は頷く

「ああ もちろん」

その言葉に夏目と月詠は笑顔になった。

「さあ帰るつか」

「はい」

第27話 桜並木の彼

最近夏目の部屋では変なことが起きていた。

とある絵を飾ってから毎朝毎朝枕元に花が散らばっているのだ
当然ニヤンコ先生じゃない

とりあえず今夜は徹夜しようと思っていた。

「夏目、どうしたの？なんか最近花の匂いがするんだけど……
？」

月詠は夏目達についた花の匂いについて聞いた。

「……あー…実はな……」

夏目は事情を説明する

「絵を飾ってから花が散らばっているかー……
小さい頃叔父さまと叔母さまが言ってたなー

戦国時代に妖の力を増大させる四魂の玉がかけらになってしまい

邪心を持つ絵師が、四魂のかけらと血と墨で描いた妖怪を実体化さ
せたって」

「四魂の玉って？」

「さつき言った通り妖の力を増大させる宝玉よ。
悪人など邪心を持った者なら黒く汚れ、清い心の持ち主だったら浄
化するの。」

妖が取り込んでしまったら

たとえば体をバラバラにされてもすぐに蘇ってしまう。

たとえひとかけらでも死者も蘇ったり、足につければ速さも上げる程よ。」

「しかしそれは消滅したと聞いた事があるぞ」

「そうなのか？」

「詳しくは聞かされなかったけど・・・本当のことよ」

こうして夜になった

三人は布団をかぶって見張る。そしてなぜかニャンコ先生は網を用意していた。

妖精だったら捕まえたいそうだ

その時だった

カタ・・・

・・・カタ
カタカタ

天井から音が聞こえた

見ると天井の板を一枚少しずれており、そこから右腕が伸びていた。
その腕からひらひらと花が落ちてくる。

すると腕は少しずつ腕で板をずらしていく

現れた顔はにたり笑顔のお面をかぶった妖だった

「う」

「(うっわーーーーっ)」

「(きゃーーーーっ)」

ニヤンコ先生は頭突きを喰らわせる。それが効いたのかぼとつと落ちた

落ちて来た妖が言うにはあの人に捧げた花だそうだ

あの人とは夏目達の後ろに飾ってある冬の桜並木の絵

よく見たら小さな人影があった

八坂様といってこの絵に住んでいるらしい

返してもらおうと壁から外そうとするようだが

何故か外れなかった

三人掛かりでも外れない

仕方が無いので妖、名前は巳弥は翌日も来る事になった……

第28話 桜並木の彼

それからというものの妖・巳弥は毎日毎日夏目の元に来た。ある時は花を吹雪の如く部屋に散らしたり、またある時は蛙を捕まえてきたこともあった。でもそれは花と生き物が好きな八坂様のためだった。

そんなあの日、月詠と阿吽は夏目の元に行く。すると途中で綺麗なレンゲ畑を見つけた。巳弥はこんな風景を見ながら旅をしたのかなと思った。

月詠は巳弥と八坂様のために少し摘んだ。しばらく歩くと巳弥が居た。

「あっ巳弥」

「む？月詠か！今日は早咲きの桜を持って来たのだ」

そう言いながら巳弥は小さな枝に咲いた桜を見せた

「そっか実はね、さっき綺麗なレンゲ畑があってね
巳弥と八坂様のために少しだけ摘んだの」

月詠は巳弥にレンゲを差し出した

「いつ・・・いいのか？」

「きつと八坂様も喜ぶよ」

その言葉にジーンとくる巳弥だった。

そして二人は夏目の部屋に入る

「夏目、昨日はありがとう 今日月詠が摘んでくれたレンゲと早咲きの桜を持ってき・・・」

「ぎゃーアホナツメなにやっとなるーっつっ」

「ぎゃー!?夏目」

「きゃーー!?夏目ーーー!!!」

そこには慌てているのと怒っているのを足して2で割った感じのニヤンコ先生と

倒れ込む夏目。月詠と巳弥は慌てて駆け寄る

「夏目しっかりしてーーー!!!」

「大丈夫か!? 一体どうした・・・」

巳弥は絵を見ると絵からなんと根が張り巡らせていた。

それを見た巳弥はレンゲと桜を落としてしまう。

少しして夏目が目覚めた。

巳弥が長年持ち歩いていたため妖力を持ってしまい、

そして夏目の力を吸い取って成長したのだろうか……
巴弥は妖力を使って燃やすと言った
しかし夏目は外す方法を探そうと言った

それからいろんな妖に聞いてみた。しかしいした進展は無かった。

「すまない……」

巴弥は謝る。

すると月詠は……

「……あのね巴弥あなたがあの絵を大切に思う気持ち……
私もよくわかるよ」

「え」

「……これ見て」

そう言いながら懐から一枚の紙を差し出す。
それには月詠とよく似た人間の女性が描かれていた。

「これは……もしかして」

「母上よ……父上は犬妖怪、母上は人間だね。
生命力の違いのせいか……昔死んでしまったの……」

「……………そうだったのか」

巴弥は月詠の母の絵を見る。すると

にこ…

笑った

「ぎゃーーーーーっつ

笑ったーーーーーっつ!？」

「そりゃあ妖力の高い妖怪絵師が描いた絵だからほんの少しだけ笑うよ

……………だからね私は母上がこの絵の中で生きているみたいに思うんだ」

「……………」

あれから進展の無く根はどんどん広がり、夏目はゴホゴホと咳き込むことが多くなった。

「月詠 私は決めた。絵のせいで夏目を殺すぐらいなら燃やすよ」

「……………そっか」

「でもせめて木を桜で満開にさせたいから
絵の具と筆の用意手伝ってくれるか？」

巳弥のお願いに月詠は当然のごとく手伝った

そして絵の具と筆をそろえた後、夏目の元へ行った。

絵の木を満開にしたいという願いに

夏目も喜んで手伝う。

夏目たちはどんどん塗っていった。

身長の高い巳弥は上の辺りを

夏目と月詠は真ん中

ニヤンコ先生は下 肉球でペタペタと塗った

「うまいなー月詠は」

「これは絵の先生に習ったんだ。ここを濃く塗ればらしく見えるよ」

「……………おー……………」

思わず感嘆の声が上がった

しばらくしてようやくできあがった

「ふふ」

絵の花びらは四人で描いたため個性があるけどとても綺麗だ。

「「で・・・出来た」」

「夏目、月詠」

さすがに疲れたのか倒れるふたり

「・・・きれいだね巴弥」

「巴弥 八坂さまはね・・・」

「ありがとう夏目 月詠 おやすみ」

夢を見た・・・満開の桜並木

少々いびつな桜、近くには綺麗な桜

多分夏目と自分が描いた桜だ

こっちは巴弥でこっちの肉球はニャンコ先生だ

つまりここは絵の中

すると木にもたれ掛かっている一人の青年が何かに気づく

青年はうれしそうに桜の花から伸びる腕に手を伸ばした。

そこから現れた巴弥は青年八坂様に抱きつく

現れた拍子でお面は取れたが顔はかくれて見えなかった。

でも表情は解る気がする。

だって八坂様がうれしそうに笑っていたのだから

夏目と月詠が目を覚ますと伸びた枝と描いた桜、
そして絵の中の八坂様は居なかった。巴弥はその日以来訪ねてこ
な
かった

きっと八坂様の夢だった旅に一緒にでているといいなと
月詠は思った。

第29話 呼んではならぬ

先日夏目達は友達と合宿に行ったらしい。

しかしそこにはレイコさんと勝負して友人帳に名前がある人魚が居たそうだ

行く先々にも契約したんだなあと思う。

そしているいろあつたけどなんとか名前を返せたって・・・
笹舟といういい名前だった

今日は大入道が歩いていて ずしんずしんとうるさい。

私は犬だから余計にうるさく感じる。

阿咩と一緒に出来る限り離れるとようやくマシになった。

するとふと足下を見ると陣が描かれていた。分かりやすくいえば

中心に大きい一つ目の陣だ。何かなと阿咩と共に乗ってみたら

「ねっ・・・ねえ君たち妖怪？」

おそろおそろ話しかけたのは帽子を目深にかぶった女の子だった。

「・・・え・・・えーと私は半分犬妖怪、半分人間の半妖だけど・・・

君だれ？」

「わっ私は多軌 透・・・」

「タキちゃんね、私は月詠。こっちは双頭竜の阿咩っよろしく！

ねえタキちゃん、これタキちゃんが描いたの？」

「……………うん。これは妖を見るための陣なの……………」

タキは事情を話した。

この陣は亡くなった祖父が残したらしくよく庭に落書きしていたそう
うだ。

そしたらある時、この陣の中に妖が見えるようになったのだ。

タキのご先祖は陰陽師みたいなことをしてたらしく

祖父は妖を見てみたいと憧れていたらしい。

彼女は嬉しくなり時々こうして遊んでいた。

ある時陣を大きく描いてみた。

それがいけなかった。

大きな妖を見ただけなのに呪いをかけられたのだ。

360日以内に捕まえれば見逃してもらえるみたいだが

できなければタキは食べられてしまい

彼女が最後に名を呼んだ人間から十三番目までの人間を食うと言っ
たのだ。

そして期日は近づき、タキは陣をたくさん描いて探していたのだ。

「そうだったんだ……………ただ見ただけなのに……………」

「……………うん」

「私も手伝うよ。一人より二人よ!!」

「えっいいの?」

「うんっ陣に入らなければ見えないでしょ?」

私が代わりにその妖のことをいろいろな妖に聞いてあげる」

「あっありがとう」

「でもその代わり呪いが解けたら　たくさん私の名前呼んでね、絶対だよ？」

「うんっ」

タキは久しぶりに笑顔になった。

「とりあえずその妖の特徴教えて？」

「わかったわ。陣に入った妖に見せるために描いた似顔絵があるの。そういつて絵を見せた。絵は……こわいがツユカミさま並に微妙だった

「……特徴はひたいの傷ね。」

「そうよ」

とりあえず月詠と阿吽はそれをたよりに探すことにした

しかしだった。

陣を描いてるタキが誤って夏目の名前を呼んでしまったのは後から知った。

第30話 呼んではならぬ

夏目達もタキの祟りを解くために例の妖探しに協力してくれた。しかし期日まで隠れているのか全然見つからなかった。

とりあえず夏目とニャンコ先生は池の辺り

タキは河原を探していた。

月詠はタキから教わった陣を描きながら探す。

たくさん描き上げるとタキが歩いて来た。

「あつタキちゃん」

「あつ………あぶないあぶない………
そっちはどう？見つかった？」

月詠の名前を言いかけたがなんとか言わなかった。
そして見つかったかどうか聞くタキ

「………全然」

月詠とタキはガツクリと肩を落とす。

二人は場所を移動するためとぼとぼ歩いていたら
ニャンコ先生が横を走っていた。

「どうしたの？そんなに慌てて……」

「何かあったのニャンコ先生？」

しかしニャンコ先生は二人に気づかずガザガザと何かを探していた

「・・・何か探している・・・？」

そして二人はそばに夏目が居ない事に気づいた。
二人は急いでニャンコ先生の元に走る

「ニャンコ先生ーっ」

「猫ちゃーっ」

「むっ月詠とタキか。夏目のやつが居なくなった。もしや例の妖か
も・・・」

「・・・猫ちゃん喋れるの？」

「しまったーっ」

「・・・ニャンコ先生・・・」

月詠は呆れるしかなかった

「私はニャンコ先生と夏目達に呼ばれとる。この猫の姿は依代の招
き猫で

本来はとても美しい姿なのだっ！！」

「ニャンコ先生・・・」

「あ」

「あーっ阿呆がっ」

「きゃーっごめんなさい！！」

ニャンコ先生までも対象になってしまふ可能性大になった。

とりあえず月詠達は急いで夏目を探す。

「あっちから匂いがするんだけど」

「そうか・・・夏目ーーーーー」

「夏目殿」

「返事して夏目ーーーーー」

「あいつ一体どこへ・・・」

「待ったニヤンコ先生っ！！
がっ

「ぐお」

なんと横から走って来た夏目に腹を蹴られてしまったのだ。

「先生・・・」

「夏・・・」

ゴロゴロ

「うわああああ」

「わーーーーー二人共ーっ」

夏目達は坂を転がり、月詠たちは慌てて声をあげた。

夏目は奥の洞窟で例の妖に会ったそうだ

タキは自分のせいだと謝ろつとするが夏目は今は悩むなと言ってくれた。

しかし夏目は例の妖に目をなめられたせいで妖であるちょびひげや、妖の血が流れている月詠が見えなくなってしまったのだ。

夏目と月詠はこんな時に……と

タキはあきらかに巻き込んだ……とがつくり肩を落とした
ニヤンコ先生には役立たずが二倍と怒られてた。

こうしてますます例の妖捕獲の困難度があがった。

第31話 呼んではならぬ

翌日夏目たちは合流した。

やはり夏目の目はまだ治ってないし、タキは徹夜で陣を描いた様だ。今回はニヤンコ先生も特別に手伝ってくれるそうだ。

その後ニヤンコ先生大好きのタキとある意味睨み合いになったが・・・すると夏目が

「月詠・・・そこにいるのか？」

「えっいるの？」

夏目とタキの問いに月詠は答える。

「うん、ここにいるけど・・・やっぱり見えない？」

「ああ」

その言葉に月詠は考える。

「・・・うん、本当は人前でやっては駄目だけど・・・」

二人は妖は見えるし・・・やるか!!」

「えっ何するんだ!？」

「えっ?えっ?」

夏目は月詠の言ってる意味がわからないし、

タキは聞こえないため何が起こるか困惑する。

するとどうだろう・・・

月詠の妖力がどんどん抑えられていくのだ。

そしたら半透明だが月詠の姿が見えてきたのだ。

「すごーいっ!!」

「半透明だけど見える・・・」

「なるほど・・・半分人間だから・・・人間に近い程妖力を抑えた訳か」

ニャンコ先生は納得する

「うん、だから人前でやったら絶対驚かれるんだー」

「はははは……」

とりあえず夏目達は場所を移動しながら例の妖について話す。

噂では捨てられた割れ鏡が禍々しい気を集めて妖になったそうだ。

「そこでこの私が超特別に飲み仲間から魔封じの鏡をもらってきたぞ」

そう言いながら自慢げに魔封じの鏡を見せるニャンコ先生

三人は思わず

「！！ すごい！」

「どうしたんだおれ、先生が頼もしく見える」

「私もっ！目にゴミ入ったのかな」

とにかくこの魔封じの鏡に封印することになった。

後は相手の姿を見るため陣に誘い込めば可能になる。

「何とか私を餌にできる方法はないかしら」

「タキ……」

「タキちゃん……」

しかしそんなタキにニャンコ先生はひどい事を言った

夏目なら餌にできるぞと

「（美味そうなおい！？）」

「（私はまずそうってこと……？）」

二人はガーンとショックを受け月詠は思わず二人の肩をぽんと軽く叩いた。

さらにニャンコ先生は「友人帳」の「夏目」だと気づいているだろ

うと続けた。

「お前は特別だからな。」

「特別？「友人帳」って……？」

疑問を浮かべるタキ

夏目は思わずビクツとなった。

だって数少ない仲間なのに……と

「……悪い……詳しくは話せないんだ　ちよつと厄介なもので・

・

でも……祖母のたったひとつの遺品なんだ……」

その言葉を聞いたタキは何か心情を読み取ったのか

笑顔で言ってくれた

「そう……じゃあ夏目くんの宝物なのね」

夏目は目を見開く……だって友人帳を見た親戚は皆落書きだとか
レイコはやっぱり変わり者だって言ったのだから

だからすごくうれしかった。

「うん……そうなんだ」

夏目は本当に嬉しそうに笑った。

そのときニヤンコ先生と月詠は何か気づく

ばしんっ

「ぎゅっ」

「ぎゅあっ」

「!? わ!? 先生っ月詠!？」

しかし二人はゴロゴロ転がりガラツと落ちてしまった。

例の妖が来てしまったのだ。

崖下

「う・・・うん あっニャンコ先生しっかりしてっ」

月詠はそばで気絶しているニャンコ先生を起こす。

ちなみに彼女は先ほどの衝撃で元の妖力に戻ってしまったようだ
また彼らには見えないだろう・・・

「お・・・おのれデカ物め・・・」

「とにかく夏目たちがあぶないから早くっ」

月詠に急かされてニャンコ先生は本来の姿になる。

そして月詠を乗せて夏目たちの元へ走った

少し行くと夏目が倒れていた。体を動かそうとしているが
痛みで出来ないみたいだ。

さらに奥にはタキと妖が対峙していた。どうやら陣に誘い込めた様

だ。

ザザザザザザザザザザザ

ふわり……

夏目の周りに風が吹いた。そして体が羽のように浮く

「……先生？月詠？」

「う……」

タキは妖に首を絞められている。もう駄目かと思ったそのときだった。

ザザザザザザザザ

ザッ

ザシユッ

ニヤンコ先生の牙と月詠の妖刀「天響牙」でタキと妖を引き離れた。

そして夏目は魔封じの鏡を掲げ呪文を唱える

「陰なる者よ 静かなる眠りに 光を見つけよ！」
妖の両目を鏡に映した瞬間だった

しゅるしゅる

「ひっぎゃあああ」

勢いよく魔封じの鏡に吸い込まれ
ドンッ

ようやく封印した

しかしだった

バタッ

「！ うわ夏目くん!？」

「あ、こら夏目しっかりしろ・・・」

「夏目？夏目ってば!？」

タキの祟りを解くことができたが夏目は妖の毒のせいではらく寝
込んだ

数日後元気になったらまた普通に妖が見えていたそうだった。

ちなみにタキはというと月詠の事を「月詠ちゃん」と笑顔で呼んでいた。

月詠も笑顔で答えていたそうだった。

第32話 里帰り

家に災いを起こすカリメという妖騒動から数日がたった。

阿吽は饅頭で有名な七辻屋のそばでうるうるしていた。

しかも何故か月詠の毛皮の羽織りと天響牙を背中に乗せていた。

「（何してんだ？）」

丁度通りかかった夏目は疑問に思う。

すると七辻屋から誰か来た。

「あつ夏目！」

「え！？」

人間姿の月詠だった。毛皮と刀が無いためか大正娘に見える。

しかも彼女の手には七辻屋の紙袋があった。

なぜ人間の姿で買い物をしているのか

事情を聞くと月詠は今日、里帰りする様だ。

それでお土産に七辻屋の饅頭を買ったのだ

「どれくらい向こうにいるんだ？」

夏目の問いに半妖の姿に戻り、毛皮と天響牙を阿吽から受け取りながら月詠は考える

「うん。二、三日はいるかな。お婆さまに久しぶりに会っし、父上にまた鍛えてほしいし……」

「そっか、それじゃあ気をつけてな」

「うんっ行ってきまーす！」

そして月詠はお土産の饅頭を大事に持ち、阿吽に乗って西へ飛んで行った。

月詠を乗せた阿吽はどんどん西へ行く。
途中何回か休憩を挟むが順調に進んだ。

そして夕方頃

「……お帰りなさいませ月詠さま」「」「
たくさんのお土産が迎えてくれた。」

「ただいま皆、阿吽がさすがに疲れているからお願い。」
「承知しました。」

そう言つて家来の一人が阿吽の手綱を受け取り、小屋へ連れて行く。

「お婆さまと父上はどうしているの？」

「ご母堂さまは首を長くしてお待ちしております。」

殺生丸様は丁度執務が終わつたそうです。」

「あの人も多忙ね……まあ最初にお婆さまに会いに行くわ」
「はっ」

ご母堂の部屋

「お婆さま、月詠です。」

「うむ、入るが良い。」

許可が入った。

「失礼します」

スススス・・・と丁寧に開ける月詠。そして奥には月詠の祖母であり、

殺生丸の母である通称・ご母堂様が座っていた。

「月詠元気そうだなによりだ。ささ・・・早くこの祖母に元気な顔を

見せてくれ」

「は・・・はい・・・」

そして近づくと

「あゝよしよし幾つになっても孫はかわいいものだのう。お前がいけない間少々元気がなかったが今元気になったぞ。」

「お婆さまくすぐったいです。」
頭を撫でるご母堂に月詠はくすぐったそうにする。
すると

「・・・・・・・・母上いつまでやっているか」

呆れた様子の殺生丸が入って来た。

「父上久しぶりです。先日はありがとうございました。」

「うむ」

「いいではないか久しぶりの孫との対面なのだぞ」

「・・・・・・・・」

剣呑な空気が広がる。このままでは殺生丸の堪忍袋の緒が切れかねない。

月詠は慌ててお土産を取り出した

「お婆さま、父上実はお土産があるんです。とてもおいしいんですよ」

「おやそつなのかい」

「……後でいただく」

とりあえず収まったので月詠は胸をなでおろした

「さあ、月詠。今日は宴だ。それまでゆっくり休むが良い。」

「はい。お言葉に甘えて失礼します。」

ちーん

月詠は母・りんの仏壇に手を合わせた。

線香をあげるのも久しぶりなのだから。

月詠は心の中で今までことを報告する。

新しい友達が出来た事……いろいろな妖との出会い等をだ。

「母上……お爺さまが最期に残した「大切な者はいるか」という意味

なんとなくわかる気がします。……わたしはもつと強くなって大切な者を守りたいです。」

そんな月詠の姿を殺生丸は離れた所で見守っていた。

そして夜騒がしいながらも楽しい宴が始まった。

「さあ月詠今日はお前の好物をたくさん作ってもらったからな」

「はいっありがとうございます。」

「殺生丸様、お酒をお注ぎします。」

邪見はそう言ってくれたのだが、

「ごすっ

「いらん」

ひじで殴れた。

「そんな〜」

ショックを受ける邪見を尻目に殺生丸は

「月詠」

「はい」

「注げ」

どうやら娘の月詠に注いで欲しかった様だ。

「はい、父上」

月詠はとくとくと杯に酒を注ぐ

殺生丸は酒を優雅に嗜みながら言った。

「月詠……明日は久しぶりに手合わせをやるぞ。」

その言葉に月詠は

「はいっ」

うれしそうに答えた。

第33話 里帰り

翌日、月詠は朝食を食べ終えた後身支度を整える。

そして向かったのは父が待つ広い庭だった。

「・・・来たか」

「はい」

「良いか・・・正午の鐘が鳴る前に私から天生牙を抜かせてみる。
そしたらお前の勝ちだ。」

「はいっ」

殺生丸と月詠は睨み合う。

そして一気に間合いを詰めた。

「たああっ」

月詠は天響牙で攻撃するが殺生丸は ふわりと避ける

「くっ 飛刃月華!!」

飛刃月華とは天響牙の必殺技であり、三日月状の刃が無数に攻撃するものだ。

「ふっ」

しかし殺生丸は余裕の笑みを浮かべ、光の鞭で飛刃月華をたたき落とす。

そのおかげで地面は傷だらけだが……

そして今度は殺生丸が攻撃に出た。光の鞭で連打する。

「ぐっ……う……」

月詠は何とか天響牙を使って持ちこたえた。

「はあっ」

彼女は攻撃しようとするが避けられてしまう。

やはり殺生丸は強い

天響牙で攻撃したり防いだりとそんな攻防の繰り返しでかなり時間がたった。

あと数分で正午の鐘が鳴る。

「はあ……はあ……」

さすがに息切れしてきた月詠。

「どうした、月詠もうお終いか」

その言葉にむっとしたのか

「お終いじゃなーいっーいっっ」

「!?!」

一気に間合いを詰めた。いきなりのおどろく殺生丸。

月詠は横一文字に天響牙を振るう。

ガッ

ごーん

ごーん

ごーん

月詠の攻撃を抜きかけの天生牙で受け止めた殺生丸。

その直後正午の鐘が鳴り響いた。

「……あ……あの……」

「……抜きかけだからな。引き分けだ。」

だが……よくがんばった。これからも精進しろ」

「はいっ」

父親の言葉に月詠は嬉しそうに笑った。

残り二日祖母とお茶を飲んだり、家来の子供と蹴鞠したりと楽しんだ。

そして月詠が出発する時間がやってきた。

「お前がいなくなるとまた寂しくなるのう」

「しかたないだろうが」

「邪見は寂しゅうございすう。」

「……お気をつけて月詠様」「……」

「お婆さま時々文をお書きします。父上修行頑張ります。邪見父上をよろしく。一言多いから気をつけてね。皆は父上達を支えてね。」

「……承知しました」「……」

「それじゃあ行ってきます！」

こうして月詠は阿吽に乗って出発した。

そのころ

夏目達はカイという妖に出会い大変だった。

第34話 的場一門

最近嫌な臭いがする。

血の臭いだ。なんでも妖が襲われ、大半の血を奪われてらしい。

とにかく私たちもできる限り気をつけようとしていた。

しかしだった。

空から血の臭いがしたと思ったその時。

「あつごめ・・・うわあああ」

ズザザザ

多分傷だらけの妖とともに何かから逃げたが落ちたみたいね。

月詠と阿吽は傷薬が入った貝を持ち、夏目たちが落ちた場所へ向かう。

「夏目っ」

「月詠っ阿吽!？」

「悲鳴が聞こえてね大丈夫？」

その言葉に夏目は慌てて

「あっおい大丈夫か!？」

「きゅー」

羽の妖に声をかける。どうやら繁みがクッションになってくれたおかげで

気絶している様だ。

夏目は隠れそうな場所を探す。

「夏目、あそこっ廃屋があるわ!」

「わかった!」

こうして夏目たちは廃屋に身を隠す事になった。

「よかった。応急処置とはいえ傷薬持って来て・・・

後で夏目たちにも貸すね。」

そう言いながら月詠は羽の妖の手当をする。

「ありがとう」

そしてどうしてこうなったかを話す。

河童の見た奴の話では血を奪った奴は大きな黒い影で後ろにいる男がじっと見ていたこと。

昨日、多分血を奪った男につけたひっかき傷と先ほどすれちがった番傘の男と

同じ所にあつたため追いかけてみた。

そしたら羽の妖が河童が話していた黒い影に襲われていた。助けようとしたが今度は夏目がやられそうになる。

ニヤンコ先生が倒すとそこにいたのは番傘の男

黒い長髪を後ろで結び、右目に印が描かれた眼帯をつけていた。

彼は名乗る……的場と

そして襲われそうになったとき羽の妖ががんばって飛んでくれたのだが

名取の紙人形が周りを飛び、くしゃみをしたため落ちたのだ

「そうか……」

「暫くこの廃屋に隠れていよう　あの妖を休ませてやらないと……」

「名取の阿呆がお前を探しているようだな……外を見てくる動くなよ」

「あ……私も」

「え」

そしてニヤンコ先生と月詠、阿吽はさっさと外へ行ってしまった。

阿吽に乗ってしばらく空を飛ぶと思いのほか名取の匂いがした。

月詠は名取の所へ一直線に行く

「名取さんっ柎」

「あっ月詠ちゃん」

「夏目ならこの先の廃屋です。乗って下さい」

三人と一匹は廃屋へ向かう。その時だった

「っ」

「どうしたんだい？」

「妖が二匹っ夏目が危ない!!」

「何っ!？」

月詠たちは急いで廃屋へ向かった

夏目は妖二匹に攫われそうになっていた。
でも名取が来たおかげでなんとか助かった。

「無事でよかったよ夏目」

「阿呆!きさまの紙人形のせいで落ちたんだぞ!!」

「おかげで夏目たちは擦り傷だらけ、その子なんて怪我をしていたのに」

さらに怪我が増えたんですよ……」

「……さつきはどうも……名取さんがここに?」

名取は心配事があつたようだ。

そして彼は聞くなんでの場の妖に襲われていたのかを

的場が血を集めている事を伝えると今回は手伝ってくれる様だ。

「的場さんって若いんですね もっとこう・・・渋い感じかと思っ
ていた・・・」

眼鏡をかけスマキを噴かす白髪、白ひげの男性だと思っていたのだ
から・・・

『妖なんてみんな私ん舎弟さ じゃまするやつはスマキにするよ』

(BY夏目の想像図)

「眼帯、長髪、番傘とは随分痛い格好だな」

「まあ色々あるのさ 長髪のほうが妖に、髪をやるからと交渉しや
すい。」

「手伝って欲しければ体の一部を貰うって感じだね。」

「へえ」

「眼帯も・・・まあ色々あるのね」

「それじゃあ私は帰るけど・・・柊この薬渡しとくね」

「わかった」

柊は月詠から薬を受け取った

第35話 的場一門

翌日夏目達は羽の妖を匿っている廃屋へ行った。

「おはよう。」

すると看病している柊と羽の妖が気づく

「大丈夫？」

「具合は？」

「まだ動かない方がいいようだ 名取は調べに行っている」

名取も一晩廃屋に居た様だ

「・・・名取さんもまさかこの廃屋で一晩？」

「その方が調べやすいから。」

夏目達はどうしてそこまでと疑問を口にしたら

蛇を出してしまったと思っっているんだらうと柊は言う。

蛇は的場の事だ

ニヤンコ先生は的場に関わらない方が良いと言う。

すると名取が帰って来た。

「ただい・・・夏目、月詠ちゃん」

「あつ名取さん・・・すみません・・・でも
ちゃんと夜は休んでください・・・」

「体に悪いですよ……。」
心配する夏目と月詠に名取は

「平気さ 寝不足ごときで私の笑顔が陰ることはないから安心してくれ」

「完全に発言が徹夜あけのおかしなテンションじゃないですか」

「何だかすごい変です。」

「そうか？いつも通りの発言に聞こえるぞ」

とりあえず夏目達は阿吽を連れて廃屋を出た。

妖が襲われた場所を繋ぐと一本線になる

西から東に向かって襲われているらしい。

スタート地点になった場所に行ってみると小さいながらもきれいな村があった。

そこで妖や人に聞き込み等をする。

しばらくしてニャンコ先生が何かに気づく。

「あそこだ！！さあ走れぐず共 うどんに向かって」

「え？」

ただうどんが食べたかっただけみたいだった。
しかたなく入る事にした。

ガラッ

「いらっしゃいます……」

「こんにちは素うどん四つ」

「きゃー」

「……」

一緒に入った夏目と月詠は無言。ちなみに月詠は天響牙を毛皮の羽織りに包み

阿吽に預けた。そして妖力を極限に落として人間の姿になっていた。おかげで大正娘みたいで目立っていたが……

「あの、すみません この辺りで何か変な噂ありませんか？
うどんを持って来た店員は

「え？変……といいますと？」

名取は続ける

オバケが出る所があるとか、変わった人がつろつろしているとか

「……変わった人……ですか？」

店員の視線は名取と月詠に向かっていた。

「あ、あのこの人たち以外ですよ」

すると有力な情報が得られた。

裏の宿に的場らしき人物が泊まっているそうだ。

いきなりわかるとは……もしかしたら罨かもしれない。

とにかく例の宿に行く事になった。

到着した時は雨のせいでぐしょ濡れだったが……

しかも最悪な事が起きた

「今の雨で、村の入口のトンネルに落石が。明日まで不通らしいですよ」

「……えーーーーー!?」「」

夏目は塔子さんに、名取はマネージャーに連絡、月詠は阿吽の巨体を隠せる場所を探す。

的場に見つかったら滅っさせそうだから……
立ち入り禁止の場所に連れて行き、呪術の先生から教わった見えなくする結界を二重にほどこす。

部屋に着いた後……名取は言った

「鉢合わせすると面倒なことになりそうだからね

君は部屋を出ないほうがいい 私は様子を見てくるよ」

「すみません……」

名取が部屋を出た後、夏目はため息を出す。

「何だこの役立たず感……」

すると月詠が言った

「この村 悪い気が集まって来ているね。」

ところてんをちるっと食べているニャンコ先生も

「やはり何か禍々しい術がこの近くで行われようとしているのだろう

これは……この辺りにも悪影響が出るかもしれんな」

「……………」

だっ

「ちよっ……待って夏目!!」

「どこへ行く」

がしっ がしっ

「名取さんが心配だ 柊もないのに」

「わかった。行ってあげるからおとなしくしてっ!!」

「相手は的場だぞ おまえのエノキパンチなぞ効くか」

「う……」

さすがにぐさつと来たようだった

「いいな、私たちが帰るまで絶対あけるなよ」

「わかった・・・先生たちも気をつけて」

「大丈夫、夏目以上の拳骨で殴るから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうか。」

そしてニヤンコ先生たちは名取を追いかけた。
しかしそれがいけなかった。

部屋に居る夏目が謎の女に攫われてしまった。

第36話 的場一門

月詠とニヤンコ先生は名取と合流していた。

「・・・まったく、なぜ私について来るんだ月詠ちゃん、猫ちゃん」

「あはは・・・すみません」

「むむ、いつもより見晴らしが良いな」

名取の方に乗るニヤンコ先生はそう言った。

すると宿の方に猫ちゃんは困りますと言われる

名取はぬいぐるみですよと言った

「夏目があなたを心配して騒ぐから来たんです。」

「文句なら夏目に言え」

その言葉に名取は はあ・・・とため息をこぼす

そして今度は的場の話に移った。

的場は危険な妖でも恐れず使っし、目的の為なら従えていた妖を餌にする。

妖には容赦がない人なのだ

今回名取が妖を連れてこなかったのもわかる気がする。

「お前、いつも妖を連れ歩くくせに今日は置いて来たな」

ニヤンコ先生の言葉に

「別に意味はない 今は連れてこなかったことを後悔して・・・」

あつ

部屋の扉に貼ってあった護符が破れていた……。

「しまった 護符を貼っておいたのに君たちが出る時破ったな」

「ええっ 貼ってあったのですか!？」

「むむ それで戸が固かったのか」

破ったのはニヤンコ先生の様だ

そのことに名取は切れる寸前、ニヤンコ先生はチンケな護符を貼る
お前が悪いと言う

「くそう いちいちうまくいかないな……夏目、ただいま……」

ひゅっつう

全開に開かれた窓、そのせいで雨が入り窓際と床が濡れていた。

三人は思わず心の中で叫ぶ

「「「(あきらかに何か来た!!!)「「「

「な、夏目!？」

パタン

「夏目」パタン

「夏目どっつ!？」

パタン

月詠たちは部屋中を探したが居なかった

「……!! いない……」

「まずいな……連れていかれたか」

「と……とにかく的場の泊まっている部屋に行きましょっ!?!?
居るかもしれないし!?!」

「そうだね。フロントに行くか……」

月詠たちはフロントに行き、的場の泊まっている部屋を聞いた。
しかしだった。

「的場様ですか? 離れの三階にお泊まりでしたが
ついさつきチエックアウトを」

「……!?!?」

一歩遅かった。

「……早っ……」

名取は思わずヨロつく

ニャンコ先生はだしだと叩きながら「裏目の名取」だと文句を言
う。

「……何か言ったかねこまんじゅう」

こうして名取とニャンコ先生の喧嘩が勃発

月詠と宿の人が慌てて止める。

すると何かに気づく名取。窓の外を見ると森へ走る一人の女性

「! あれは……?」

「どうしたんですか?」

「む 森へ向かっている……夏目……」

月詠は阿吽を隠している二重結界を解除する。

外に出た後だった。

「あ……」

「どうしたんだい？」

「夏目の匂い……森の中からする。」

その言葉にニヤンコ先生は

「そうか あの森で何か術を行う気だな」

「急ごうっ月詠ちゃん案内して！」

「はいっ」

しばらくして岩場のある場所に着いた

「え〜と……あつこの穴から夏目の匂いが……」

何か女の人の匂いと……すぐく恐ろしい妖の臭いがする……

「

「なるほど やはり封印を解く為か」

名取は手頃な長い棒を拾うと

「月詠ちゃんは後から来てくれ。行くよ猫ちゃん！」

「おうっ」

「阿吽は入れないから出来る限り離れた所で待ってて」

月詠の言葉に頷き、阿吽は遠くへ行つた。

見送つた後、月詠も穴へ入つた。

入ると丁度ニヤンコ先生が女性に光で威嚇していた。大抵の妖は効くのだが
女性は少し怯んだだけでニヤンコ先生に武器で攻撃しようとする
夏目は慌てて身を挺して庇うように抱きしめたその時だった。

ガンツ ガンツ

彼女の武器を棒と天響牙で受け止めた名取と月詠だった。

「大丈夫っ夏目!?!」

「さがりなさい夏目 あんた何やってんだ」

ガンツ キンツ

「名取さん、月詠」

「私の光が効かなかった……!?!」

少しして夏目は呟く

「……あなたは……人？」

「勿論」

彼女は即答だった。

すると名取は彼女について説明する

「腕のある呪術師……私と同業だった人だ」

「え」「え」

「・・・妖を作って襲わせていたのはこの人・・・？」
「的場じゃなかった・・・。」

的場じゃなく犯人はこの女性だったことに驚く夏目と月詠

しかも彼女は自らの妖を的場の妖に食われてしまい、引退したそう
だ。

すると彼女は ふふと笑いながら灯りを持ち上げる

「血を集めているのは私だ 的場を あの男を
食ってくれるような妖を目覚めさせるためにね」

夏目達の後ろには巨大な妖が縛られるように封印されていた。

第37話 的場一門

封印されている妖は夏目達の後ろにいた。あまりの大きさに夏目と月詠は驚愕する。

「見る夏目、月詠 大妖を中心に既に目覚めの陣が描いてある」
しかもそばには数個の壺が置いてあった。

「・・・壺・・・？」

「集めた血が入っているのだろう」

「ええ・・・血腥い・・・嫌な臭いがする」

鼻がきく月詠は顔をしかめながら袖で鼻と口元を隠す。

「しかし目覚めには その壺だけではまだ陣の内の供物が足りてないようだ」

ニヤンコ先生の言葉に女性は的場をここにおびき寄せ、たどり着いた時

大妖を目覚めさせて食わせてやるらしい

すると名取は問う

「・・・式を食われた復讐ですか・・・？」

こういう仕事な以上使っている妖は・・・」

「道具のような存在？」

先に言われる

「私にはそうではなかったんだよ」

きつと彼女にとって自らの式は心から信じられる相棒で、家族、そして親友同然だったんだろう。だから心が壊れてしまったのだ。

「だからって正気ですか？多くを巻きこんで」

「わかってもらわなくて結構・・・的場もじきここへ来るだろう
しかしまだ血が足りないのだ」

・・・カサ

カサカサ

カサ

「もらっぞ」

背後に紙面の妖が現れた

ガンッ

名取は夏目の腕を引っぱり、棒で妖の攻撃を受け止める。

「名取さん・・・」

「ふふ まだいるぞ」

彼女はさらに紙面の妖を増やした。

その内の一体が月詠に襲いかかる

「はあっ！！」

ザシュッ

月詠は天響牙で妖を斬りつけた。

しかしやはり相手が多い。

「ちつきりがない」

ニヤンコ先生は本来の姿になり、妖をがぶつと噛み付いた。

「先生……」

「……不美味」

美味しくなかったらしい……。

「ふん こんな影人形など一掃してやるわ……」

その時

と とつ

二本の矢が二体の妖に当たり、消えた。

どこからと思った次の瞬間

「先生つ月詠……」

夏目はニヤンコ先生と月詠を庇おうとしたが、

びっ

「うっ……」

とつ

とつ

「きゃああっ」

一本の矢が夏目の肩をかすめ、ニヤンコ先生に、もう一本の矢は月詠の腕に当たる。

そのせいで三人は倒れる。しかも月詠は矢のせいなのか人間になっ

ていた。

「おや失礼

妖がごちゃごちゃいたのでどれがどれやら

その子に当てる気はなかったんですが

・・・かばったということはその子の子分ですか？すごいな
その女の子だって・・・先ほどまでは白銀の髪だったのに・・・今
は黒髪

そうか半妖か。初めて見たな」

矢を射たのは的場のようだった。

的場はなかなかたどりつけなかったが

ちよっと泳がせてこの場を見つけさせたらしい。

しかも彼は女性の思惑通り興味津々だった。

「う・・・」

傷口をおさえて倒れる夏目と月詠を見てニャンコ先生はざわつく

「小僧・・・身の程を知らぬ者よ覚悟するがいい」

「！！」

名取はまずいと感じ取ったようだ

パタタ　　パタッ

パタ　　パタ

ニャンコ先生の紅い血が落ちる

そして気がついた夏目達ははっとする。

「先生」

「はっ」

「先生おちつけ あまり動くな」

「血が出ているのよ 傷が広がるわ!」

「夏目、月詠ちゃん大丈夫か!？」

「矢さえ抜けば妖力も戻ります」

月詠はそう言いながら躊躇なく矢を抜く。そして元の半妖の姿に戻った。

「すみません かすただけです それより先生が・・・」

「何だか父上並みに切れかかっているよ夏目」

「先生!」

「・・・」

二人が一生懸命声をかける

夏目達はじっと見つめる・・・すると

「・・・ちっ」

どろんっ

招き猫の姿になってくれた。

「命拾いしたなめ場とやら」

「何だつまらないですね」

パタ パタ

「わっ先生、月詠 血が出てるってば」

「む……」

「あ……半妖ならすぐとはいかないけど人より早く治るから心配しないで」

「血の一滴二滴でさわぐな　こんななめときゃ……」
ぐぐぐぐぐぐ

「ぬ、ぬぬぬ……」

「届いてないじゃない」

丸い体のせいか、あるいは傷の位置のせいか届いていなかった。

「夏目　傷は？何てムチャするんだ」

心配する名取に夏目は

「すいません　でももうほら血も止まってます　それより先生と月詠の血があんなに……」

しゅる……

「……（?!?!?!）」

しゅるしゅる

なんとニヤンコ先生と月詠の血が動いたのだ。

「うわ何だ！？血が蛇みたいに動いて……」

夏目は青ざめながら呟く

「……やつぱり先生と月詠妖怪だったんだな」

「阿呆！さすがの私でもあんなにハッスルした動きのものが体の中を流れていたら恐ろしいわ」

「人も妖も血は基本的に変わりないよ。あるのは力があるかないかぐらい」

するとブツブツと呪文を唱える声が聞こえて来た。

「夏目　壺の中が空になっている……」

その血が向かっている方向は例の妖だった。血は妖の口に入り込む
そして動き出してしまった。

しかも妖はニャンコ先生さえもまずいと言わせるひどい毒気を放っ
ていた。

女性は高らかに私の為に的場を食えと命令する。

だが

「おお・・・」

「あぶない・・・」

ばんっ

「あ」

女性は妖に叩き付けられる

ばんっ

「!!--」

ばんっ

妖は地面や壁を叩く

的場は無様と言い、使えないから撤退すると言った

さすがに怒る夏目と月詠

名取は夏目と月詠を抑えて危険だから外へ逃げると言った

「さすがにこれが地上に出るのはまずい 封印してみる」

「！ おれも手伝います」

「私も！」

「ひとりよりは三人でしょう？」

夏目と月詠は気を失っているニャンコ先生と女性を見る

「先生、その女の人についてやって……」

「お願いね……」

夏目と月詠はニャンコ先生をやさしく撫でた

そして名取の後を追いかける

封印の準備の様子を見ている的場は呆れている秘書の七瀬にこう言った

「あの妖は使えないが あの男子と女の子と猫には興味がある」

夏目と月詠は妖に石を投げた

石はカッンと当たり、妖は夏目達に気づく。夏目達は陣に向かって走った。

しかし妖が早い。夏目達は呪文を唱える名取のところまでがんばって走った。

「夏目」

がっ

ぐいっ

後一步だったのに捕まってしまったのだ。食べられる寸前だったとき
たんっ

妖のうなじ辺りに札付きの矢が刺さった。的場だ

「的場……」

「地に眠りし錠を持つ者来られたし 岩間を荒らすは彼、
人ならぬものは連れ帰られよ。」

カツ

ざらあ……

矢が光った瞬間、妖は灰のように消えてしまった。

「夏目……」

「しっかりっ」

「いらぬ妖に手間などかけず消してしまえばいい」
「！」「」

「あの妖も女も どうでもいいので放っておいても構わなかったの
ですが」

君たちは面白そうだ」

的場は夏目と月詠に興味を示した

「私は的場一門当主 的場静司 以後お見知りおきを」
こうして彼は部下達を連れて去っていた。

女性は名取家が預かる事になり……ニヤンコ先生は傷の回復のため

眠る事になった。

「あ、結局名を訊き忘れたな」
呑気に言う的場に七瀬は

「おやおや確か夏目貴志と月詠

あの夏目レイコの孫と犬の大妖怪の子らしいですよ」

その言葉に的場はさらに興味を示した

「夏目レイコの孫と犬の大妖怪の子……」

ああ それは益々面白いものを見つけたな」

第38話 文化祭

実は数日後夏目達の学校は文化祭をやるらしい。

月詠も是非来てくれと夏目に言われた。

月詠はとても楽しみにしている。

だれもいない河原で月詠はタキが見えるぐらい妖力を抑えた後

夏目、田沼、タキに何をするか訊いてみた。

「みんなは何をやるの？」

「バザーをやるんだ。簡単に言えば中古品市」

「おれは劇、シエークスピアに決まった」

「し……しえーく……？」

月詠はよくわからなかったらしい

「あー西洋の劇だ。よかつたら見に来いよ。」

「うんっ！ タキちゃんは？」

「私は男装女装喫茶よ」

「じゃあタキちゃんも男装するのね。なんか見てみたいっ」

「うんっ月詠ちゃん楽しみにしててね」

「わかった」

しかし準備期間中に夏目は憑依型の妖に襲われたそうだ。

田沼とタキが来たおかげで助かったと言っていた。

妖は鳴りをひそめ、特に目立った動きもなくついに文化祭当日がやってきた。

月詠は毛皮と天響牙を阿吽に預け、人間になる。

「それじゃあ阿吽行ってくるね。」

阿吽は こくりと頷く

「いらつしゃいませ ぜひ見ていって下さい」

そこにはちよつと髪型を変えてエプロンを纏い、バザー会場の看板を持った夏目が居た。

そんな夏目に同級生たちは

「夏目くんー写真一緒にとっていい？」

「え」

「これっておまけしてー」

「あ、えつと」

彼に群がっていた。

「あはははっ夏目大変だねー」

「あつ月詠！」

「やつ来たよー。いろいろあつて楽しそうだね。」

「ま・・・まあそうだけど」

その時だった

「おっおい夏目！誰だよこのカワイイ子ちゃんっしかも着物着てるし似合っているし！！」

ミィハーな西村が興味津々に夏目に月詠のことを訊いて来た。

周りの生徒たちも今時着物を着ている少女に興味を示している。

夏目はヤバイと感じた

「あー・・・月詠って言っておれの友達。旧家のお嬢さんだから常に着物着てるんだ。」

夏目はなんとかごまかした

「そっそうか。初めましてっ！夏目の友達の西村です！！」

「月詠よ、よろしくね。今日は夏目達の文化祭だから遊びに来たの」

「そっすか！」

西村は心の中で夏目、よくやったと褒めていた。

「月詠、ついでに何か買っていくか？」

「んー・・・あ、じゃあ此れ貰うね」

それは女子が持って来たシンプルだけどかわいらしいピンクの花のヘアピン2本だった。

「あ、200円な」

「わかった」

月詠は200円払い、花のヘアピンを受け取る。

「次はどこ行くんだ？」

「タキちゃんのトコ。男装見てみたいから。それじゃ二人ともまたねー」

「ああ」

「はいっ」

月詠はさっそく花のヘアピンを両側につける

そしてタキの元へ行った

そこはその名の通り、男子が女子の格好をし、女子が男子の格好をする

ちよつと微妙な喫茶である

「いらつしやいませー」

「あつタキちゃん」

「えつ月詠ちゃん？髪が・・・」

ホストのようになつたタキが月詠の髪の色に驚く

「半分人の血が流れているからね、さらに抑えれば人間になるんだよ。」

にしてもタキちゃんカツコイイっ！似合っている！！」

「あはははっありがとうございます」

そんな談笑していたらクラスの人が

「タキー写真撮ってもらいなよっ似合っているんだからさー」

「えっ？えーいいいよー」

「いいからいいから」

しかたなくタキはグラスを持ち、ホスト風にパシャッと撮ってもらつた。

「そこの君も一緒に撮る？」

「え、いいの？」

「月詠ちゃん一緒に写ろっ」

タキの誘いに月詠はうれしくなる

「うん」

そして月詠とタキはクラスの人に仲良く撮ってもらつた。

「それじゃあ現像できたら渡すね」

「ありがとうっ」

「楽しみだねっ」

すると他のクラスメイトが

「タキー、そろそろ休憩いいぞー」

「はい、月詠ちゃん一緒に回る？」

「うん、夏目のトコは最初に行ったから次は田沼の劇見てみたいな」

「それじゃあ行こ」

二人はさっそく劇をやっている体育館へ向かった。

しかしその途中夏目が倒れたと聞いた。月詠とタキは保健室へ急ぐ。

そして保健室近くで同じく聞きつけたのだろう、田沼と合流した。

「バカつたれめ」

「こら！保健室では静かに！！」

ガラッ

「夏目くん倒れたって大丈夫！？」

「何があつたの！？」

「タキ・・・それ・・・男装か？それに月詠の姿・・・」

あ、よかつた夏目元気そうだな」

「・・・あつ五組の多軌さん、それに月詠さん」

「・・・それと田沼・・・だっけ」

「あ」

タキの視線がベッドのニャンコ先生に移る

「こらニャンコの入室は困ります!」

「す、すみません」

こうして文化祭は終わった

帰り道

「はあ・・・お騒がせしました。」

「ふふ本当だよ」

「心配したよ」

「・・・・・・・・タキの男装や北本の劇も　もっとちゃんと見たかったな」

「・・・・・・・・・・」

「そうだなでも　今回で終わりじゃないだろう　次はきつとうまくいく」

「そうかな」

「次もまた行くね」

その時だった

「おい」

「!」

そこには笑顔で手を振る西村と北本の姿があった

「おーーーーーい釣り行かないか？自転車乗ってこーい」

皆は自転車に乗って釣りに行く事になった。

「つつ月詠さんは自転車持ってないんですか？」

「持ってないよー」

「そっそれじゃあおれの後ろに・・・」

「田沼乗せてー」

「ああ・・・」

その言葉に西村は肩を落とす

ちなみに夏目は北本の後ろに、タキは自分の自転車で行く事になった。

そして自転車が動き出すと、月詠は本当にいつも以上に楽しそうだった。

後から訊いた話だがとても速いと聞いていたが生まれて初めて乗ったそうだ。

第39話 映すもの

文化祭が終わってから月詠の白銀の髪にはピンクの花のヘアピンが付くようになった。本人曰く気に入ったらしい。

そして昨日、雷が落ちた。とてもすごい音だった。

月詠は小さい頃、酒好きな妖・薬老毒仙から

雷が落ちた古い木からこの世のものならぬ酒が湧き出ると聞かされていた。

多分ニヤンコ先生は雷の落ちた木を見に行くだろうなと阿吽を連れながら思っていた。

なんだか森の妖が騒がしい。木の上に何かがあるらしい。

たしかに離れた木の上に光るものがあった。

すると夏目が近づく、離れたところには田沼の匂いがした。

光るものは夏目に落ちたぽかった

月詠たちは近づいてみる事にした。

ゴオツ

突風が吹く。でもこれは妖の匂いだった。月詠たちは慌てて夏目達の元へ行った

「夏目っ 田沼大丈夫!？」

「あっ月詠、阿吽」

「よっ月詠」

夏目達はこっ恥ずかしい台詞の後だったので、

月詠と阿畔が来たおかげでマシになった。
するとそのときだった。

ガゼツ

「うい〜〜美味だ〜〜美味であつた〜」

「「「ぎゃつタキの妖怪!!」」」

と思いきや酒の飲み過ぎで顔真っ赤のニヤンコ先生だった。

「と思つたら夏目ん家のポン・・・何とか先生か」

「まったくどこ行つていたんだニヤンコ先生!

「くさい!先生つたらお酒臭いよ!!」

「うい〜」

田沼はニヤンコ先生だったことに安心し、夏目は当然どこ行つていたのか怒る

月詠は嗅覚が鋭いため、袖で鼻を隠した。

次の日

「月詠ー」

夏目とニヤンコ先生がきた。

「何?どうしたの?」

「タキが写真、現像できたから渡してくれつてさ」

「うまく写つておるぞ」

「わーっ本当っ!?!」

月詠は嬉しそうに写真を見る。それは男装姿のタキと人間姿の月詠が仲良く写っている姿だ。

「夏目、タキちゃんに会つたらお礼言つてね。これ大事にするから」

「ああ、わかった。なあ月詠、田沼にも文化祭の写真渡すんだけどお休みで……一緒に見舞いに行かないか？」

「うんいいよーそれじゃあお薬を……」

「ちよつと待てっ」

「それは駄目っ」

夏目にとって犬妖怪一族の薬はトラウマのようだ

田沼家

「おや夏目くんいらっしやい」

「あの……要くん大丈夫ですか？」

「ああ お見舞いありがとう でも移ると大変だからね

明日は出席出来ると思うよ」

翌日田沼は来たらしいがまだ治ってないからと離れたらしい

次の日も、そのまた次の日も理由を付けて離れている

数日後

月詠とニヤンコ先生は夏目達の学校へ着いた。

「「「あ」「」」」

「キヤーーーーーーッ猫ちゃーーーーーんっ！！！！／／／／／／／」

「ぎゃあああああやめろーーーーっ！！」

偶然会ったタキに思いつきり抱きしめられてしまうニヤンコ先生だった。

ようやく放してもらえた後ニヤンコ先生はぐったりしていた。

「先生大丈夫？」

「ご……ごめんなさい。つい」

「ごめんではないだろうがっ」

「でもどうしてここに？」

「ちょっとな……それで月詠の嗅覚で夏目たちを探して欲しいのだ」

「わかった」

少しして匂いを感じ取ったのか

「こつち」

歩き出した

大分夏目たちに近づいたときだった。田沼から妖の臭いがした

「っ！妖の臭いがする！」

「何つどこだ！？」

「あそこ」

月詠は臭いがした方向に指差す。ニヤンコ先生はガラス窓をすばあんと開けた

「待てい」

そこには女性の妖が夏目に襲いかかっている姿だった

「ニヤンコ先生 タキ 月詠」

「……チッ」

しゅっしゅっ

「あ」

妖は気絶している田沼の中に入り込んだ

むく と起き上がると妖は言った

「・・・まあ何しろしばらくこの体に宿らせてもらおう」

「何だと!?!」

「田沼君」

「田沼っ」

「安心しろ そう長くは意識を乗っ取れはしない しかし無事に」
いつを

かえしてほしければ協力しろ小僧

鏡の入ったその目があれば欠片集めも容易かろう

鏡さえもどれば私は去る」

「勝手なことを」

「先生・・・」

「これ以上厄介ごとに付きあわされてたまるか さあ 出ていくが
いい!」

カッ

「ぎ・・・や・・・」

田沼から体が抜けかける妖だが

「・・・まだだ まだだ・・・鏡を集めるまで・・・放れはせんぞ
・・・うっ」

そう言っただけでまた入り込んでしまった

あまりの執念深さに驚くニヤンコ先生。

夏目達は慌てて田沼を起こす。すると田沼の意識が戻った

「大丈夫か!?!」

「・・・ああ・・・事情は何か聞こえていたよ」

「鏡の欠片を集めれば出ていくんだな」

「ああそうだよ」

また妖の意識になった

ニヤンコ先生は一番安全だろうと言った

タキも手伝っていい？と聞いてくる

「夏目・・・月詠・・・」

「田沼」

「すまないが鏡集め、付きあってくれないか」

その言葉に二人は頷く

「もちろんだ」

「田沼のためだもの」

「ありがとう」

帰り道

「とりつかれているからなのか少しわかるんだ」

「ん？」

「・・・すごく大切な鏡らしい」

「え」

「大切なのはわかる気がするけど・・・」

「どうやら友人が病気らしくて その病気を祓う力をあの鏡は持っている・・・らしいんだ」

「友人のため・・・」

「だからあんなに集めたがって・・・」

「それと・・・警告もしている」

「警告？」

「その鏡はとても強い力を持っていて 欠片を狙っている妖もいる

ようだから
気をつけると言っている」

狙ってくる妖は長い金槌を持ってひたひたと夏目達の後ろを追って
いた

第40話 映すもの

夏目と月詠とニヤンコ先生は田沼の家に泊まる事になった。ちなみに住職である田沼のお父さんは出張中である。

「…………おじゃまします……………」

ニヤンコ先生は呑気に

「おい田沼の小僧みかんをむけ」

みかんを受け取ると田沼は鏡の外見について訊いて来た

「夏目 さつきひろった鏡の欠片見せてくれるか？どんな感じだ？」

夏目は小さな欠片をゴゾゴソと取り出した。

「ああ……銅鏡っぱいんだ」

「田沼見える？」

「ん……………」

田沼はじーっつと夏目の指先を見たが親指と人差し指の間に
ゆら…………と

何かがあるぐらいにしか見えない

「夏目たちはすごいな おれは何かがあるのがわかるくらいだ」

「そうか」

「おい小僧 それを気安く扱うな」

また妖と入れ替わってしまったようだ。

妖がニヤンコ先生のみかんを食べながら怒る

「お前こそ気やすく田沼を操るなー」

「蔓延の笑みの父上みたいである意味こわいつー!!」

しかし妖はつーんと向こうを向き、みかんをもぐもぐ食べる。

「ああць私のみかんをっ」

「はいはい私がむいてあげるから……………」

その時だった

しゅるん

鏡が目に入ったのだ

「わーーーーー！？鏡が目に入ったー！？」

妖が言うには鏡は元に戻りたがっている。そのため共鳴しているぞうだ。

就寝時刻

夏目たちは一緒の部屋で寝ることになった

そして田沼が掘っていた所で目が痛くなったから明日もう一度調べることになった

すると田沼はある事を訊いて来た

「・・・夏目はこんなこと時々あるのか？」

「え？」

「時々ではない しょっちゅうだ」

「うん しょっちゅうだね」

「え！？しょっちゅう！？」

「ニヤンコ先生 月詠」

慌てる夏目 田沼は何気に納得したように

「そうか」

一言だけだった

しばらくして皆は眠りについた。

ぱりんっ

「」「！」「」

何か割れる音が聞こえた。月詠は慌てて起き上がる

「・・・あれ？夏目、月詠・・・」

「！ 田沼・・・大丈夫か？」

「ああ・・・それより今の音奥の廊下の方からだ」

「案内してっ」

夏目たちは音がした方へ行く。廊下のガラス戸が小さく割られているのだ。

「「あ」「」

「ん？泥棒・・・？なわけないか この狭さじゃ人は通れないしな
犬か猫でもぶつかつたか・・・夏目？月詠？」

夏目と月詠はある方向へ行った

「足跡が・・・」

「こんなにたくさん」

「え？夏目、月詠 足跡って・・・しかもたくさんって？」

田沼には見えないがたくさんさんの小さな足跡がある方向へ続いているのだ

夏目と月詠は足跡の主を追いかける

少しして見つけた。金槌妖怪だ。

青ざめていると後から田沼が後から来た。

「・・・学校をうるついていた金槌妖怪がいる・・・」

「あれかあ・・・」

「え・・・」

でも一つ疑問があつた何故ここにいるのだから その時だった
かくんっ

頭だけこつちを向いた

「きゃーーーーーっ」

「「うわーーーーーっ」「」

「……ん？」

「……田沼にも見えてる？」

「妖が目を貸してくれて……」

「え……」

「ふたりとも、今其れどころじゃないっ」

金槌妖怪は長い金槌をひゅんつと振りかざし

ぶんっ

「……わあ」「」

さらにぶんぶんと振る

金槌妖怪は鏡を狙っているようだ。夏目に襲いかかるがしっ

田沼に取り憑いた妖は金槌を片手で掴んだ

「小物のくせに私の鏡を横取りする気が　去れ」

カッ

「ぎっ」

田沼の口から衝撃波が放たれる

金槌妖怪は逃げて行った

しゅうしゅう

「……た……田沼……？大丈夫か……？」

「おーい」

おそろおそろ声をかける夏目と月詠

ばったり

「わあ田沼!？」

「しっかりして田沼!！」

それから夏目は妖に怒った。これ以上無茶をさせるなら許さないと妖は見たがったのは田沼自身だと言った

妖はやはり話してくれないとわからなかった
わからないまま友人は居なくなってしまった
早く見つけたい
でも今の妖では田沼の体にとどまるのが精一杯なのだ
妖は謝った

翌日 月詠はニヤンコ先生とともに欠片集めを開始した

やはり上級妖怪と大妖怪の娘だろうかサクサクと見つかり
ほとんど元通りになった。

後は夏目が持っている鏡の欠片を合わせれば完成だ

がざっ

「おいガキンちょ共」

「夏目、田沼」

「わあタヌキ」

「・・・と思ったらポン太と月詠か」

すると夏目の目が痛んだ

何か持っているなと訊いたら

「見るがいい」

「じゃーん」

ほとんど直った鏡だった

「うわーーーーー！！！！？」

ニヤンコ先生は砂の中から砂を見つげるぐらいかんたんなことと言
った。

しかし月詠は思う・・・砂の中から小石ならわかるけど、砂の中
から砂って

どれも同じじゃん。

すると夏目の目から鏡の欠片が出て来てしゅるしゅると合わさった。

これで全部集まったのだ。

「さあこれを持って去るがいい」

「ああ ありがとう」

妖は嬉しそうに田沼から出てくる。そして鏡を受け取ろうとしたときだった

がざっ

「かがみ かがみ」

「まずい またあいつが・・・」

がつんっ

「あ・・・」

「「夏目!?!」」

「よこせ よこせ よこせかがみ・・・」

カッ

「ぎ ぎ まぶしい まぶしい」

「悪いがゆずってやれん 帰るがいい」

金槌妖怪は逃げて行く

田沼たちは慌てて夏目に声をかけた

二人の後ろには鏡をもった妖がいた

妖は友人探しに行く。文句を言っ病を被ってたくさん語るそうだ。こうして妖は去っていた

田沼はちよつと楽しかったそうだ。

「なあ月詠、おまえの父さんどんな感じなんだ？

笑顔が怖いつて言っていたけど・・・」

「・・・父上ったら基本的に笑わないんだよ。笑うとしても微笑程度で。」

それだけでも父上の家来は初めて見た時百年寿命縮んだって言ったの綺麗な顔なのに・・・」

「うゝん確かにあの綺麗な顔でにっこりはちよつと・・・」

月詠の父の顔を見たことのある夏目は妙に納得していた。

「全然似てないぞっお前母親似だろっ」

ニヤンコ先生の言葉に

バキッ

「髪と瞳と拳骨は父上ゆずりだよー」

「拳骨・・・」

ニヤンコ先生の頭には痛々しいたんこぶができたとき

第41話 小さきもの

夏の暑い日だった

夏目とニャンコ先生は何かを探していた。ちなみにニャンコ先生はなぜか左半分

札を貼られていた。

「夏目、ニャンコ先生何探しているの？落とし物？」

「あつ月詠この絵の妖見なかったか？」

それは絆創膏を貼ったふわふわした毛玉のような可愛い妖だった。

「可愛いね。この妖がどうかしたの？」

「実はアマナって妖が落とした指輪がこの毛玉についたみたいなんだ。

アマナは怒っていて三日以内に見つけないと家や裏山一帯を燃やされてしまう」

「しかも奴めこの私に札を貼りおって」

ニャンコ先生はイライラしていた

「そうだったの。ねえこの絆創膏は？」

「ああカラスに襲われて怪我したんだ。こいつ」

それを訊いた月詠は

「ねえその妖に塗った薬とかある？それとアマナが触れた物とか・・・」

「家にあるけど・・・」

「何に使う」

「いいからいいから」

そう促されて夏目たちは家に向かう

夏目の部屋

「はい、アマナが座った座布団と毛玉に塗った薬」

「ありがとう。これさえあれば見つけられるよ。」

毛玉には薬のにおいがついているし

たとえ指輪を落としてもアマナの匂いを覚えれば大丈夫だよ」

「そうかつ！犬特有の嗅覚！」

「じゃさつそく嗅げ」

「………やっぱり薬のにおいはきついね……薬草臭い。」

アマナは……よしっわかった。」

「「おおっ」「

月詠の言葉に夏目達は驚く

「それじゃ行ってくるね」

「あつ指輪は赤い石だつて言っていたから」

「わかった」

そして月詠は薬とアマナのにおいが同時にする方向へ進む

暫く進むとある木についた。それは妖の間では毒消しで有名な赤笹の実だった。

しかし疑問に思う。なぜ毒消しで有名である赤笹の実に行ったのか
月詠はさらににおいのする方へ行った。

毛玉はなんと夏目の家の方向に進んでいるのだ。

さすがに驚く月詠。すると夏目の部屋の窓に中級たちがいた

でもその時だった

「キイキイ」

「ぎゃっ」「

「あつ」

一匹の毛玉が外にでた。匂いも一致する

「うわーーーーーっケマリーーーーーーっ!」

夏目は急いで外に出て毛玉ことケマ리를追いかけた

「夏目っ」

「月詠っさつき例の妖が・・・」

「うん、さつき見えた。とにかく急ごう アマナのおいが付いているから」

まだ指輪あるよ」

「わかった」

夏目たちは追いかける。でも暗くてよくわからない

ニヤンコ先生は札がなかったらひとつ飛びで追えたのにとイライラしている

しかも中級たちの情報ではカル・・・つまりケマリたちを恐れた低級たちが

八ツ原に集まっていそうだ。妖を食うという噂だからだ。

とにかくカルが集まる七つ森の林へ急ぐ

少しずつ少しずつカルが増えてくる。進行方向にケマリがいるはずだ

夏目はカルたちの中にいるケマリにむかって叫ぶ

「ケマリいるか!? ケマリ! 仲間に八ツ原の方へは行くなと伝えるんだ

妖達が集まっている お前達にはこの辺はもう危険なんだ」

それはすごい数だった。

ニヤンコ先生は一旦ひくぞと言う

夏目はしかたなくひこうとしたその時だった

「キーーーーーイ」

コッソ

「！」

夏目の頭に何かが落ちたそれは探し求めた赤い石の指輪だった

夏目は慌ててケマリを呼ぶと

カル達は八ツ原と逆方向へ飛んで行く 声が届いたのだ

「面妖な妖でしたが去りぎわはなかなか風情ありますな」

「うん 綺麗ね」

「ははそうだな ありがとう月詠、中級おかげで指輪がみつかったよ
これをアマナに返せば家を守る」

でもその時だった

「夏目、後ろっ」

そこには指輪の持ち主アマナがいたのだ

夏目は丁度よかったと渡そうとしたが

「やはり やはり やはり

やはり やはりお前が持っている」

「違うぞ約束通り見つけておいたんだ」

しかしアマナは聞く耳持たない

さすがのニヤンコ先生と月詠も怒った

「……おのれ礼知らずめ

こいつの酔狂につきあってみれば調子に乗りおって

「殺されても文句は言えないわよ」

「先……」

「キーーーーーイ」

声が聞こえた

上を向くと何かが来る

「……あれは」

「……龍……？へび……？」

それはアマナに体当たりを喰らわせる

「夏目」

「夏目様……」

龍らしきものはアマナから夏目を救い出す

「おのれかえせ それを私はひねりつぶしてやるのだ」

「宝を無くして我を忘れたか」

はっ

「指輪はかえされ約束は果たされた 帰って頭を冷やすがいい」

カッ

夏目はというと

ぼすっ

「わっ」

龍らしきものに安全なところに下ろされた

そして飛び立つ

「夏目」

「夏目様大丈夫ですか!？」

「怪我はっどうなの!？」

ニヤンコ先生たちが慌てて夏目のもとへ走りよって来た

「先生 中級 月詠」

「今の龍はいつたい……」

中級の言葉に夏目は

「大龍ではないよ カルの群れだ」

そう……あれはカル達が集まってできた姿なのだ

「……………すごい」

「……………ほお見事な……………」

「先生」

「ん？」

「見えるかな ほらあれだよ あれがケマリだ」

夏目はそう言いながら指差す

「ん……………」

一匹だけ赤笹の実の赤い汁がついているからわかったのだ
こうしてカル達はこっそり静かに旅立った

第42話 東方の森

ある日のこと、月詠は阿吽を連れて散歩をしていた。
するとその時だった。

「月詠」

「あ、ニャンコ先生」

ニャンコ先生がこつちにとてとてと歩いてくる

「丁度よかった。三篠の住む沼まで連れてってくれ」

「うんいいよ」

月詠はニャンコ先生と共に阿吽に乗り、三篠の住む沼まで飛んだ。

少しして三篠の住む沼に到着する

「おーい三篠、居るかー？」

ニャンコ先生は沼に向かって叫ぶと

ポコポコとなりだし、ザバアと三篠が現れた

「ほう斑と月詠殿か、どんな用事で来た？」

「実は昨日夏目が猿面の一団に襲われたのだ」

「ええっ!？」

「ふむ猿面の一団？」

「ああ この辺りでは見ない連中だが 友人帳の噂をききつけやっ
て来たらしい

・・・何か知らんか？」

ニャンコ先生の問いに三篠は呑気に

「ほほう 友人帳の名も妖の内に広がりはじめたか」

「三篠呑気に言わないで」

そしてニャンコ先生は猿面の一団について感じたことを言った

「あの感じ そこそこ力のある連中のようにだったが」

「東方の山にそのような一団が治める森があると聞いた事がある」

「東方の山か・・・」

「ああ思い出したぞ あの手は人と妖の世の境があいまいな森があつて

・・・あそこには近づかぬほうがいい」

「なぜだ」

「なにかあるの？」

その問いに三篠は答える

「・・・嫌なものがあるからさ」

「嫌なもの？」

「忌々しい被い屋 的場家の別邸があり

ずっと以前はそこを拠点として妖を狩っていたのさ

しかし被い屋自体廃れて行き使われなくなってきたのだが

今回の当主は精力的だ」

その言葉に二人は青ざめる 猿面の一団に捕まり、東方の森に連れて行かれたら

的場に出会う確率大だ

「ニヤンコ先生っ！！」

「うむっ 夏目の元へ行くぞ！！」

阿咩に乗って学校に行ったがすでに捕まった後だった。

すると丁度とってきた鮎を自慢しにきた河童に事情を話し、阿咩を

預けた

阿咩は行きたそうだった

「ごめん阿咩。そこは被い屋がいる場所なの。

阿咩は体が大きくて見つかりやすいし、

あなたがひどい目にあつたら私は嫌よ。」

その説得によろやく阿咩は頷いてくれた

「よし、行くぞ月詠」

「うんっ」

ニヤンコ先生と月詠は東方の森へ行った。

とても深い森だった。でも的場家が貼ったのだから、札がいくつもあつた。

するとなんとか逃げ出せたのだから、夏目が走つて来た。

ガザッ

「うわ……」

ぐいつ どさっ

「しっ静かに」

「夏目大丈夫？」

「ニヤンコ先生、月詠」

「まったく、ちょっと目をはなせばこんな所に連れこまれおつて」

「三篠の話が気になってあなたの様子を見に行ったら……」

「ごめん」

ニヤンコ先生は呆れながら、月詠は心配しながら言った。

「でも、この森何か変なんだ。札とかがあちこちに」

「ああ、どうやらあちこちに罠があるようだ」

「……罠……？おれを逃げられなくするためか？」

「いや、これは……とにかくこの森から離れるぞ、わからないか？」

この森に感じる気配は……」

すると猿面が近づいて来た

「いたか？」

「いや、ごさかしい隠れたか」

「チツ探せ、ん？おい、あれは何だ」

一匹が上を見て何かに気づく

「何かこっちへ来る……、まずい、みんな逃げろ」

あいつが、あいつが来る」

「!？」

「あいつが……」

ゴオ

紙面をつけた黒い影が夏目達の上を通り過ぎた

そいつは猿面一匹に狙いを定め
びゅっ

「ぎゃっ」

捕まえた

仲間たちは仕方なく一時撤退

「つくそ一旦退け」

「逃げるぞ」

一体何が起きたのか固唾を飲んで見守ると

影が猿面ごとしゆるんと包まり目玉模様の壺になったのだ

それを受け止めたのは一人の男

和服で長い黒髪を後ろで結っている

「さて こいつはちっとはつかえるかなあ」

姿も声も覚えがある。

すると男は振り返る。男の右目には眼帯

「的場 どうでした」

その男は被い屋の大家 的場家主・的場静司だった
部下の問いに的場は答える

「ああ 一匹つかまえた」

「つかえそうですか」

「しっ

あのしげみ何か」

ガサッ

でも何もいなかった

「おや気のせいかな」

ガザ ガザ ガザ

夏目たちは走っていた。的場に見つかり友人帳の存在を知られたら大変だと

あの人には会いたくないと逃げていた

「ちつどうやらこの辺りに罾をはったのは奴のようだな」

「！」

「気をつけて ひよつとしたら人にも効く罾かもしれないし・・・」

「くそ 本来の姿にもどればひとつ飛びで逃げれるが 奴に気づかれる」

「ああ とにかくどこかに隠れよう」

「・・・ちつ三篠の話は本当らしいな」

「え」

「この辺りには」ぐるん」「！」

ガザッ

「！！」

夏目と月詠は後ろを向いた。そばにいたニャンコ先生がいなくなっただのだ

「先生!？」

「ニャンコ先生!？」

二人は急いでニャンコ先生を捜す

ガザガザ

「どこだ先生・・・」

すると屋敷のような廃屋が見えた

しかしその廃屋の表札には的場の文字があった

驚く夏目と月詠。でも二人は気づいていなかった

後ろから手を伸ばす影がいることを

二人は気づいた。しかももう遅い

「うわあ」

「きゃあ」

二人も襲われてしまった

第43話 東方の森

夏目と月詠は何かに気づく

ギリ・・・と手首が痛い

「！！ あ」

的場の式が二人の手首を縛り、壁に固定しようとしていたのだ

「やめろ」

がんっ

夏目は式を蹴飛ばす。式は倒れ、夏目と月詠は壁に固定されるのは免れた。

二人は周り見回す。ここは座敷牢だった。的場に捕まってしまったのだ。

「・・・あ」

しかも友人帳が入った夏目のバッグと月詠の天響牙がない。とられてしまったのだ。とにかく夏目と月詠は先ほど蹴飛ばした式から逃げ出し

ばたんつと閉じ込めた

二人はニヤンコ先生を捜す。早く見つけないと・・・しかしだった

夏目たちは階段の下で座り込む

「広！！」

「私や父上達が住む城のほうが広いよ・・・」

夏目たちはニヤンコ先生の無事と友人帳と天響牙を心配するその時だった。

上から数人誰かが降りてくる

ギシ

「表を見張らせていた奴が何か捕まえたようです」
ギシ

「ほっ」

「それがどうも少年と少女のようで・・・」

ギシ

「普通の人間がこの屋敷に近づくとは難しいはずなのですが」

「ほっ」

ギシ

ギシ

「おもしろいですねえ」

ギシ

「どこです」

的場だった。どうやら捕まった何かを見に来たようだ

そしてまだ夏目と月詠だと気づいていない

「西側の牢に放り込ませてあります 持ち物は桐の間に入れておきました」

「西牢か では その少年と少女とやらの話を聞きに行きましょうか」

先ほどの会話のおかげで持ち物は桐の間にあることがわかった。

しかし的場が壁にかけられている鏡に写っている夏目達の姿を見て

ギシ

「おや？階段の下に何かいますね」

ギシ

「「「(はっ)」」」

ギシ

「何者です？さあ出てきなさい」

その瞬間、夏目達は顔を見られないように

その場にたたんで置いてあった華やかな着物を被って

的場にどんつと体当たりする。

そして一気に走って逃げた

「！ 何者！？ 侵入者か」

部下の一人はピュウと口笛を吹いて侵入を知らせた

「あれを追え！」

バタバタバタバタ

その姿を的場はじっと見ていた。

何とか夏目達はまいた。広い屋敷ゆえか・・・しかし見張りの妖もいる

二人は近くの部屋に隠れた。そこは人形やら壺やら

いろんな道具が置いてあった。妖を祓うための道具置き場だったのだ
カタカタ

「う う・・・」

ゴミ箱から声が聞こえた。何気なく見ると

「う・・・」

紙くずの中からニャンコ先生の下半身が見えた。

「わーーーーーーっニャンコ先生っぽいものが

ゴミ箱に捨てられているーーーーーーっ!?!」

「先生すっかりしてーーーーーーっ!?!」

夏目と月詠は慌ててずぼおっとニャンコ先生の足を引っ張り、救出した。

「ふうひどい目にあった 捕まり袋に放り込まれたものの

頭の悪そうな妖だったから招き猫のふりを通じたのだ

そしたらあの小物め この私をゴミ箱に放り込んだのだ」

「ぶっ」

「笑いごとか阿呆ーーーー!!!」

ぱぱあんっ

「うぐっ」

ゴミ箱に入れられたいきさつ聞き、思わず笑ってしまう二人。

そんな二人にニャンコ先生は怒りの猫パンチを喰らわせた
そして友人帳と武器である天響牙を没収されるとは怒られた。
夏目と月詠の頬にはニャンコ先生の肉球の痕がある。
とりあえず今はバッグの中身は見られていないらしい
急いで友人帳と天響牙を取り返すために走った。

途中で桐の間に荷物があることを話す。

夏目はあの人はここに住んでいるのかと呟くとニャンコ先生は
三篠から聞いたことを話した。

その話を聞いて夏目は自分の住処を守るために友人帳を・・・と思
った

・・・カタ カタ

何か音がする

それは猿面が封じられた壺だった

「む？この壺・・・さっきの猿面の妖が封じられた・・・」

「うう・・・出られぬ うう~~~~おのれ・・・」

壺が喋ったのだ

「わぁ壺がしゃべった!?!」

「しゃべれるの!?!」

「む？その声は・・・おい夏目の小僧とりひきだ」

「・・・とりひき?」

なんでも猿面は一度屋敷に忍び込んだ事があり、多少は案内ができ
るという。

出口を教えるから自分も連れていけということだ。

「お前達はおれを襲った相手だ 信用できないぞ」

「まったく うたがい深い下等生物め」

「人は襲われたらうたがってしまうものなのよ」

するとニヤンコ先生がちよいちよいと壺にジャレる

猿面は当然のごとく慌てる。ニヤンコ先生は手はじめに桐の間の場所を訊いた

「どうやらの場の部屋だそうだ。」

ニヤンコ先生が確認し正しかったら脱出する時、

猿面も連れて行くことになった。

夏目と月詠は猿面と隠れて待つ事にした

「……くしよう　ちくしよう　友人帳があれば　きつときつと

お頭様が友人帳の力を持てば……お頭様ならきつと

きつと森をもとのように……」

そんな猿面のくやしそうな言葉に夏目と月詠は

「友人帳はそんな魔法のような道具ではないよ」

「森をどうにかしたいのはわかるわ。」

でも友人帳を使って多くの妖を操るなんて」

「……そんなことしてしまったら　そのお頭様ってのも的場さんと

同じようなものになってしまっぞ」

「そんなの嫌でしょ？」

「……」

的場と同じようになってしまっ。……たしかに嫌だ

「……あ」

「ん？」

「しまっ……」

夏目と月詠は的場に手首を掴まれてしまった。

「お久しぶりですね」

今一番会ってはいけない人が目の前に居る。

「こっそりあがりこんでくるなんて　まるで猫か妖のようですね

ああ　女の子は犬でしたか」

そう言いながら月詠を見る。

夏目と月詠は慌てて的場の手を振りほどいた

でも的場は部下を伴い、ニコニコ笑っていた。

「・・・そっちの妖が無理に連れこんだんですよ」

「無礼はそっちじゃない」

「おや それは失礼しましたね けれど丁度よかった

そろそろまたお話したいなと思っていたんですよ

猫といえば今日は一緒ではないのですか？」

とにかく夏目と月詠は落ち着くように自分に言い聞かせた

するとの場はなぜか客間に通し、お茶を出した。

当然夏目と月詠はむすつとし警戒を解かない。

「まあ お茶でもどうぞ

大丈夫ですよ 毒なんて入っていません」

「（嘘くさ!!）」

夏目と月詠は思いつきり心の中でつつこむ

そしてニヤンコ先生は大丈夫だろうかと心配していたら

「随分苦労していたようですね 夏目貴志君 月詠ちゃん」

なんと自分たちの名前を呼んだのだ

「・・・なんでおれたちの名前・・・」

彼は七瀬からききました。少し調べればわかるといった。

するとの場は夏目の心の傷を広げるようなことをどんどん話します。

そして

「今預かってくれている藤原ご夫妻は君を理解してくれていますか？」

言うてはいけないことを的場は言ってしまったのだ

夏目はガタンと立ち上がり月詠の手を引っ張る

「あなたには関係ないことだ」

「帰るわっ」

しかしそばに控えていた式が邪魔をする

「待て小僧共 頭首様はまだお話の途中だぞ 大人しくしてろ」
「「！」「」

ふっ

「ぎゃっ!?!」

そこには本来の姿に戻り、式を倒すニヤンコ先生の姿があった
「！ 先生」

「調子にのるなと言ったはずだぞ被い屋の小僧 道をあける 我らは帰る」

「「先生……」」

ほ……と胸をなで下ろし、ニヤンコ先生を見上げる夏目と月詠
ふさあとした尻尾にバッグが引つ掛けられていた。

ちなみに天響牙は長いためバッグの蓋の両側の隙間から柄と鞘がはみ出していた

「（おれのバッグがしっぽに）」

「（天響牙がはみ出ている）」

とりあえず月詠は天響牙を抜き取り、元の腰に差した

「おや やはり猫も一緒でしたか どこに行っていたんです？」
的場の後ろから二体の影のような式が現れる

「いくぞ 夏目、月詠」

「ああ」

「うん」

しかし行かせるかとはかり的場は札を投げた
びたんっ

「ぎゃっ」

ニヤンコ先生には効果てきめん、どろんと招き猫になってしまっ

「わぁ……」

「きゃぁ……」

どぞ どぞ どぞ

「色々調べてみたのですが、ただ美しかった強かったと噂ばかり
なかなか情報が少なくて、ぜひとも聞かせて頂きたいのです
噂の夏目レイコとは、どういう人だったのかを」

第44話 東方の森

的場は夏目に夏目レイコについて訊いた

「きかせて欲しいのです 夏目レイコとはどういう人だったのかを」
「・・・なぜ」

「被い屋ですからね 力の強い者には興味があるのです」

「興味・・・？」

「そくだ君のお母様は？お母様もさぞ力の強い方だったのでしょうか」
ね」

的場の言葉に夏目は否定する

「違います母は 母は普通の物静かな優しい人だと」

「そうですね 強力だと噂の夏目レイコの娘にさえ遺伝するとは限られない

見える人間と強き妖は我々にとって貴重です

ましてや強力であればある程 どうです二人とも的場一門に入り

ませんか」

的場の突然の誘いに夏目と月詠は目を見開く

「何を言って・・・」

「一体どういう・・・」

「遠いむかし村人達を遅いくる妖へと我が先祖が弓をひいたのが家業の始まり

今は金を出す奴と仲間のためにやっています

君も無理解な人たちといるのは面倒でしょう」

「・・・お断りします。」

夏目ははつきり答えた

「だいたいレイコさんの事もあなたに話す必要はないでしょう」

「知っていてもあなたに話せないと思うわ」

「おや・・・それは困った・・・では話したしなるようにしまし
ようか」

そうですねえ その壺 そのに封じた妖は君達の友達だったので
か？」

「「!」」

二人は壺を見て・・・猿面とともに否定した

「違います別に・・・」

「少し話をしただけよ」

「そうだぞ失礼な こんな下等生物と誰が!!」

するとの場は両手を合わせた

「話したくなつたら、言つてください」

ぶつぶつと小さな声で何か呪文を唱え始める

「・・・う・・・うう・・・い、痛い・・・」

中の猿面が痛がつたのだ。つまり呪文に反応していることだ

「うう・・・」

「や やめてください」

「この妖は関係ないって言っているでしょう」

夏目と月詠は的場に掴み掛かる。しかし的場は無情にも言った

「関係ないなら気にしなくていいですよ 捕まえてはみたものの

使えるかわかりませんし 人間にも随分な態度だ 代わりはいくら

でもいる

交渉の材料にもならないなら もう必要も」

「やめてください知らないんです」

夏目は叫ぶ

「祖母のことはおれも・・・話したくても話せることがないんです

祖母を知る人は・・・話をきいてもあまり・・・好意的ではなくて・

・・・」

「・・・とにかくこの妖に酷いことしないでっ夏目は本当に知ら

ないのよ」

夏目と月詠は猿面を守るように叫んだ

そんな夏目に的場は

「成程、人はおばあ様や君に冷たかったのですね
だから妖達にそそのかされ情を移すようになった」

でも違う。つらくて大変な目にあつた時もあったけど
本当に心優しい人たちに出会えた。人間でも妖でもだ。だから言っ
てやった

「いいえ きつい時もあったけれど 心優しい人たちにもたくさん
出会えました

今のおれとつては妖もそうなんです」

「妖だつて人を愛する者がいる 大妖である父上だつて人である母
上を愛し、

その間に半妖の私が生まれたのよ。他にもわずかだけどいるわ」

夏目と月詠の言葉に猿面と的場は思わず無言になる

しかしすぐに的場は猿面が入つた壺をばつと奪い取つた

「「あ」」

「危険ですね 妖の子である月詠ちゃんならともかく

君はすっかり妖に心を奪われている 目を覚まさない 夏目貴志
彼らは人を惑わし裏切りますよ。」

そして的場は自らの式に壺を差し出し命令する

「これを破棄しろ」

「破棄つて！どうするんです 返してください」

「君は一度妖で痛い目をみないとわからないでしょう」

「返せ・・・」

「返しなさい・・・」

「主様に無礼だと言っているだろう小僧ども」

ガッ

夏目達はそばに控えていた式に殴られる

だんっ

どたんっ

「うっ」

「ぐっ」

二人は倒れ月詠は当たりどころが悪かったのか気絶した

夏目は未だ気絶しているニャンコ先生と先ほど倒れた月詠、

友人帳が入ったバッグを見る　するとまた式が襲いかかった。

夏目はニャンコ先生達とバッグを守るようにぎゅう・・・と抱きしめる

「やれやれ」

カッ

「ぎゃっ」

そこにはようやく目を覚ましてくれたニャンコ先生

「そろそろ　本気で奴を黙らせてやってもいいんだぞ夏目

こっとう半端に力のある奴に加減するのが一番面倒なのだ」

「先生」

「う・・・いたたた」

月詠も目を覚ましてくれた様だ

「こんな所にもう用はない」

的場はびゅっと札を投げた

「何度もくらうか」

カッ

いつも通り光ったため　どんと札が破裂した

ぱらぱらと細かく破れた札が落ちる

「ちっ

また逃げられましたね」

夏目と月詠は本来のニャンコ先生に乗って出来る限り遠くに逃げた

「ありがとう先生」

「助かったよ」

「まったく用心棒をかばう奴があるか」

「用心棒なのにのびているのが悪いんだろ」

「のびてたよね」

「何!？」

その言葉にニヤンコ先生はムカツときた

「それに先生は月詠と友人帳のついでで」

「何だと」

「友人帳には子分共の名が書いてあるのだろう 人にとって妖は霞
だろう

それを守って何になる」

猿面の問いに夏目は答えた

「仕方ないだろう 体が勝手に動いてしまっただ 本当に大事なも
のなんだ」

「友人帳はね 夏目のお婆さまの形見なの」

「あっその壺お前いつのまに どさくさにまぎれて拾ってきたな」

「あはは」

怒るニヤンコ先生に夏目と月詠は笑う

「そうだな じゃああの辺りに捨てていこうか」

「よしきた」

「ぎゃーーーーー鬼ーーーーー人でなしーーーーー」

「じめんねー」

夏目達は猿面が入った壺を折れた木の幹の上に置いた

「ここなら仲間が見つけるだろう 簡易な封印だ

仲間に壺くらい割ってもらっただな」

「う……」

そして夏目達はその場を去ろうとした時だった

「……夏目、月詠 お前達の言うとおりかもしれん」

「ん？」

「え？」

「・・・確かに・・・お頭様は多くの妖を操るなど・・・友人帳など持ち帰れば悲しい顔をなさるかもしれない」

月詠は思う。その言葉を聞くとお頭様は本当に優しい皆に慕われる妖なんだと

「いたぞ」

「！！！！」

現れたのは猿面達だった

「いたぞ夏目だ 友人帳をよこせ」

「・・・ああ あの壺は」

「おのれやはり忌々しき的場の仲間か」

「！」

どうやら猿面達はそばにある壺を見て勘違いしているようだ
「違う」

「そうだぞ不本意ながら こいつが私を奴の下から・・・」

「おのれ」

「おのれ人間め」

ぐいっ

「あっ」

友人帳が入ったバッグを引つ張られる

「ぐ・・・やめる それを乱暴にあつかうな」

「夏目から放してっ」

「我らに命令するか」

「なまいきな黙らせる」

「やめる やめる夏目と月詠は私を助けてくれたのだ！」

しかし仲間達は壺の猿面の声を聞いてくれなかった

「おのれ 人間め消えろ」

「災厄のもとめ いったいどれほど災いをもたらせば気が済むのだ」

「お前らなど消えろ 消えてしまえ……」

ゴッ

その時ニヤンコ先生が本来の姿になって夏目と月詠を助けた

ニヤンコ先生は猿面達に言った

「ああ消えてやるさ こいつらも友人帳もあるべきところへ帰るのだから 仮にも私はこれの用心棒 次にこれに手を出すならば

お前らの敵は被い人ではなくこの私 いつでもかかってくるがいい。

「

しゃんしゃんしゃん

「そこまで」

聞き覚えある鈴と知らない声

現れたのは三篠と阿吽、そして三篠に乗ったお面を着けた妖だった。

「三篠……」

「阿吽っ」

「……あ お頭様……」

お頭様はお面を外す。お面の下は穏やかな顔だった

お頭様は呆れながら猿面達に言う。

「やれやれ 何をしているお前達 勝手なことを……」

「お お頭様……」

そしてお頭様は夏目達に近づき詫びをいれた。

「どうやら うちの者が助けてもらったようだ

こやつらの無礼をお許し頂きたい夏目殿、月詠殿

私の力不足がこやつらを不安にさせたのでしよう」

「ち、ちがいます お頭様」

「我々はただ、何とかお頭様のお力になりたくて・・・」

「夏目様ーーーー月詠様ーーーー」

「！！」

現れたのは大きい鎌を持ちブチ切れ寸前のヒノエ、
喧嘩上等の文字を背負った中級達だった

「夏目様、月詠様ご無事ですか!？」

「おのれ東方の猿どもめ夏目様と月詠様を

この八ツ原の恩人と知つての狼藉か!？」

「ヒ、ヒノエ 中級・・・」

「あなた達も来たんだ・・・」

驚く夏目と月詠。すると中級の一人、ツルツルはゴキユゴキユと酒
を飲み始める

「しばしお待ちを夏目様、月詠様 今 命の水を飲みまして
鬼神となつてお助けしますぞ」

「もやし相手に集団とは!!」

「いざいざ!尋常に勝負!!」

「わーーーーよせ ありがたいが丸くおさまりかけているんだ」
「皆抑えて抑えて」

「クスクス」

「！！」

お頭様はその様子を微笑ましそうに笑った。

「夏目殿と月詠殿は友人帳を使わずとも動いてくれる妖がいるので
すね」

「はい 友人なんです」

「とても心から信頼できる方達です」

その様子を的場達は遠くから見ている

「何を話しているかはきこえませんがありやすごいですね」

「騒ぐなお前らさつさともどるぞ」

「ごめんね阿吽心配かけて・・・大丈夫だから」

「ありがとう三篠がお頭様に知らせてくれたのか」

「ふふ我が主はなかなか我が名を呼ばぬゆえ

友人帳などいい加減くれてやれば良いのに」

夏目は答える

「ああ おれの代わりに名を返してくれる相手にだったらね」

その言葉にニヤンコ先生は怒る

「阿呆 私がもらう約束だぞ」

「あ そうだった」

「ほら帰るぞ」

猿面達は空を見上げ、何もしなかったがお頭様が手を振る
的場たちも見上げた。

夏目を乗せたニヤンコ先生を先頭に、月詠に乗せた阿吽、

三篠、ヒノエに中級達が空を飛ぶ まるで小さな百鬼夜行だ

的場たちも式を集めてかかってても手が出せないかもしれないということ
ことで

今回は退く事になった

後日、詫びに来た猿面の話では山狩りは収まったらしい。
しかも大パレードでの場はびびったという噂まで流れてしまった。
ただ帰っただけなのに・・・

「月詠様、殺生丸様からお届け物です」

家来から父・殺生丸の荷物が届けられた

「何これ？」

家来はにこつと笑いながら言った

「開ければわかりますよ」

とりあえず月詠は荷物を開く

「わぁ・・・きれい」

それは白い花模様が施された紅い浴衣だった

「殺生丸様が祭りに着るとの事です」

「そうかあうれしい・・・ありがとうって父上に伝えてね

今日祭りだからさっそく着るわ」

「承知しました」

家来が帰った後月詠は早速来てみた。ちょっと大きい気もするけど
すごく着心地がいい。

「阿吽っどう？似合う？」

阿吽は頷いてくれた

「ふふっありがとうっ！早速祭りに行ってみるねっ

お土産いっぱい買ってくるから！」

その言葉に阿吽はうれしそうに頷く

月詠は妖力を極力抑え人間になり、祭りに行った

ドン

ドン　ドン　ドン

ドン

「わーっ始まっちゃったーっ」

月詠は大急ぎで走った

そしてようやく会場につくと夏目達がいた

「夏目ーニャンコ先生ー田沼ー」

「あっ月詠!」

「今日は浴衣姿なんだな？」

「父上が送ってくれたんだー　似合う？」

「ああ　よく似合うよ」

「よく着こなしているよな」

「似合います月詠さん!それと自分のこと覚えていますか!？」

「おれも覚えているとうれしいな」

西村と北本の言葉に月詠は

「……えーと西本くんと北村くん」

その言葉にずっこける4人とニャンコ先生だった

第45話 偽りの友人

肌寒くなったある日のことだった

「月詠ちよつとお願いがあるんだ いいか？」

「?どんな？」

「……昔の知り合いに好きな女の子が居るんだけど……その子が妖らしいんだ……

夢でも昔の知り合いが食べられる夢を見てしまったし、手伝わてくれないか？」

「……でも昔つてことは信じてくれなかった頃でしょ?いいの?」

心配そうに訊く月詠に夏目は答える

「……けどあいつは滋さんの誕生日ケーキを探すのに手伝わてくれたから……」

「……わかった手伝わね」

「有り難う!月詠!」

夏目達は少し電車に乗り、例の女の子が居た公園に行った。

「で なぜまた この公園へ？」

ニヤンコ先生の問いに夏目はニヤンコ先生が変な事言うから気になったんだよと答える しばらくして例の公園に到着したそこは自然いっぱい公園だった

「自然が沢山だね」

「随分森深い公園だな」

「さすがにいないか その辺りを少し見て帰ろう」

そう言つて夏目と分かれてニヤンコ先生と見回る事にしたとてとて

くんくん

「確かに妖くさい公園だな」

ザアアア

「行っちゃった……」

「やっぱり妖か……」

木から降りた後、月詠とニヤンコ先生は彼女について説明した

「匂いからして この辺りの花の木の妖だね」

「人に化けてたぶらかして食うつもりだろう」

その言葉に夏目は

「じゃあ柴田は……たぶらかされ中か……」

「……うーん」

げんなりする。

ニヤンコ先生曰くがつついてくる妖はボロが出やすく、柴田は彼女・村崎から人とは違う何かを感じたのかもしれないそうだ

「気は済んだか？帰るぞ」

「……」

「ほらキビキビ歩け」

「にしても木の妖もいるんだなー」

夏目の何気ない言葉に月詠は

「そりゃいるよ。天響牙の鞘だって樹齡二千年以上の朴の木、
朴仙翁様の枝から削りだされた物だよ。だからそう簡単に壊れない
し、

結界も張れるんだ」

「樹齡二千年……」

「ジジイではないか」

「あはははは……」

今日も夏目達に付いて行くことになった。でも月詠はどうしてか天響牙を阿吽に預けた。月詠もなぜかよくわからなかった

校門で夏目達とともに柴田を待っていたが……裏口から逃げられた

今度は村崎がいる公園へ行く事になった

夏目は塔子さんや西村達にははなせないことがあっても恥じることはしたくないそうだ

こうして広い公園の中をくまなく探す

その様子を村崎は木の上で見っていた

がさ

「夏目どう？」

「おい夏目そつちにいたか？」

しげみから月詠とニヤンコ先生が出てくると

「むきーーーーー」

ぼかぼかぼか

夏目と村崎が喧嘩していた

「うわぁ……」

「ええい邪魔をするな」

がぶ

「いつ……」

夏目の腕が噛まれる

「夏目っ」

それを見たニヤンコ先生はどろんと元の姿になる

食べば済む事だと言ったのだ

「待ってくれ先生」

夏目は慌てて村崎を庇う

「夏目」

「……ごめん先生もう少し待ってくれ どうすればいいのかもう
少し……」

柴田にとってはとても大切なヒトなんだ」

その言葉に村崎は目を見開く

ガッ

「あっ」

びゅっ

「……痛……」

どろん

「夏目！」

「夏目しっかりして」

そして夏目はニヤンコ先生に怒られ、村崎を追いかけた

すると空を飛ぶ村崎を見つけたのだがぼすんと森に落ちた

ニヤンコ先生曰く先が長くないから放っておき、長くないからこそ

魚や人を食えば力が戻ると思っている様だ

夏目たちは腐って倒れた山藤の根元で気絶している村崎を見つける。

とりあえず夏目と月詠はコートと毛皮を彼女にかけてやった。

しばらくして村崎が目を覚ました

「……山藤か でかいな 腐って倒れたか」

「これが妖の正体のようなものだ」

「朴仙翁様だつて木の体に老人の顔よ」

「生氣ももうほぼ残っていない樹だな」

すると村崎は夏目と月詠にコートと毛皮をばさっと投げた。

「ああ 倒れてあとは朽ちるばかりさ……う……」

「おい……」

近づこうとしたら

「触るな」

拒絶する

「下等な人の子など 触れたら食ってやる」

「私はね、父は大妖、母はあなた曰く下等な人間の間生まれた半妖だけど

どうなるの？触れていいの？」

「食ったら元気になれるのか？」

「さあな」

残り少ない力を使って人に化けて食らってやるうと少しでも長らえるかもしれんと彼女は思ったらしいでも力はもう弱くひどく疲れて座っていた時、柴田に話しかけられたそうだ。

疲れていたから三日後また来いと言ったら彼は来た。

彼はいろんな表情を変えておしゃべりだった。

また会おうと思わず約束してしまった。

「・・・いつまでも何度会っても楽しくてちっとも食べるひまがないの」

いつのまにか・・・村崎も柴田のことを想ってしまった

「・・・そうか」

すると村崎は昨日の夜、柴田が来た事を話した

「けれどあの時 もう柴田は お前に私の正体をきいていたんだな・

・・・」

ズキッ

「う・・・」

「！村崎」

「・・・魚が必要ならとってきてくるよ」

村崎の気配が弱って消えて行きそうだった

もう時が近い。彼女は柴田を食うのは諦めたが会うのはやめられなかったらしい

夏目は急いで柴田を呼びに行こうとしたが止められた。しかし代わりにお願いされた・・・別れが書かれた文を渡してほしいそうだ

夏目達は柴田の元へ急ぐ

柴田はベンチに座っていた

「柴田」

「！」

夏目は息を切らしながら言った

「・・・よかった　ここにいた・・・」

「夏目！？」

ふいつと柴田はきびすをかえすと夏目は慌てて止める

柴田は話しずらそうにしていたら村崎から手紙を預かって来たと言目は伝える

しかし柴田は怒りをぶつけた。

探したのに自分は会えなくて夏目に会えたのだから

「柴田！　柴田　村崎からだ大事な手紙なんだ！いいから受け取れ！」

夏目は渡す　柴田はゆっくりと文を開いた。

「・・・何だ　これ」

「え？」

「あっしまった」

「むかしお前を信じなかったからか？強引にまきこんだからか？

だから・・・こんなラクガキ・・・からかっているのか・・・？」

それは妖文字だった。人からみればラクガキに見える。

「違うんだ柴田」

「・・・だからもう構わないでくれ」

ぐしゃと文を握りしめる。それを見た夏目と月詠は柴田の腕を掴んだ

「おれのことには信じなくてもいい でも

この手紙だけは持っていてやってくれ」

夏目の真剣な表情に思わず手を振りほどく

柴田は文を持ったまま去っていた。その後ろ姿を見ているしかなかった

夏目達はとぼとぼ歩く。その時だった

「夏目 夏目」

なんと柴田が戻って来たのだ

「教えてくれ 村崎は今どこにいるんだ」

「柴田・・・村崎は」

「お願いだ 会わなければいけないんだ やっぱり読めないし
何書いてあるかわかんねえけど 村崎が会いたがっている それは
わかるんだ」

その言葉に夏目と月詠は思わず笑顔になってしまった

「わ、笑うな 自惚れで言っていると思ってるんだろ」

とにかく夏目達は柴田を村崎のいる山藤の所へ案内する

「おいどこ行くんだ」

「こつちだ この森のずっと奥に藤の根が・・・」
すると何かに気づく

少し離れた所に村崎がいたのだ

「村崎」

柴田は急いで彼女の元へ走りよる

「だめね来ちゃうなんて 遠くへ行くからもう会えないっ書いたで
しよ??」

でも彼女は微笑んで言った

「でも約束だったわね　行きましょう柴田　連れて行って　いつも
みたいに」

「ああ」

柴田は村崎の手をしっかりと握った

そして二人は川縁の丘を一気に走る。村崎は楽しそうだ

「柴田」

村崎は少しずつ消えて行く

「ありがとう」

こうして村崎は遠い所へのぼっていった

柴田はばすんと倒れ込む

「柴……」

「……ごめんな　ごめんな　夏目ひどいこと言ったのに
……最後まで付きあってくれて　ありがとうな夏目」

「おい夏田」

「え……?」

「このことは絶対に誰にも話すなよ　おれが泣いたってことだよ
／＼／＼／」

「ああ　いいよ」

「何だその返事　スゲーなまいき」

「あつしまった。一人だけばれてる！」

「何!?!」

その言葉に柴田は慌てる

すると夏目の隣に半透明の月詠が現れた

「こ・・・こんばんわー」

「うおっ犬耳っ!!誰だこの女の子!?!」

「月詠って言つて父親が犬妖怪、母親が人間の半妖。

つまり妖怪のハーフなんだ」

「今日はずっと夏目達のそばにいたんだ。ごめんね　びっくりした
でしょ」

「あー、お・・・おどろいたな。」

柴田は月詠の登場に驚くしか無かった

すると柴田が夏目達に言ってくれた

「今日いろいろ付きあってくれたからハンバーガーおごつてやる」

「・・・あつ・・・ありがとう」

しかしだった

「・・・はんばあがあつて何?」

「えっ?」

「あつ月詠は洋物は知らないんだつた。えーと、とりあえず美味しいから

人間の姿になつて」

「んっわかつた」

人間の姿になつた時、また柴田に驚かれてしまった
とりあえず夏目と柴田は好きな物を、月詠は夏目に頼んで
無難なチーズバーガーにしてもらつた。

「……おいしい。」

「だろ？」

「月詠はこういう気軽な食べ物を食べそつないイメージなのに」
失敬な。女中に内緒でおにぎり作つて食べたよ。

……ぼろぼろで塩っからくてお婆さまに笑われたけど……
／／／／

「……」

第46話 月分祭 プロローグ

月詠が阿吽を連れて原っぱで散歩している時だった
遠くには夏目とニヤンコ先生の匂いがする。彼らも散歩かなと思っ
たら

「おりゃー」

何かが夏目の方向へ来る

「おりゃー」

「夏目様おかく」

ぞぞぞぞぞ

「おかく」

「わーーーーーっ!？」

「夏目様」

夏目の悲鳴が聞こえた。月詠は阿吽とともに急いで夏目の元へ走る

「ぎゃーニヤンコ先生」

「ん? あっ」

ニヤンコ先生はようやく夏目が謎の白笠集団に追いかけている
事に気づく。

月詠達はその姿を目に捉えた

「夏目様お待ちをーお願いがあるのですー」

「だったらあなた達が止まりなさいっ!」
「ばきつどこっほこっどすっ」

「ぎゃあっ」「ぎゃあっ」

「月詠っ!?!?」

「まったくあなた達、夏目は基本的に話は聞いてくれるんだから
追いかけてなくてもいいのよ?」

「ああ・・・話は聞くつて言ったのに・・・お前ら・・・」

呆れながら白笠集団に言う月詠と夏目、するとニヤンコ先生は

「お前から何者だ? わずかだが神々しい気が感じるぞ」

「我らは豊作の神とされる豊月神様におつかえする白笠衆です。」

「かつて人は我らの主、豊月神様と地枯らしの神、不月神様を模して
勝負をし豊月神様の勝ちの舞を舞って豊作を願うという十年に一度
の祭り、

月分祭を行っていました」

「今では当の両神様が行っています・・・」

「へえ・・・そんな祭りがあるのか・・・」

「(んー月分祭・・・どこかで聞いた事が・・・でも不月神が
勝つたら大変じゃない」

月詠の言葉に白笠衆達は頷く

「実は・・・三年前豊月様が理も陸に知らぬ被い人に封じてされ
ました。」

「我らは急いで封じられた石を探したのですが見つけれませんでした
した」

「でも明日は祭り・・・山が枯れ山になってしまう」

「お願いです、夏目様。封じられた豊月様の化けて

何とか不月様との勝負に勝ってほしいのです。」

「お願いします、夏目様」

「お願いです、あの山に棲む妖たちも困るのです。」

「・・・夏目」

「・・・仕方ない、ここまでお願いされたらやるしかないか」

夏目の言葉に歓喜の言葉をあげる

「ありがとうございますっ」

「なんとお礼を言えばっ」

しかし文句をいう奴がいた

「ちょっと待てっ夏目、月詠勝手に決めるな」

「ちなみに三隅の山には美味しい酒が湧く泉がありますよ」

「何い!?!」

ニヤンコ先生は驚く 三隅の山の泉から湧き出る酒は

それはそれはとても美味しい噂なのだ

「夏目、月詠行くぞっ!!モタモタするな!!」

「はあ」

呆れるしかなかった

夏目は帰ったあと塔子さんに友達の家泊ると伝える

そして月詠、ニヤンコ先生とともに白笠衆の案内で三隅の山へ行った

当日顔見知り会ってしまつのは三人はわからなかった

第47話 月分祭

当日夏目は豊月神の変装するため支度をしていた。

月詠と白笠衆はそれのお手伝いだ

白い着物を着た夏目は豊月神の面を見て呟く

「……………派手だな」

そう思うのも無理もない牡丹の花の冠に鹿角の面なのだから

「ん————顔を隠せるからまだ良いよ」

「さっ夏目様 お付けください」

夏目は仕方なく付けることにした

「ど……………どうだ」

おそろおそろ聞いてみると

「おおっお似合いですぞ！夏目様！」

「豊月様が目の前にいるようだ」

「夏目 似合うよ」

「馬子にも衣装だな」

「今はそれを言うな」

夏目はニヤンコ先生にツツこむ

するとふと月詠はじつと夏目を見る

「どうしたんだ月詠？」

「んーこの面どこかで見た事あるんだよね。どこだったかな？」

白笠衆たちも

「私たちも月詠様をどこかで見かけた気がしますよ」

「……………ん————」

月詠と白笠衆は頭をひねる

とりあえずこの疑問は後回しにし

夏目を神輿に乗せ原っぱに出発した

夏目を乗せた神輿はゆっくりと厳かに進む

「（知るか阿呆!）」

「（多分この山関係とか?）」

一方、名取はというと

「・・・柊」

「はい」

「・・・今 夏目と月詠ちゃんにそっくりな妖が・・・」

「いえあれは夏目と月詠です」

「・・・」

柊にしつかり答えられてしまった。

その後名取に合流した後はいろいろ大変だった

なんでゴージャスな格好しているんだと彼にツッコまれたり

白笠衆から名取が封印したんじゃないかと誤解されかけた（すぐに解けたが）

不月神のお付き、黒衣衆と一悶着したりと・・・

名取は不月が勝つならそれを被わないといけないと言った

ニヤンコ先生は言った

「あいつらに被わせたくないなら そういう事態にならぬよう踏んばってみせろ

それくらい覚悟もなしにはやり通せんぞ」

その言葉に夏目は面にぐつと力をいれた

どどん どどん

遠くから太鼓が鳴り響く

「ああ」

「おお祭りがはじまる」
「参りましょう豊月サマ」

「夏目」

「柊、月詠」

「名取さんを頼むよ 月詠もおれの手伝いよろしくな」

「ああ」
「うん」

「ブタ猫もすっかり仕事をしろよ」
「ああ・・・何!？」

ブタ猫と言われ、すっかり仕事をしろと言われ
シヨックを受けるニヤンコ先生だった

しゃらん

「よし 行くぞ」

夏目は白笠衆と共に会場へ行った

第48話 月分祭

月詠と阿吽は原っぱで豊月神様に変装した夏目を見守る

すると反対の方から豊月神様によく似た面を被った神が神輿に乗って現れた

あれが不月神様だろう

どんつとどん

太鼓が鳴り響く

司会の妖が今回の勝負を説明する

「両神様 よくぞ三隅の山へお越しく下さいました

今宵の勝負にて この山の祠に就いて頂くお方を決めさせて頂きます
占いましたところ今回の勝負は「狩り」

そして妖はある壺を見せる

「この壺より呼び出します獣を先に捕まえたほうが勝者といたしま
しょう」

「おおーおおーおおー」

今回の勝負は狩りだった。獣を捕まえる・・・夏目には分が悪い

「宜しいか では」

妖は壺の蓋に手をかける

「始め」

どん

開けた途端ゴォツと出て、びゅつと一気に飛んで行った。月詠には
見えたが

夏目には何が出たかわからなかっただろう

するところーん大鈴が鳴り始めた

「大鈴が鳴った」

「おお」

「月分祭の始まりだ」

不月様は夏目に向かって一言言った

「勝負」

そして獣を追跡する

「不月様に続け」

「負けんぞ豊月神」

黒衣衆も不月様に続いた

「おお不月様一行が行ったぞ」

「風のようにだ」

月詠から見て夏目は呆然としているしか見えなかった
すると白笠衆が夏目に何か話しかけていた。

おそらく追いかけるのを促しているのだろう

「おつ豊月神様達も行くようだ」

「がんばってくださいーい」

夏目たちが見えなくなった後

「阿吽、なつ・・じゃなかった豊月神様を追いかけるよ」

そう言つて阿吽の背中に乗る。月詠が乗つたと確認した後

夏目たちが進んだ方向へ飛んだ

暫く飛ぶと夏目達を見つけた

「夏目っニヤンコ先生」

「あつ月詠」

「月詠か」

「どこいくの？白笠衆達は？」

「狩りは難しいだろうから封印探しを頼まれた」

「見えるだろ？あの廃屋だ。あの廃屋辺りで封印され、

裏の森から河原の辺りまでのどこかに落ちたらしい」

そう言つて小さな腕で廃屋を指した

「それじゃあまず廃屋から探そ。二人とも阿吽に乗つて」

そして三人は阿吽に乗り、到着した後は廃屋内を探し出す
ガタタ

「何かいる……」

ぬ……

「む 何だ お前らか」

「出たな 化け物」

ごっ

「ぎゃっ」

「何かあったの!？」

「ニヤンコ先生どうした……あっ」

「名取さん」

「夏目!月詠ちゃん!」

どうやら入ってきたのは名取達だった。そのせいでニヤンコ先生は
白笠に棒で殴られてしまった

夏目は今回の勝負や目標である妖を出来る限り追いかけたが人には
難しいので

封印探しの方をお願いされたことを説明する……が

名取に黒い笑顔をされた……怖い

ニヤンコ先生は勝率がさがったと言った

名取もそういうことだねと言いたため息つく

そんな名取に夏目と月詠は言った

「白笠達だけじゃない 先生や月詠、柊だっています

何としても豊月神を見つけましょう」

「三人だったらなんとかなるかもしれない」

「夏目……月詠……」

「……む?」

「ん？」

ニヤンコ先生と月詠は何かを感じ取る

「さがれ夏目」

どろん

ニヤンコ先生は元の姿になると

「近い 獣の気配がする」

たっ

「お前達はここにいろ」

ゴオツ

「先生……」

どどん近づいてくるのがわかる するとすぐ後ろに獣がいたのだ

名取は束縛用の紙人形を投げる しかし獣は噛みちぎり

名取をだんつと倒す

「主様」

「名取さん やめろ この……」

夏目は獣の尻尾を掴む しかし ばしん

だんつ

「あっ」

手すりに体をぶつけ落ちそうになる

「夏目」

「夏目さま」

柊が急いで掴んだがやはり落ちてしまう

獣はそのスキに逃げた

「くそつ 獣め 逃げたか……」

月詠と名取は手すりに走りよる

「夏目」

「柊」

夏目と柊は下の川にばしゃん ばしゃん と落ちてしまった

「夏目 柊」

「ど……どうしよう……二人が……」

「おい月詠獣が飛んで行ったのが見えたが……」
丁度ニャンコ先生が帰って来た

「ニャンコ先生つ夏目と柎が獣のせいで川に……
どうしよう水で匂いが消されているし……」

「とにかく二人を探そう……」

名取たちは川を中心に夏目達を探す事になった
しばらくして月詠は感じ取る

「っ……血の臭い」

「何!」

「どつちだい!?!」

「あっち……しかも不月神達もいる急がないと」

名取はニャンコ先生に、月詠は阿吽に乗って夏目達の元へ飛んだ
そして夏目達が視界に入る

「夏目」

名取は夏目と柎を掴み、ニャンコ先生に乗せ一気に飛んだ

「うっ……」

「夏目大丈夫!?!」

となりには心配そうに訊く月詠と見つめる阿吽

「夏目ケガを」

「大丈夫かすっただけです」

柎は気絶しているだけで廃屋で休ませる事にした

そして夏目は言う

下流の辺りに気配を感じた。豊月神の封印がああ辺りにあるかもし
れないと

そしての場所に到着した

「この辺かい?」

「はい……たぶん」

「川底?」

「……いいえ少し上のほうに熱のような光が」
夏目は月詠とともにきよるきよる探す

少ししてそれらしいものを発見　しかし下なので降りられない
ニヤンコ先生なら大丈夫だと言ったその時

「夏目危ないっ」

べろり

獣に顔全体を舐められた

「なっ夏目」

「一旦その岩場に隠れるぞ」

どうやら血にひかれてきたようだ

ニヤンコ先生は獣を食って首以外を持って行くのだというが……

「「駄目だろそんな神様」」

却下された。

すると名取の提案、元々不月神を封印するための呪詛と壺で捕まえ、
持って行くという話に決まった。これのほうはまだマシだからだ

名取は獣にむかって紙人形を投げる

ひらひらと周りを動く紙人形が鬱陶しそうだ

「おい獣　こっちだ」

獣はしげみにつっこむ

そこには名取と壺を構える夏目。

札が刺さった四つの棒が立っており獣の足下には陣が書かれていた

「古土に御座す影ならぬ者　これを掴むは是」

ぱんつと両手を叩き

「示されよ」

しゅるり

「ぎゃん」

「夏目」

「はい」

そして獣はしゅるるるるる……と入って行き

どんっ

「う……」

出来た————！！

なんとか封印した

だがまだ安心できない
ただ

さっきの光を見てく黒衣衆が集まって来

名取はここで足止めを、月詠は阿咩とともに豊月神の封印を探す事
になった

夏目は走った。足が怪我だらけになりながらも

「月詠ちゃんっ！見つけたかい!？」

「はいっニヤンコ先生、名取さん阿吽に乗って下さい。会場に急ぎますよ」

「わかった」

「月詠、名取の小僧 夏目なら封印をとけるだろう」

「うん」

ニヤンコ先生と名取は阿吽に乗る。阿吽は全速で飛んだ

会場に着いたがお面を取られ、夏目が危ない感じになっていた

「月詠先に行っているぞ」

ニヤンコ先生は元の姿になり不月神の前に立ちふさがった

「先生 だめだ」

「獣、不敬である」

降り立った月詠と名取は夏目をぐいっつとひっぱった

「月詠、名取さん」

「夏目これを」

「夏目なら この封印がとけるだろうと先生が」

トクン・・・と暖かい石、夏目は力をこめる
カッ

「あっ」

「きゃっ」

「夏目っ月詠っ・・・」

ざわざわ

『ヒック・・・ヒック　　ぢぢぢ？えどー』

妖が沢山いる

昔の月分祭？

泣いているのは小さい私

『おおっ豊月様が勝ったぞ』

『さすが豊月様だ』

どんっ

『きゃっ』

どきっ

『うっ・・・』

そうだ　　うんと小さい頃父上に十年に一度の祭りに連れて行って
もらったんだ

でも妖が多くて・・・父上の手を放してしまって・・・
他の妖にぶつかって転び、今にも大声で泣き出しそうだったとき

『どうした迷い子か？』

『ふえ？』

泣いていた私をやさしく持ち上げてくれた方

『私は豊月神というもの　　名は言えるか？』

『……………つ……………月詠』

思い出した。だから鹿面に見覚えあつたんだ

「世話をかけたな人の子と半妖の子よ」

夏目達はうつむく

「なぜそんな顔をする」

「……………いえ」

「……………そういうわけじゃ……………」

「そうだよ 私にはもう力はほとんどない

聡いことだ あんな封印もとけぬ程だ

祭りに勝ったところで山や森を守る力などもうとつくなくなって
いたのだ」

その言葉にさらに悲しくなった

するとふと前を見ると不月神がいた

「ならばもう 祭りは終いか」

毎回負けているが不月神も祭りを楽しんでいたのだろう

……………その声はどこか寂しそうだった。

「……………ああ 終いだ」

豊月神の答えに

「ならばもう我は この山を訪れる理由はない

ここで朽ちるも勝手だが ともに行かぬか」

その誘いに驚いた。

白笠衆達が豊月神に集まる

「参りましょう豊月様 我らがきつとお守りいたします

参りましょう

夏目様

月詠様

ありがとございました」

「月詠？あの時の迷い子か？」

「はっはい」

「……そうか　大きくなつたな。」

昔話をしたいところだがいかなければならぬ」

「……いえ……豊月神様っあの時は本当にありがとうございました。」

あの時あなたが見つ付けてくれなければ……

ずっと泣いてたかもしれません……」

「ふふ……そうか……」

「お二人とも気をつけてくださいっ本当にいろいろあつたけど　忘れませんっ」

すると豊月神は月詠の頭を優しく撫でた

「……あんなに小さかったのにな……私たちも忘れぬぞ」

豊月神一行と不月神一行が光につつまれる

そして空へゆつくりと飛んで行く　その光景が幻想的で奇麗だった
でもいつの間にか涙を流していた

しばらくして夏目が目を覚ましたらしい

「豊月神一行と不月神一行だよ」

周りの妖たちは手を振って別れを惜しんでいた

「きれいだな　あれはどっちの神様だろう」

「何だか不思議ですね」

「……うん？」

二つの一行は同じ色に光りながら遠い同じ空へと消えた

グラ・・・

「夏目」

どんっ

「ぎゅ」

夏目は寝転びながら言った

「・・・よかったできた・・・ありがとう名取さん

名取さんが来てくれてよかった

おれだれじゃきつとかなわなかった　ひとりじゃきつと出来なかつたんです」

月詠もそのまま聞いていた

名取はくすりと微笑み、夏目を優しく撫でる

「そうだね　そうだね　夏目」

こうして月分祭の幕が閉じた

第49話 封じてあるもの

今日、月詠は夏目と田沼と一緒に出かけていた。しかし途中ポツポツと雨が降り始めた。

「まずいな降り出した」

「雨やどりできるところ探さないと」

「おい夏目、月詠あれ」

田沼の視線の先には立派な屋敷があった

「あの家の門を少しかりよう」

こうして夏目達は門の屋根の下で雨宿りすることになった

「空は明るいから通り雨か」

「これならすぐ止みそうね」

「そうだな・・・しかし立派な屋敷だな」

夏目の言葉に田沼も同意する

「ああ旧家ってやつかな」

でも夏目と月詠には的場の別邸やら柵やら、旧家にはいい思い出が無いのだ

だからできる限り早く離れたいと思っていたら

「お おお おお~~~~」

中からすごい声が聞こえた。夏目と月詠は思わずビクつく

「・・・どうした夏目、月詠」

「田沼・・・」

「あ・・・今 中から変な声が・・・」

「・・・声？」

田沼には聞こえていないようだ。つまり妖の声

夏目と月詠は慌てる

「田沼 もう行こう」

「夏目・・・？」

「早く行きましょっ」

ギイイイイイイ

「！ この匂いは？」

月詠は感じた。とても知っている匂い。それは

「あれ？夏目くん田沼くん？」

「！ タキ！？・・・とニャンコ先生？」

そこにはタキとなぜかニャンコ先生がいたのだ

この屋敷はタキの家だったのだ。夏目達は家に招かれる。
月詠はタキに見えるようにした

「そのタオル使って」

「ありがとう お邪魔します」

「タキちゃん ありがとうー」

「・・・タキの家だったのか」

「タキちゃんの家ここだったんだね」

「広い家だな」

「古くてそうじが大変なんだけどね」

そう言いながらタキはお茶を振る舞う

彼女が言うには雨が降って来たので外の様子を見たらニャンコ先生が
塀の上に居たらしい。そして悪い癖が出てしまった

「気づいたら抱きしめてしまっていたの／＼／＼／＼」

「まったく いつになったら加減を覚えるのだ小娘！！」

こんな薄っぺらい羊かんで許すと思うなよ」

つまりあの声はニャンコ先生の声だったのだ。

夏目は問う。何でタキの家に来たんだと

実は夏目は雷が苦手で鳴りだしたら怯え顔を見物しようといってきたそうだ。

意外な弱点に田沼、タキ、月詠は

「……へー」「」

夏目は大慌てだ

「あーでも残念ながら晴れちゃったぞポン太」

「あ 本当だ」

「ちっ」

それを聞いたタキは

「よかった 蔵掃除の途中で困ってたんだ」

「蔵掃除？」

「時々空気を入れかえたりハタキをかけたりにしているの結構広くて時間がかかってしまっ」

その言葉に皆は手伝う事にした

「へえ じゃあ雨やどりのお礼に手伝うぞ」

「そうだな」

「うん」

「！ 本当？ありがとう！」

こうして夏目達はタキ家の蔵掃除を手伝うことになった

蔵はなかなか立派な物だ

「………でか」

「おお立派だな」

「父上の城にもかなりの数の蔵があるよー」

「えっ城？」

「月詠のお父さんって西を根城にしている大妖怪だって……」

「あー……なるほど」

なんとなく理解できた田沼であった

月詠は嗅覚が鋭いので鼻と口を布で隠して準備完了
そして夏目達と共に蔵の扉を開く

「・・・こういう本格的な蔵って何かどきどきするな」

「そ、そうだな お宝とかありそうだ・・・」

「先祖代々のとか？」

ギイイイイイイイ

人間サイズのこけしだった

ばたんっ

三人は思わず勢いよく扉を閉めてしまった

「ん？どうかした？」

「・・・(何今の!!)」「」「」

とりあえず事情を話す。こけしは魔除けらしい。
しかし魔以外も避けそうだと月詠は思っている。
実際田沼もそう呟いていたのだから

「そういえばタキの家は確か陰陽師のようなことを」

「ずっと昔の話ね」

けどタキの祖父は妖に惹かれていて、いつか見てみたいと色々研究
したようだ

「じゃあ夏目と月詠と会えてたら きつと感激したんだろうな」

「うっ・・・たしかに・・・」

「きつと大パニックを起こして妖のことを聞かせてもらおうと
猛アタックしてたかも」

「押しに弱そうだよな夏目って」

「おい」

田沼の言葉に軽くツツこむ夏目

この蔵にはそんな祖父の遺品がたくさんあるらしいのだが
タキの父と母は気味悪がって近づきもしない。

だから掃除するのはタキしかいないのだ

「だから手伝ってもらえるなんて本当に嬉しいの　ありがとう」

タキの笑顔は心から感謝していた

夏目達も笑顔になる

「じゃあまず手分けして窓をあけてまわろう」

「」「」「お」「」「」

四人は窓あけを開始する。少しした後だった。

これから月詠は田沼と共に上の階の窓を開けに行くのだが夏目の様
子がおかしい

二人は夏目に声をかける

「夏目」

はっ

「どうした顔色悪いぞ」

「埃臭いし、カビ臭いから気分悪くなった？」

「田沼・・月詠　いや・・そつては終わった？」

「ああ　俺達はこつちと上の階」

夏目は深いため息つきながら田沼達についていく

「こつちに窓は・・・ん？」

そこには人が立っているかのごとく真っ白な着物が三枚飾られていた

「」「（こわ！！）」「」

当然三人は青ざめた

「び・・・びつくりした着物が・・・」

「人が立ってるのかと思った・・・」

「なんで畳紙に仕舞わないのかな……」
するとタキが苦笑いしながら説明する

「ごめん それも魔よけのおまじないなんだって」

「……（本当に変わった人だったんだな）」

「蔵の中はこんなばかりだから心してね」

「……（マジか……）」

パタパタ

「……」

「……」

「怖くて別行動できないね……」

「そうだね」

ず……ず……

「……おもい……」

箱を移動させようとする夏目 しかしおもいのかあまり動かない

その後ろで田沼が違う箱をひょいっと持ち上げる

「夏目もつと肉を食え」

「そうね食べたほうがいいと思う」

が……

田沼とタキの言葉にショックを受ける夏目 するとその時だった

「タキちゃん、この箱はどこに置けば良いの？」

「あーそれは……きゃあっ月詠ちゃん!？」

「うわっ二つもっ!？」

「すげーな……」

月詠は箱二つ軽々持ち上げていたのだ
箱を下ろした後

「んー・・・父上と叔父さまの方がすごいよ？」

父上は鬼（悟心鬼の事）の首を片手で持ち上げるし、

父上の異母弟であり私と同じ半妖の叔父さまは岩やら米俵三俵やらを
両手で持ち上げられるし、

あげくに大荷物つんだ自転車と人一人乗せて移動したり、

私なんてまだまだだよー」

笑顔でいう月詠。これでまだまだとは月詠の父と叔父とは一体
そんな風に思う三人だった

こうして蔵の広さと不気味さに圧倒されつつも片付いたのだ

「つ・・・疲れた・・・お疲れさま・・・」

夏目、田沼、タキはぐったりとしていて月詠はそんな三人を心配そ
うに見ていた

「ごめんね　こんなに大変だとは・・・」

「いいさ明日は休みだし・・・それに

どきどきしてちよつと楽しかった」

その笑顔に田沼達も

「そうだな」

頷く

お腹がすいたのでタキがヤキソバを作ってくれるそうだ

四人は母屋に行こうとした。

すると魔よけの着物が一枚足りない

夏目と月詠は片付けたのか聞いたがタキは片付けていないという

田沼も二枚ちゃんと言った

あの一枚は……妖？

「……タキ……あのさ」

「何？」

「……いや　　うまいなヤキソバ」

次の日やっぱり心配になった月詠はタキの家に行った

夏目とニャンコ先生、田沼がいた

「月詠……」

夏目は先ほど田沼に事情を話したらしい

夏目は聞いてくれるってわかっていた。でも誰かに話すなんてなかった

「どう話せばいいかわからないんだ」

「ああ」

そして田沼は言ってくれた

「でもまあ　おれはもう事情は知ったわけだし

さっそくタキの様子を聞きにいくか」

「「え……」」

夏目と月詠は少し驚いたが

「ああ」

「うん」

しっかり答えた

「ごめんくださーい」

「タキちゃんいますかー」

「ごめんください・・・」

ひらり

ひらり

いた　　着物妖怪が

「いたー」

「うわー」

「えっ」

するとちょうど良いのか悪いのかタキが現れた

「あれ？三人ともいらっしやい・・・着物がどうしたの？」

「！タキ・・・」

「む・・・」

「あっ」

ニヤンコ先生と月詠は何かを感じ取る

「手がついたか」

「全部戻ったら危ないにおいね」

「え・・・」

どろんっ

ニヤンコ先生は元の姿なり月詠を乗せて着物妖怪を追いかけた

「！ 先生、月詠」

とにかく夏目はタキにも事情を話す事にした

あの白い着物妖怪の事を・・・

第50話 封じてあるもの

ニヤンコ先生と月詠は着物妖怪を追いかける。
しかしだった。

ごんっ

「うっ」

「ぎゃっ」

がんっ

「痛っ」

「ぐあっ」

どんっ

「ぶぎゃっ」

「うあっ」

どろんっ

タキ家の上空にはなぜか板のような結界が張っており、
ニヤンコ先生達はぶち当たる

そのせいで着物妖怪を見失い、ニヤンコ先生は招き猫になった

そして二人は

しゅーーーーー

ずどんっ

「いっ」

「痛っ」

しげみに落ちた

「わっおい今何か落ちてきたぞ」

「え・・・わっニャンコ先生、月詠」

「いたたたた・・・」

夏目は目を回しているニャンコ先生と

落ちたショックで痛がっている月詠を見て驚いた

とにかく夏目はニャンコ先生達に着物妖怪の正体を説明する

タキの祖父慎一郎は資料見ながら厄封じの術を行ったらしい。

彼は気づいてなかったが成功しておりタチの悪い妖を封じたそうだがそれがあの着物妖怪。そいつは古い人形の妖で封じられたはずみで体が

家中に飛び散った。蔵にあったのは胴体だそうだ。

「そして この家中に散らばっている手足を探しているということか・・・」

その言葉に田沼とタキはぞっとした

「で その胴を追っていた先生達が何で降ってくるんだ
右足を取り返されたんだぞ」

ニャンコ先生は出されたロールケーキをやけ食いしながら

「あっそうだった まったく!!」

この家の上空には所々板のような結界があつて

いちいちぶちあたっているうちに見失ってしまったのだ」

「本当に痛い目にあつたよ」

月詠も痛かったと不貞腐れる

「・・・結界？」

ニャンコ先生が言うにはどうやらタキの祖父慎一郎が

結界の呪文を口に出して読んだらしい

「この家には そういう半端で未完成な呪いがあちこち残っている

のだ」

「そういうこと出来るのか・・・？」

夏目の問いに月詠とニャンコ先生が答える

「素質はあつたんだね」

「ただ視覚、聴覚、触覚のどれも妖の波長と合わず

見ることは叶わなかったのだからうな」

「・・・」

「で 夏目さつきから お前の肩にのつているそれはなんだ」

「え わあっ」

肩にのつている人形の妖のことを教えてくれた妖を見て驚く夏目
妖が見えない田沼とタキはというと

「どっとうした夏目 何かいるのか!？」

「あ・・・ああ 人形の妖のことを教えてくれた妖が・・・」

「妖怪がいるの!?!そこに!?!」

じーーーーーっ

「・・・」

二人は夏目の肩を一生懸命見る

夏目はその視線が痛かった

ザザザザザ

「わあ!?!」

「何!?!」

田沼達は聞こえなかったようだが夏目と月詠にはたしかに聞こえた
上で何かが這いずる音が・・・

ニャンコ先生は先に行く、夏目と月詠が後を追いかける

田沼とタキも三人を追いかけた

ニヤンコ先生は居ない 追って行った様だ

妖は廊下を見てあいかわらず日当りの微妙な部屋が多い家だと懐かしむ

「まさか 慎一郎さんが見えないのをいいことにからかったりしなかっただろうな」

「あ・・・ありえそう・・・」

「む？そりゃあ・・・お前達・・・」

うひひひと笑う妖を見て確信した。絶対からかっている

「お前!!」

「絶対からかったでしょっ」

すると妖はある窓を示す。その窓の近くでどうやら慎一郎さんは小さい頃から

妖についての書物を絵本のように読み、見てみたいと言ったらしい近くに自分たちが居るのに気づかない姿が面白かったそうだ

「ああ懐かしい 懐かしいよ慎一郎」

妖の声はどこか優しかった

「夏目くん、月詠ちゃん」

「タキちゃん」

「タキ、悪い 勝手に・・・」

ガザザ

天井から聞こえた

夏目達は押し入れの布団を出し、天井へ行ける板を外す

ガコッ

「あ」

「あいたぞ　ここからあがれる」

こうして夏目と田沼が天井裏へ行く事になった

「でっかい虫とかいたらおれ悲鳴あげるからな」

「たぶんおれもだ」

そして天井裏を覗き込んで少ししたその時だった

「う　わあ「夏目!？」　あああ」

この悲鳴を聞いて月詠と夕キは急いで夏目と田沼の服を掴み引つ張る

どさっ

「!」

どさっ

「うっ」

「いてて」

いきなりだったため全員受け身を取れなかった

すると一番に気がついた夏目はぴしゃん　と急いで押し入れを閉めた

とりあえずみんな無事だったが人形妖は

左足も取り返してしまった

第51話 封じてあるもの

とりあえず夏目達は一旦庭にでる事にした

「ごめんね急にひっばって・・・大丈夫？」

「痣とかこぶとか出来てない？」

タキと月詠は心配そうに夏目と田沼に訊く

「ああ タキ達がいってくれて助かったよ ありがとう」

夏目の言葉にタキと月詠は ほっ・・・と胸をなで下ろす

「ポ・・・ニヤンコ先生はどうしたんだ？」

一応夏目の用心棒なんじゃなかったか？」

田沼の問いに夏目は

「じ、自称だから・・・」

胸を張って言えなかった

「おいこら私にも礼を言え小僧」

肩に乗っている妖の言葉に夏目はそうだったと礼をする

「ああ そうだったな ありがとう」

「夏目くん月詠ちゃん

ひよっとしてまださっきの妖さんがそこに？」

「あ ああ」

「うん」

すると二本の角が生えた老人のような妖と全身真っ黒で一つ目の妖が現れた

どうやらこの妖達もタキの祖父慎一郎のことを知っているようだ

しかもタキを見て

「やや、しかし慎一郎がいるぞ」

夏目とレイコを間違えるように妖達はタキと慎一郎を間違えていた

肩の妖は間違いを訂正する

「違うぞ あれは孫娘というやつだ 慎一郎の葬式の時
いつまでもびーびー泣いていた奴だ」

「おお そうだった つまらんのう」

その声はなんだか寂しそうだった。

「夏目くん月詠ちゃん その妖さんってどんな妖なの？」

タキの問いに二人は微笑みながら答える

「タキちゃんのお爺さまのことを小さい頃からよく知っている妖なの」

「・・・おじいさんのことを 結構好きだったみたいだよ」

「え」

タキはその言葉に嬉しくなる。だって妖が祖父のことをよく知っていて

しかも好きだったのだから。きつと彼が聞いていたら大喜びするだろう

すると妖は勝手なことを言うなとポカポカと殴りだす

「下等な慎一郎など我々のただのおもちゃだったのだ」

「いてついで」

「こらっ殴らないでっ」

「夏目っ月詠!？」

その姿に妖達は珍しがる。慎一郎とは大違いと言った

妖は忠告する。人形妖カクラの、残りの右手と頭を取り戻せば
どここうできる相手ではないと。

どうすればいいんだと言う夏目の問いに妖は

「災いが訪れる前に逃げればいい

お前がこの家に残る義理などなかるう」

「友人の家よ」

「このまま放つては帰れない 何か知っているなら教えてくれ」
その言葉に老人のような妖は呆れる

まあ仕方がなく一つ目の方を見た

一つ目は目を閉じてむにやむにやとする。そしてぱちりと開いた

「見えた奥階段下の物置のなかに右手の気配……」

その言葉を手がかりに奥階段下の物置へ行く事になった

しかしその途中だった

するする

「……」

カクラが後ろから現れ夏目と月詠を巻き込む

「タキ田沼逃げ……」

「早く……」

ずっ

二人はカクラに攫われてしまったのだ。それに気づいた田沼とタキは急いで

家中を探し出す その頃夏目達は蔵に居た

「……おい起きろ小僧共 起きねば右腕を切られるぞ」

ぶんっ

「わぁ」

ガッ

夏目と月詠は慌てて避ける

目の前には左手に斧を持ったカクラが居た

「!……カクラか!?……ここは……」

「カビ臭い……まさかここって……」

「蔵だ 見ろ、壁に奴の頭が埋まっているのさ」

たしかに半分埋まっているのが見えた

妖が言うには右腕は見つけられず片手では抜けられないらしい

「だから

妖力の強いお前達の力を吸い取り、腕を自分のものにするつもりら

しい」

「そんな」

「かつての父上みたいなのをやるつもりなの!？」

しかも妖が話している最中にカクラはまた斧を振り上げる

月詠は天響牙を構えようとした

「夏目くん月詠ちゃん」

ガッ

本来のニヤンコ先生が攻撃するがカクラはひらりっつと避ける

そしてばしんつと仕返しした

「ぎゃっ」

「ニヤンコ先生・・・」

「夏目、月詠」

「月詠ちゃん、夏目くん」

「タキ 田沼」

ひゅっ

ひゅっ

「あ」

何かが通り過ぎる そのせいで妖を見る陣が書かれた紙を落としてしまっ

「あぶない 来るな」

「来ちゃ駄目っ」

ひゅん

「ええい ちょこまかと狙いがさだまらん」

ひゅっ

「ニヤンコ先生・・・」びっ「うっ」

その光景を見ていた妖たちは

「やれやれ見ておれん」

「まっただ」

ぱたた・・・

たくさん小さな妖達がカクラを押さえつける。

おかげでカクラは思うように動けない

「いいぞ そのまま おさえてる」

「先生待っ・・・」

カッ

そして夏目は気絶した

「夏目くん」

「夏目」

「しっかりして」

「・・・タキ 田沼 月詠・・・はっカクラは!？」

夏目は慌てて訊く。

「くわえて遠くに捨ててきたぞ」

「先生・・・」

すると妖たちは窓から帰って行く

「もう行くのか」

妖達は二度と来るかと言った

夏目と月詠はタキに窓に居る妖達が助けてくれたと説明する

妖達は面白い物があるからなど言い訳にしか聞こえない事を言った
そんな妖達にタキは

「ありがとう 本当に・・・本当に・・・」

おじいちゃんに会いに来てくれて・・・ありがとう
涙を流しながらお礼を言った

その時だった

カサリ

「さらば 慎一郎の孫 元気で」

タキは妖が見える陣が書かれた紙を見たが何も居なかった

でも代わりに・・・とても覚えのある、やさしい良い匂いがした

「このにおい・・・私知っているわ 祖父が亡くなって泣いていた時

この花のような優しいにおいがしたの」

「・・・いいにおいだね」

「・・・うん」

こうして人形妖カクラ騒動は収まった

その後夏目と月詠が出会った妖達の事をタキと田沼にたくさん話したと言った

第52話 代答

阿咩とともに歩いていたら時だった。

上を何かが通り抜ける。それは人がたの妖に抱えられた夏目だった攫われたようだ。月詠達は追いかける

そして妖は木に止まった

「夏目っ大丈夫!？」

月詠は慌てて叫んだ

「月詠!？」

「ちよつとあんた夏目を放しなさいよ!!」

怒る月詠、妖・ヨビコは慌てて弁解する

「ちつちがう。これには理由があるのだ!!」

そんなヨビコに夏目は

「だったらなおさらだ。ちゃんと話してくれ」

昔 古堂で若い男女が逢い引きしていたらしい

しかしある日から男は来なくなった

男は地元の名家の長男なので様子を見に行くと違う女と祝言を挙げていた。

相手は富豪の娘で傾きかけた家を安泰させるために挙げたという

そんなことを知らずに女は毎日毎日来た。男を呼ぶ声が悲しげだった

「声まねが得意で人に聞かせる力もある私はい……………」

ヨビコは古堂に入り、男の声で彼女に答えたのだ

当然彼女は古堂に入ろうとする。

病でしばらく近づけないと言いつつ訳したが彼女は

「よかった」

目に涙をため嬉しそうに笑ったのだ

ヨビコは悪いと思いつつながら何度も彼のふりをして彼女に会いに行った
「……………こういう想いは何というか……………」

でも彼女が笑う程罪の大きさを知った

そしてついに正体を話した

男が家族のために、もうここへ来れないこと。

自分は近くに住むニセモノだということを

大声で告白し、謝った。彼女はシヨックを受けた顔をしていた

ヨビコはすまん とまた謝って去って行った

ヨビコは旅にでた

それから長い年月が経ったある日、あの古堂に行ってみると

風で飛ばされないように石の置かれている文があった

ヨビコは言う。自分に当てたもので怒りや悲しみの言葉があるのなら

受けとめねばならないと・・・

「もし叶うなら、この文を読んでみたいのだ」

だからそのためにカリカミの力が必要なのだ

夏目達も文の中身に興味を示す。こうしてカリカミ探しを開始された

「おーいカリカミー」

「おーい」

「出て来てー」

「おーいカリカミー名を返しに来たんだー」

その様子を近くの妖たちは物陰からざわざわ見る

「カリカミー大事なものを返しにきたんだーどうか来てくれ」

下等な妖を威嚇するヨビコするとしげみからニヤンコ先生が現れた

「こら夏目、月詠」

「ニヤンコ先生・・・あっ」

ゴオッ

面を付けた真つ白な妖が現れたのだ

「名を返して頂けるとは本当ですか？」

どうやらこの妖がカリカミだろう

「・・・カリカミか」

「長い間縛つてすみません 返します」

そして夏目は例の文を出す

「それと頼みもあるんです」

「この文を元に戻せますか？」

「・・・頼み？命令すれば済むものを・・・よろしい
名を返してくれる礼としよう」

パン

「「借紙」君へ返そう受けてくれ」

夏目は名が書かれた紙にふつと息を吹き込む。

名はしゆるしゆるとカリカミの中に入って行った
どっ

「ぎゃっ」

「夏目」

「しっかりっ」

「確かにお返し頂いた では次はこちらの番」

例の文を軽く投げ、両手で叩き 呪文を唱える
ぱんっ

「ヨキカミカナ ヨキカミカナ」

そして文は新品同様にぴかぴかになった

「大事にされよ」

「……おおおっ」「……」

思わず声をあげる夏目達 特にヨビコは嬉しそうだ

夏目もお礼を言ったらカリカミは伝える

文を書いた女はもうこの世に居ないそうだ

ヨビコは元の古木に帰り、男の家を見守るそうだ

あの文には

『本当のことを話してくれてありがとう。』

そう書かれていた。人の字を読めないヨビコは不安そうに訊く

夏目たちは笑顔で書かれている事を話した

「「本当のことを話してくれてありがとう。」って書いてあります。」

「ヨビコさんのこと許してたんですよ」

その言葉にヨビコは肩の荷が下りたように

「……そうか……」

微笑んでいた

第53話 妖しきものの名

今日、月詠は夏目の家に遊びに来ていた。

夏目はまだ帰っていなかったので待っていたその時だった

「先生 ニヤンコ先生」

「あ、帰って来た」

「む？何だ夏目騒がしい・・・」

よろり・・・

「・・・やばい・・・何か変な奴に・・・」

帰って来た夏目はどんよりと青ざめていた

そしてぱったりと倒れる

「あ あなた・・・祟りを受けかけているじゃないっ」

「私の獲物に手を出すとはこのどいつだ!!」

その問いに夏目はうなされたように呟く

「うう・・・お・・・おばに・・・やられた・・・」

「お、おばば!?何か怖いよ・・・!!」

「おいしっかりしろ夏目!!」

月詠は青ざめ、ニヤンコ先生はさすがに心配し

夏目をぺしぺし叩いて起こそうとした

夏目が心配な月詠は泊まる事にして三人は早めに寝る事になった
でも・・・真夜中

ばん

「ボウヤ」

びく

「ボウヤ」

ばんばん

「ボウヤー」

「な・・・」

ばん

「来ちゃった」

窓の外にはおばばがいた……。真夜中に二階の窓の外に老婆がいるのは

すごく怖い

「「「わーーーーーー！？」」」

おばばが言うには待ちきれなかったらしい

とにかく三人はおばばの妖探しを無理矢理手伝う事になった
家の中に影茶碗の走る音が聞こえる

災いを知らせる足音が・・・

次の日念のため友人帳を持った夏目は月詠達に訊いてみる

「あのおばば、月詠と先生も追い払えない妖なのか？」

「あれはたぶん社持ちだった神格の妖ね・・・」

「小物の妖など触れれば祟りをもらいかねない・・・ふん忌々しい
でもこの時代気を病んだり、弱まっており、

おばばも例外なく目がぼんやりしか見えないようだ。

ニヤンコ先生は適当に付きあって終わらせると言う

「お、このにおい・・・こっちだボウヤ、嬢ちゃん よく来たね」

「拒否権はないんでしょう」

呆れる夏目 すると月詠は何か気づく

「・・・あ 花・・・」

おばばの髪に飾りのように花が付いていたのだ

「ふふふ いい香りだろう見せびらかすため付けてきたのだ」

「そうですか・・・確かにきれいないい香りの花ですね」

「本当にいい香り・・・」

その言葉におばばはご機嫌になり例の妖に会った場所へ案内する
その例の妖は小さい妖なのに災いを呼ぶそうだ

でもおばばはそんな妖から鏡を借りたらしい　でも疑問が残る　危
険な奴なのに

彼女は訳を話した

社の近くの花の老木を可愛がっていたが厄介な悪霊がついてしまった
被うのには鏡が必要で探していたらこの場に鏡を持った妖が座って
いた

奪おうとしたが返り討ちにあい投げ飛ばされてしまったが・・・
でもどうしても鏡がほしいとお願ひしたらくれたのだ

夏目達は良い奴じゃないかと言ったが例の妖は言ったらしい

「自分は災厄を招いてしまうと「人」のことがあまり好きではない
とも」

例の妖の台詞は何だかさびしそうだった

おばばは鏡で被おうとしたがうまく被えなかった。だから返そうと
したのだが

鏡を見るのは嫌いだからと受け取らなかった。でも代わりに時々
会って話すようになった

するとおばばは夏目の左頬を触れる

「こうやって　よく見るとこの辺りに傷があった　妖共を恐れさ
せるのに、

人に作られた傷のようだった」

その言葉に夏目と月詠は　はっとする

おばばは友達になれそう気がしたから住処に連れて行ったら
社をみて少しがっかりしていたらしい

事情を話したら悪霊を被ってくれた　髪に付けている花がその樹の

花だ

「それにしてもなぜだろう お前のおいは奴のおいによく似ている

ああよく見れば その面差しも」

「その鏡・・・おれにもよく見せてください」

夏目は鏡を受け取る　そして裏返すとそこには

『夏目レイコ』と名前が彫られていた

やはり妖じゃなくて夏目の祖母、レイコのことだったのだ

「おばば　おばばが探しているのは・・・」

・・・ザザザ

「・・・つけた　見つけた　やっと見つけた　友人帳の夏目

今度は逃がさん　いただくぞ」

がぶ

「あ・・・」

みし・・・

ばきん「あ・・・っ」

ニヤンコ先生は元の姿になると妖から夏目を奪い返す

カッ

「失せろ」

その光りに怯えた妖は逃げて行った

月詠たちは慌てて夏目の元に駆け寄る。でも骨は折れてないし大丈夫のようだ

ニヤンコ先生に怒られた後夏目は友人帳を取り出しておばばに問う

「おばば、友人帳に名がありますね？」

「友人帳？」

おばばは少し首を傾げたが

「ああそういえば何かに名を書いたことはあったな

それ以来なぜか 奴はここに来なくなってしまったなあ」

「おばば、探してもいないはずだ それはたぶん人の子で

夏目レイコという、おれの祖母だった人なんですよ」

ぱんっ

「アオクチナシ」君へ返そう 受けてくれ」

彼女の名が返されると同時にレイコとの出会いが流れこむ

おばばも思い出したのか

「ああ思い出した 勝負に負けた私は紙に名を書いたが
結局あいつは名乗ってくれなかった」

でもおばばは嬉しそうな笑顔で言った

「そうかレイコと言うのか あの子の名は 夏目レイコ」

そして夏目は自分がレイコの孫だということ、そして

彼女が夏目の母を生んで若くして亡くなった事を話した

「そうか ではもうレイコはこの世におらぬか」

「はい 鏡は持って置いてやってください」

「きっと彼女も喜びます」

「じゃあ帰ります」

「おばば様お元気で」

「ふむ世話になったねレイコの孫と半妖の娘よ

その道をくだっていくと人里に出るよ」

「こうして夏目たちはおばばとお別れする
「さらば ふふ その道をまっすぐだぞ」

夏目と月詠はレイコは今回の事で妖のことを
嫌いになったりはしなかっただろうか

そのように思っていた

「おい夏目、月詠見る」

「「え」

するとひらりと何か落ちる それは花びらだった

そこには満開の花が咲く老木だった

しかもこの花はおばばの髪につけていた花だった

「この花・・・おばばの」

「きれい・・・」

「ああレイコに被ってもらったと言っていたな 人のくせにムチャ
クチャな女だ」

「・・・うん」

「ああ・・・そうだったな この樹をレイコさんが被ってやったの
は・・・」

おばばが妖だと知った後

レイコは妖だと知った上で老木のお祓いをしてくれたのだ

後日知ったのだが走り回って災いを知らせ、
気まぐれに身代わりとして災厄を受ける影茶碗が割れていたそうだ
あの時妖に噛まれたのに骨が折れなかったのは影茶碗のおかげだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513w/>

妖犬友人帳

2011年11月21日22時46分発行